特214
580

思想叢書第二十二輯

勤皇詩歌集

始

特214
580

序

本書は本府思想叢書第二十二篇として主に德川幕府末葉より明治初期に亘る勤　皇思想の澎湃として起つた時代の詩歌を、本府主事佐藤豊吉をして編輯せしめたものである。情操涵養・思想善導の資に利用せられんことを望む。

昭和十三年十月

大阪府思想問題研究會

勤皇詩歌集目次

一　讜獄以前……一頁
二　戊午讜獄……九
三　櫻田義擧……二六
四　東禪寺夜襲……四五
五　坂下義擧……四七
六　寺田屋騷動……五九
七　木像梟首事件……六六
八　天誅組義擧……七〇
九　七卿落……七九
一〇　生野義擧……八三
一一　筑波山義擧……九一
一二　池田屋事件……九七
一三　禁門の戰……一〇〇
一四　遭難横死……一一三
一五　地方殉難……一一七
一六　維新時代……一四一
一七　別裁集……一五九
一八　拾遺……一七九

明治天皇御製

國といふ國のかゞみとなるばかり
　みがけますらをやまとだましひ

いかならむ事にあひても撓まぬは
　わがしきしまのやまとだましひ

山をぬく人のちからもしきしまの
　やまとごゝろぞもとゐなるべき

勤皇詩歌集

第一、讜獄以前

元和假武以來世運の變遷と幕府の奬勵とにより漢學の復興を見たりしが、この間國學も亦漸次勃興し、國史・古典の研究愈々盛になり、茲に我が國躰を闡明し、儒佛以外に我が國古道の存在せるを認識し、尊皇賤覇の說擡頭し來り、その學說の普及は、遂に皇政維新の擧あるに至らしむ。今この間勤皇憂國の志を抱きたる先哲にして、讜獄以前に物故せられし人の遺詠數首を收めて、讜獄以前の卷とす。

山形大貳　贈正四位　明治二四、一二

名は昌貞。字は公勝。柳莊、又洞齋と稱す。所謂明和の獄にかゝり刑死せらる。（二三八二―二四二七）

中秋

くもるともなにか恨みむ月こよひ晴をまつべき身にしあらねば

竹內式部　贈正四位　明治二四、一二

名は敬持。羔庵と號し晩年正庵といふ。明和四年八月八丈島に流謫せらしが病を得て途中三宅島に上陸し十二月五日同島において歿す。（二三七二―二四二七）

贈瀧鶴臺

神州風氣絶妖氣。　君聖臣忠天下聞。西海老儒無實學。未知内外重輕分。

譯讀　「瀧鶴臺に贈る」。神州の風氣妖氣を絶つ。君聖に臣忠に天下に聞ゆ。西海の老儒實學無く、未だ内外重輕の分を知らず。

林　子　平　贈正四位　大正六、一一

名は友直。六無齋と號す。邊防の急をさとり海國兵談・三國通覽等を著はして世人の覺醒に力む。幕府その書に絶版を命ず。寛政五年六月歿。（二三九八―二四五三）

なか〳〵に世の行末をおもはずば今日のうきめにあはざらましを

高　山　彦　九　郎　贈正四位　明治一一、三

名は正之。字は仲繩。上野の人。四方に周遊して志士と交る。寛政五年久留米にて自殺す（二四〇七―二四五三）

比叡山にのぼりて

比叡の山にのぼりて見ればあはれなり手のひら程の　大宮所

題しらず

われをわれと知ろし召すかや　すべらぎの玉の　みこゑのかゝるうれしさ

蒲　生　君　平　贈正四位　明治一四、五

名は秀實。字は君平。伊之助と稱し、修靜庵と號す。（二四二八―二四七三）

勸　學

君のため　國のためとし思はずは雪や螢をなにゝ集めむ

叡山に登りてよめる

比叡の山見おろす方ぞあはれなる今日九重の數し足らねば

偶　成

丈夫三十尚無名。學劒中休射半成。器量總非萬人敵。不知終是一書生。

譯讀　「偶成」。丈夫三十尚ほ名無く、劒を學んで中ごろ休し射半ば成る。器量は總て萬人の敵に非ず。知らず終に是れ一書生。

漫　成

丈夫生有四方心。千里劒書何處尋。身任轉蓬無遠近。思隨流水幾浮沈。笑看尊酒狂先發。泣讀離騷醉後吟。唯賴太平恩澤渥。自將章句託青衿。

譯讀　「漫成」。丈夫生れて四方の心あり。千里劒書何れの處にか尋ねん。身は轉蓬に任せて遠近無く、思は流水に隨つて幾たびか浮沈す。笑うて尊酒を看て狂先づ發す。泣いて離騷を讀んで醉後に吟ず。唯太平恩澤の渥きに賴つて、自ら章句を將つて青衿に託す。

渡　邊　華　山　贈正四位　明治二四・一二

名は定靜。字は子安。通稱登。田原侯の世臣。時政を誹るに坐して禁錮せられ天保十二年十月自盡す。

（二四五三―二五〇一）

麻縄にかゝる身よりも子を念ふ親の心をとくよしもがな

藤田東湖　贈正四位　明治二二、二

水戸藩士、幽谷の子。名は彪、字は斌卿、通稱は虎之助。後誠之進と改む。安政二年十月二日江戸大震あり、彪この日災にかゝりて死す。（二四六五―二五一四）

西東身はへだつとも　み代のため思ふこゝろのふたつやはある

春の初、健次郎が許へ武者繪てふものを送るとて

梓弓はるの遊びのたはふれもふみなたかへそものゝふのみち

梓弓やたけ心をふりおこしひきかへさなむしきしまのみち

嘉永六年仰言によりて海防のことをいそしみ仕へまつりける頃

かきくらすあめりか人に天つ日のかゞやく邦の手風見せばや

題しらず

五月蠅なすあめりかいかに　日の本のかげもくもらぬ　御代としらすや

神風の伊勢のうみべにえみしらを浪もろともにうちくだかばや

言志

俯思鄉國仰思君。日夜憂愁南北分。惟喜閑來耽典籍。錦衣玉食本浮雲。

譯讀　「志を言ふ」。俯しては鄉國を思ひ、仰いて君を思ふ。日夜憂愁南北に分る。唯喜ぶ閑來典籍にふけることを。錦衣玉食本と浮雲。

次韵冢生梅邸卽事四首　錄二

賈生憂憤治安策。歐子孤忠朋黨論。歎息賈歐千載後。策論依舊屬空言。

幽囚不許賦歸歟。衣帶日寬髩日疎。何物尤爲一身累。滿腔盡是古人書。

譯讀　「冢生が梅邸卽事に韻次す。四首、二を錄す」。賈生の憂憤治安の策。歐子の孤忠明黨の論。歎息す賈歐千載の後。策論舊に依つて空言に屬す。幽囚許さず歸歟を賦することを。衣帶は日々に寬に髩は日々に疎なり。何物か尤も一身の累を爲す。滿腔ことごとく是れ古人の書。

八月十八日夜夢攻諳厄利亞（アンゲリア）

絕海連檣十萬兵。雄心落落壓胡城。三更夢覺幽窓下。唯有秋聲似雨聲。

譯讀　「八月十八日夜、夢に諳厄利亞を攻む」。絕海の連檣十萬の兵。雄心落落として胡城を壓す。三更夢は覺む幽窓の下。唯秋聲の雨聲に似たるあり。

失題

環海千萬國。呑噬互作君。誰圖堯舜域。忽爲犬羊群。警戒須及時。天未喪斯文。苟使正氣奪。匹夫敵萬軍。

譯讀　「環海千萬の國。呑噬して互に君と作る。誰か圖らん堯舜の域。忽ち犬羊の群とならんとは。警戒須らく時に及ぶべし。天未だ斯文を喪はず。苟も正氣をして奪はしめば、匹夫萬軍に敵せん。

村田清風　贈正四位　明治二四・四

長州の人、四郎左衛門と稱し、松齋と號す。俗論を排し只管奉公を期し、一藩の重きを爲せり。安政二年五月歿。（二四四三―二五一五）

西北の風ふせぎして暮うてよわが　日の本の櫻見る人

妙圓寺月性　贈正四位　明治二四・一二

周防大島郡遠崎村西本願寺派妙圓寺の住、字は知圓、清狂と號す。人呼んで海防僧といふ。（二四七七―二五一八）

聞下田開港

七里江山付犬羊。震餘春色定荒凉。櫻花不帶羶腥氣。獨映朝陽薫國香。

譯讀　「下田の開港を聞く」。七里の江山犬羊に付す。震餘の春色定めて荒凉たらん。櫻花は帶びず羶腥の氣を。獨り朝陽に映じて國香を薫ず。

送赤川忠亮游水府從學會澤翁

尊奉　天朝斥外夷。一編新論有餘師。丈夫親就其人學。足定神州萬世基。

譯讀　「赤川忠亮が水府に遊び會澤翁に從學せんとするを送る」。天朝を尊奉して外夷を斥く。一編の新論餘師有り。丈夫親しく其人に就いて學ぶ。神州萬世の基を定むるに足らん。

讀横濱會盟載書。憤然而賦。錄二

雖指將軍呼國王。既稱　日本則　天皇。威權久掌征夷職。忍使　神孫屈犬羊。
我雖方外亦王臣。敵愾心期靖虜塵。不分滿廷當局者。講和潤色太平春。

譯讀　「横濱會盟載書を讀み憤然として賦す。二を錄す」。將軍を指して國王と呼ぶと雖も、既に　日本と稱すれば則ち天皇。威權久しく掌る征夷の職。神孫をして犬羊に屈せしむるに忍びんや。我は方外と雖も亦王臣。敵愾心に期す虜塵を靖んせんことを。不分なり滿廷當局の者、講和潤色す太平の春。

聞魯西亞軍艦入攝海驚而作

不嚴兵備扼要津。夷艦飛來攝海濱。方外未能投筆起。愧他燕頷虎頭人。

譯讀　「魯西亞の軍艦攝海に入ると聞き驚きて作る」。兵備を嚴にして要津を扼せず。夷艦飛び來る攝海の濱。方外未だ筆を投じて起つこと能はず。愧づ他の燕頷虎頭の人に。

秋良氏聞夷艦入攝海、率來壯士三十餘人、演武技、使縱觀以洩憤滿。賦謝。

兵庫津東是湊川。微軀願向水邊捐。勤　王一戰如埋骨。永與楠公共墓田。

譯讀　「秋良氏、夷艦攝海に入ると聞き、壯士三十餘人を率ゐ來りて武技を演じ、縱觀して以て憤懣を洩らさしむ、賦して謝す」。兵庫津東これ湊川。微軀願はくは水邊に向つて損てん。勤　王一戰如し骨を埋めなば、永く楠公と墓田を共にせん。

高本敬藏　贈正五位　大正五・一二

名は順、字は子友、紫溟と號し熊本藩に仕ふ。高山正之の來遊に方り交情最も深く心事を披瀝せしといはる、文化十年歿す。（二三九六―二四七三）

中津の儒者梁田正記が論語の崔子弑齊君章を塗抹して武士の子弟を敎へ導くよしを聞きて贈りたる

孔子の文よむ人よりもくじの文消しけむ人ぞ我はゆかしき

誰識丈夫心地清。　世間一樣只偸生。
始可共談烈士情。（小詞一闋）

瓊矛劍閼大蛸洲。　神統連綿幾千秋。
互開港浦彼權謀。　嚴鎖海關吾舊典。
寄語東方諸君子。　縱誇夷砲威犬羊。
勿將姑息誤皇猷。（上中下）　爭及和刀斬虎彪。
（藤川求馬）

鐘　王大義辨來後。

第二、戊午讞獄（安政五年九月）

幕府は天草の亂に懲り、清國・和蘭の外は海外通商を拒絶し、鎖國主義を嚴守し、桃源の夢を樂みつゝありしが、寛政五年露人が漂流者を送り來りて、互市を請へるを首めとし、英米諸國もまた請ふ所あり。遂に安政元年米使兵艦七隻を以て浦賀に來り、前請を申ね決答を得るまでは去らずとて、上陸散歩の爲に、下田沙子島方七里を借らん事を請ふ。幕府之を許す。かくて安政五年、幕府諸外國と假條約を締結して調印を行ふや、宿次奉書を以て之を　朝廷に奏上す。　朝廷深く關東の不敬を憤り勅書を幕府及び十三藩に下す。又朝家の士及慷慨憂國の處士等、　勅許を待たずして締結せしを怒り、尊攘の說を唱へ、公卿の間に出入して幕府を誹議する者多し。茲に於て大老井伊直弼、間部詮勝を上京せしめ、條約締結の事情を陳ぜしめ、傍ら長野主膳と謀り、所司代及町奉行の偵吏に命じ、其動靜を伺察せしめ、九月八日を以て、遂に勤王の志士を拘繫し、安政六年八月二十七日に至り悉く處置決定す。世に之を安政戊午の黨獄といふ。

德川齊昭　贈正一位　明治三六、六

水戸藩主。通稱敬三郎、字は子信。景山又は潛龍閣と號す。戊午の年水戸に禁錮せらる。（二四六〇―二五二〇）

蘭學者へ

蟹文字を讀みかゝすとも我が　國の道横さまに踏みなたがへそ

折にふれて

たゞ見れはなにの苦もなき水鳥の足にひまなきわが思ひかな

敵しあらばいでものみせん武夫のやよひなかばの睡りさましに

後醍醐の山陵にて

愚かなる身も古へに生れなば　君がたのみとならましものを

雖身在邊地心奉　皇室

大君につかへさゝぐるわかこゝろ都のそらに行かぬ日ぞなき

長月のころ或人にきこえける

誰もみなかくぞありたき　國のため　君の御爲と死するものゝふ

題しらず

しき島のやまとの人はおしなべてやまと心のあらましものを

行く末もふみなたがへそ秋津洲やまとのみちぞかなめなりける

函館の關のふせもりこゝろせよ浪のみよする　御代にあらねば

弘道館賞梅花

弘道館中一樹梅。清香馥郁十分開。好文豈謂無威武。雪裡占春天下魁。

譯讀　「弘道館に梅花を賞す」。弘道館中一樹の梅、清香馥郁十分に開く。好文豈威武無しと謂はんや、雪裡に春を占めて天下に魁す。

雜詩

佛法三寶道。久爲斯道憂。腐儒六經敎。亦非洙泗流。彝倫無人叙。何以護神州。永懷耿不寢。長夜何漫漫。

譯讀　「雜詩」。佛法三寶の道、久しく斯の道の憂と爲る。腐儒六經の敎、亦洙泗の流に非ず。彝倫人の叙するなくんば何を以てか神州を護らん。永懷耿として寢ねられず、長夜何ぞ漫漫たる。

安島帶刀　贈正四位　明治二四、四　合祀　明治二二、五

名は信立、初め彌次郎後に帶刀と稱す。別勅事件に關して齊昭の内意をうけかゝる大事を出せりとの不審を蒙り、八月二十七日遂に自刄を命ぜらる。（二四七二—二五一九）

玉鉾の道わかぬまで夏草の生ひ茂るともふみは迷はじ

述懷

今更に何をかいはむいはすともわが眞心はしる人ぞしる

國を憂ひ世を歎きてのまこゝろは天にも地にも豈恥ぢめやは

心にて世を辭しける時

武藏野の露とはかなく消えぬとも世に語りつぐ人もこそあれ

玉の緒のたゆともよしや我か　君のかげの守とならむと思へば

たが爲のねぎことぞとは玉くしげふたらの山の神ぞしるらむ

茅根伊豫之介

贈正四位 明治二四、一二
合祀 明治二二、五

水戸藩士。名は泰。字は伯陽。寒緑と號す。安政六年幕府を非議し公卿に結ぶ等の罪を誣ひられて斬らる。（二四八四―二五一九）

辭世

ふりすてゝ出でにしあとの撫子はいかなるいろに露やおくらむ

詠古

欲雪王家歷世羞。皇風不競幸西州。夢夢豈無天定日。漁舟一夜作龍舟。

譯讀　「詠古」。王家歷世の羞を雪がんと欲す。皇風競はず西洲に幸したまふ。夢夢豈天定まるの日無からんや。漁舟一夜龍舟となる。

又

端笏維時天步難。豈思一日漂常瀾。忠憤散爲正統記。亂臣千載肝膽寒。

譯讀　端笏維の時天步難む。豈思はんや、一日常瀾に漂はんとは。忠憤散じて正統記と爲り、亂臣千載肝膽寒からしむ。

又

三歲獨嬰赤坂壘。精忠何問張睢陽。縱令一夜將星落。添得南山劍鏡光。

譯讀　三歲獨り嬰る赤坂の壘。精忠何ぞ問はん張睢陽。縱令一夜將星落つるも、添へ得たり南山劍鏡の光を。

又

櫻井遺言何日遺。慨然殉國凛風姿。閤門忠義稀今古。腸斷藏王塔上詞。

譯讀　櫻井の遺言何れの日にか遺れん、慨然として國に殉ず風姿凛たり。閤門の忠義今古に稀なり。斷腸す藏王塔上の詞。

梅田雲濱

贈正四位 明治二四、四
合祀 明治二二、一一

名は義質、後定明と改む。源次郎と稱し別に湖南と號す。安政五年捕へられて江戸に檻致せられ、翌年九月小倉邸の獄中に病歿す。（二四七六―二五一九）

述懷

天の戸をおしあけ方の雲間よりいづる日影の曇らずもがな

捕はれて某の邸に籠められたるが病重きに養のことなど人のいひたりけるに

君が代をおもふ心の一すぢにわが身ありとは思はざりけり

獄にありて伊丹重臣に答ふ

蘆田鶴のあし間がくれに身をかくし空に思ひの音をのみぞ啼く

俄虜入浪華港。吉野十津川郷民謀出拒。請予爲帥。慨然有作

妻臥病牀兒泣飢。挺身直欲當戎夷。今朝死別與生別。唯有皇天后土知。

又

傾厦欲支身力微。此時不說世情非。賤臣有意南山去。獨向北方拜　帝闕。

譯讀　「俄虜浪華港に入る、吉野十津川の郷民田でゝ拒がんと謀り、予に帥と爲らん事を請ふ、慨然として作有り」。妻は病牀に臥し兒は飢に泣く。挺身直ちに戎夷に當らんと欲す。今朝死別と生別と。唯皇天后土の知るあり。傾厦を支へんと欲するも身力微なり。此時說かず世情の非を。賤臣意有り南山に去る。獨り北方に向つて帝闕を拜す。

寄藤仲遠

丹心憂國不知迂。溝壑窮餓豈愛軀。體勢感情時忘食。機會觸眼忽昂鬚。干城勇士多兒戲。經世重臣乏老圖。歎息卽今天下事。何年鏖盡醜蠻奴。

譯讀　「藤仲遠に寄す」。丹心　國を憂へて迂なるを知らず。溝壑窮餓豈に軀を愛せんや。體勢情に感じて時に食を忘る。機會眼に觸れて忽ち鬚を昂ぐ。干城の勇士兒戲多く、經世の重臣老圖乏し。歎息す卽今天下の事。何れの年か鏖盡せん醜蠻の奴。

賴三樹三郎

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二四、九

名は醇。字は子春。鴨崖又古狂生と號し、山陽の第三子なり。父の遺命により幼にして川上東山に學ぶ。安政五年擬夷密勅の内議にあづかるを以て關東に檻送せられ、安政六年十月七日刑死せらる。（一八四八五—一八五一九）

題しらず

浮雲のおほふ姿はかはれどもよろづ代おなじ天つ日の影

かへりみる比枝の山影くもりけりわがゆくさきはしら雲の空

辭世の歌とてよめる

わがつみは　君か代おもふ眞心の深からざりしくるしなりけり

○初五文字「本まがつみ。或はまかる身はなどゝも傳へらる。

過函嶺

當年意氣欲凌雲。快馬東馳不見山。今日危途春雨冷。檻車搖夢過函關。

譯讀　「函嶺を過ぐ」。當年の意氣雲を凌がんと欲す。快馬東に馳せて山を見ず。今日危途春雨冷かに、檻車夢を搖がして函關を過ぐ。

笠置游幸圖

天地何邊容聖軀。滿山風雨　御衣濡。宴安忘苦中興日。遺恨無人獻此圖。

譯讀 「笠置潛幸の圖」。天地何れの邊にか　聖駕を容れん。滿山の風雨　御衣濡ふ。宴安苦を忘る中興の日。遺恨す人の此圖を獻するなきを。

聽梅田雲濱等就囚慨然作

臨縛慨然賦卽詩。此詩幾萬泣男兒。報天大義何驚死。爲國深仁豈顧危。澹庵曾封誅賊表。文山空詠憂國詞。竹窓一夜慘垂淚。家母驚爲添感悲。

譯讀 「梅田雲濱等囚に就くと聽き慨然として作る」。縛に臨んで慨然卽詩を賦す。此詩幾萬の男兒を泣かしむ。天に報ずる大義何ぞ死を驚かん。國の爲にする深仁豈危きを顧みんや。澹庵曾て封ず賊を誅するの表。文山空しく詠ず國を憂ふるの詞。竹窓一夜慘として淚を垂る。家母驚いて爲に感悲を添ふ。

獄中作

排雲欲手掃妖熒。失脚墜來江戸城。井底痴蛙過憂慮。天邊大月缺高明。身臨鼎鑊家無信。夢斬鯨鯢劒有聲。風雨多年苔石面。誰題日本古狂生。

譯讀 「獄中の作」。雲を排して手づから妖熒を掃はんと欲し、失脚して墜來る江戸の城。井底の痴蛙憂慮に過ぎ、天邊の大月高明をかく。身は鼎鑊に臨んで家に信なく、夢に鯨鯢を斬つて劒に聲あり。風雨多年苔石の面。誰か題せん日本の古狂生と。

日下部伊三次　贈正四位　合祀　明治二四、四、一一

名は翼、九皐又實稼の號あり。鹿兒島藩士なり。安政五年八月八日水戸に別　勅を下さるゝ時鵜飼幸吉と共に變裝して　勅諚を水戸藩邸に達す。よりて逮へられて江戸傳馬町の獄につながる。時たまたま嚴寒、遂に病にかゝり十二月十七日獄中に歿す。（二四七四―二五一八）

題しらず

五月雨のかぎりありとは知りながら照る日をいのる心せはしき

獄中勝野輝卿に贈る

君がため沈むひとやはもろともに玉のうてなの心地こそすれ

吉田松陰　贈正四位　合祀　明治二二、四、一一

名は矩方。字は義卿。寅次郎と稱し別に二十一回猛士と號す。安政六年小塚原に斬せらる。（二四九一―二五一九）

述懷

八隅知　君が國だにをさまらば身をすつるこそ賤が本意なれ

獄中の作

七たびも生きかへりつゝえみしらを攘らはむこゝろ我わすれめや

小瀨川は國の境なれば

安藝の國むかしながらの山川にはづかしからぬ益良雄の旅

泉岳寺前をすぎて

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬやまとだましひ

露の身のちるをあはれと見ん人は草むすびても夷賊はらへよ

おろかなる我をも友の數にしてすぐなる道をたどれ人々

討たれたる我をあはれと見む人は　君をあがめてえみし攘へよ

留魂錄を書き終りて

身はたとひ武藏の野邊にくちぬともとゞめおかまし大和魂

刑に臨む時

親おもふ心にまさる親こゝろけふのおとづれ何と聞くらむ

舟至由良港

回首蒼茫浪速城。篷窓又聽杜鵑聲。丹心一片人知否。不夢家鄕夢帝鄕。

譯讀　「舟由良港に至る」。首を回らせば蒼茫たり浪速城。篷窓又聽く杜鵑の聲を。丹心一片人知るや否や。家鄕を夢みず帝鄕を夢む。

辭世

今我爲國死。死不背君親。悠悠天地事。感賞在明神。

譯讀　「辭世」。今我國のために死す。死すとも君親に背かず。悠悠たり天地の事。感賞明神に在り。

橋本左内

贈正四位 明治二四、四
合祀 明治二二、一一

名は綱紀、字は伯綱、黎園と號す。又宋の忠臣岳飛を景慕して景岳と號し、又本居大人の歌意をとり櫻花晴輝樓ともいへり。安政六年十月十七日斬せらる。（二四九三—二五一九）

寓感

不須健筆喚詩豪。豈學精研剖兎毫。十歲鍛成忠一字。傳家好做護身刀。

譯讀　「寓感」。須ひず健筆にして詩豪と喚ばるゝことを。豈に學ばんや精研兎毫剖をくを。十歲鍛へ成す忠の一字。家に傳へて好し護身の刀と做さん。

贈吉田義卿

磊磊軒昂意氣豪。聞說夫君膽生毛。想看痛飲京城夕。握腕頻睨日本刀。

譯讀　「吉田義卿に贈る」。磊磊軒昂意氣の豪。聞くならく夫君膽、毛を生ずと。想ひ看る痛飲京城の夕。腕を握りて頻りに睨む日本刀。

獄中作

苦寃難洗恨難禁。俯則悲傷仰則吟。昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心。

譯讀　「獄中作」。苦寃洗ひ難く恨禁じ難し。俯しては卽ち悲傷し仰いでは則ち吟ず。昨夜城中霜始めて隕つ。誰か知らん松柏後凋の心を。

又

二十六年如夢過。顧思平昔感滋多。天祥大節嘗心折。土室猶吟正氣歌。

譯讀　二十六年夢の如くに過ぐ。平昔を顧思すれば感滋ミ多し、天祥の大節嘗て心折す。土室なほ吟ず正氣の歌。

雜　詠

男兒豪勇尙功名。不似唐人悲遠征。南戰北攻休不久。更之碧海擊長鯨。

譯讀　「雜詠」。男兒豪勇功名を尙ぶ。似ず唐人の遠征を悲しむに。南戰北攻休むこと久しからず。更に碧海に之いて長鯨を擊せん。

弟子維好講兵籍今將遠游賦以爲別

手提長劍事周游。雄氣堂堂貫斗牛。他日鈐韜成業後。遂能呑五大洲不。

譯讀　「弟子維好兵籍を講じ今將に遠游せんとす、賦して以て別と爲す」。手に長劍を提げて周游を事とす。雄氣堂堂斗牛を貫く。他日鈐韜（けんたう）成業の後。遂に能く五大洲を呑むや不（いな）や。

小林民部大輔

贈正四位　明治二四、四

名は良典。京師の人。世々鷹司家の諸太夫なり。日下部・橋本等と大に尊攘の義を唱ふ。己未八月遠島の刑に處せられ、未だ配處に至らずして十一月十九日終に幕吏の毒手に斃る。（二四六八―二五一九）

吉田矩方の死をきゝて

驚たかのたけき心をむら雀群かりしとて知らるべしやは

折にふれて

手弱女も國の爲をばおもふなれなど益良雄のあたにすごせる

撫　子

しきしまの大和なでしこいかなればからくれなゐの色にさくらん

成就院月照

贈正四位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は忍向。京都清水寺成就院の住職。思ふ所ありて寺務を弟信海に讓り、勤王の志士と交り幕吏に追はれて、遂に安政五年十一月薩摩潟に投じて死す。（二四七三―二五一八）

折にふれて

浪花江やあしのさはりはしげくともなほ世の爲に身をつくしてむ

いかばかりうきめ見るとも行末にこゝろつくしの甲斐もあらなむ

國のため　君の爲には露のいのちいまこの時ぞすてどころなる

弓矢とる身にはあられぬど一すぢに立てし心の末はかはらじ

幾千代も　御代はうごかじ一すぢに二心なく　君し守れば

辭　世

大君のためには何かをしからんさつまの瀨戸に身はしづむとも

梁川星巖

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二四、九

名は孟緯。字は公圖。美濃の人。勤王の士と交り、間部詮勝の入洛に詩を與へて諷諫す。幕府の捕手

其家に至る前日病歿す。（二四四九―二五一八）

辭　　世

老の身の終るいのちはをしからじ世にいさをしのなきぞかなしき

紀事二十五首　錄七

海恠群飛白日昏。痛心在目淚潺湲。一朝有事計何出。諸老先生置不論。

譯讀　「紀事二十五首、七を錄す」。海恠群飛して白日昏し。痛心目に在り淚潺湲。一朝事有らば計いづくにか出でん。諸老先生置いて論せず。

小籌大策漫紛紛。一擧誰能掃海氛。聖慮焦勞無晝夜。敎臣爭不效忠勤。

譯讀　小籌大策漫として紛紛。一擧誰か能く海氛を掃はん。聖慮焦勞して晝夜無し。臣をして爭でか忠勤を效さざらしめん。

更無一議及兵戈。怯懦因循可奈何。聞說江門此時節。滿城齊唱太平歌。

譯讀　更に一議の兵戈に及ぶものなし。怯懦因循奈何かすべき。聞說く江門のこの時節。滿城齊しく唱ふ太平の歌。

事有機宜時勢迫。男兒豈是讀書秋。不除積釁稔禍去。億兆寃聲何日休。

譯讀　事機宜あり時勢迫る。男兒豈に是れ讀書の秋ならんや。積釁稔禍を除き去らずんば、億兆の寃聲何の日にか休まん。

莫援承久元弘例。事體方今迥不同。皇上只要殲海恠。未嘗一刻外關東。

譯讀　承久元弘の例を援くこと莫かれ。事體方今迥かに同じからず。皇上は只海恠を殲さんと要せらるゝのみ。未だ曾て一刻も關東を外にし給はず。

當年乃祖氣憑凌。叱咤風雲卷地興。今日不能除外釁。征夷二字是虛稱。

譯讀　當年の乃祖氣憑凌。風雲を叱咤し地を卷いて興る。今日外釁を除く能はずんば、征夷の二字はこれ虛稱。

普天率土仰相望。葵藿心皆向太陽。諸老何心梗　朝命。不知梗得自家亡。

譯讀　普天率土仰いて相望む。葵藿の心皆太陽に向ふ。諸老何の心ありてか　朝命を梗ぐ。知らず梗ぎ得て自家の亡ぶることを。

鵜飼幸吉　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二二、五

水戸藩士吉左衞門知信の子。名は知明。父と共に京師に居る。勅書を帶し江戸に赴き之を主家に達す。程なく捕へられて六年八月二十七日罪を誣ひ其首を梟せらる。（二四七九―二五一九）

述　　懷

世にありて數ならぬ身も　國のためつくすこゝろは人に讓らじ

成就院信海　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二四、九

忍向上人の弟。淸水寺成就院藏海の徒弟となり後、月照の後をうけて住職となる。江戸の獄に繫がれ六年三月十八日傳馬町の獄に病死す。（二四八一―二五一九）

亞船入港するに方り內　勅をうけて國家安護の祈禱を修する時よめる

動きなきちかひと　君がまごゝろを玉の緒にこそよりて祈らめ

獄にとらはれて

眞心をつくさん時と思ふには憂きにあふ身ぞうれしかりける

辭　世

西の海東の空とかはれども心は同じ　君が代のため

春日潛庵　贈正四位　明治三六、一一

名は仲囊、字は子贊。久我家の諸大夫を務む。戊午の大獄起るや星巖と文書の往復ありしを以て嫌疑をうけて罪せらる。明治十一年三月二十三日歿。（二四九七―二五六三）

人みなの心のかぎりつくしての後こそ吹かめ伊勢のかんかぜ

藤森弘庵　贈從四位　明治二四、一二

江戸の儒者。名は大雅。字は淳風。通稱恭助。晩年天山と號す。勤　皇の志士と交るを以て安政五年獄に繫がれしが翌年追放。文久二年病歿す。（二四五九―二五二二）

病中作

伏枕期年鶴骨支。猶聞時事思如絲。空餘滿腹經綸策。把筆枉書絶命詩。

譯讀　「病中の作」。枕に伏して期年鶴骨支ふ。猶時事を聞いて思ひ絲の如し。空しく餘す滿腹經綸の策。筆を把つて枉げて書す絶命の詩。

叱々叱々又叱々。汝西洋之犬耶咄。何爲横行我内地。叱々天山是絶筆。

譯讀　叱々叱々又叱々。汝西洋の犬か咄！。何爲れぞ我が内地を横行する。叱々は天山が是れ絶筆。

松田東吉郎　贈正五位　明治二四、九　合祀　明治二六、一一

名は和孝。字は誠道。蓼水と號す福井藩士。戊午の大獄に憤慨し靈岸島の藩邸に於て屠腹す。（二四九七―二五一九）

巖頭松柏日蒼蒼。逢着雪霜增屈强。慷慨何時無祖逖。誠忠不獨止天祥。岐崩昔日周邦亂。洛竭當年夏國亡。一死報恩猶有憾。七生敵愾苦辛長。

譯讀　巖頭の松柏日に蒼々たり。雪霜に逢著して屈强を增す。慷慨何れの時か祖逖無からん。誠忠獨り天祥に止まらず。岐崩れて昔日周邦亂れ、洛竭きて當年夏國亡ぶ。一死恩に報ずるも猶憾みあり、七生の敵愾苦辛長し。

國々の　君はかはれど高光るわが日の　み子の　み代はかはらず（木居宣長）

かしこしや　皇み國はうまし國うらやすの國國の眞秀國（同）

天地のぞきへの極みまきぬとも　み國にましてよき國あらめや（同）

第三、櫻田義擧　（萬延元年三月三日）

初め井伊直弼の大老となるや、處士横議の輩を捕縛するに意ありしが、會〻密勅の水戸藩に降るに及び、斷然決意して安政の大獄をおこすや、世上之を非難するの聲漸く高く、遂に水戸藩高橋・金子等首謀と爲り、密に敢死の士を集め、井伊大老を斬つて積憤をはらさんとす、應ずる者十八士。萬延元年三月三日を以て其期となし、各自脱藩して江戸に會し、愛宕山上に結束して外櫻田に赴く。この日皆黑木綿の綿衣に羽織。馬乘袴。白鉢巻。表は赤合羽。饅頭笠を以て身をおほひ、大老の罪狀を數へたる趣意書を懷にし、諸侯の從者の如く、或は見物人の如くに裝ひ、三々五々路傍にまつ。かくして大老の行列到るや、森五六郎訴人の如くして近づき、小銃を放つて列を亂すや、衆皆合羽をすてゝ戰ふ。この間有村短槍を以て大老の轎中をつき闕、扉を排して其首を斬る。有村首を刀尖に貫き、鞍馬天狗を謠ひて引上げしが、龍の口に至りて自刄す。その他負傷せるものは各定めたる通り自訴し、傷なきものは遁れて大阪に會し、後擧をなさんとす。世之を櫻田の義擧と呼ぶ。

高橋多一郎

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二二、五

名は愛諸。字は敬卿。水哉堂・幽竹・山窓等と號す。又其邸宅の門の左に柚樹繁茂す。よつて柚門と號す。櫻田の首領、要擊の策成るや期に先ちて大阪に至る。幕吏の搜索嚴にして遂に父子天王寺にて從容として自刄す。（二四八四―二五二〇）

原環翠來訪、對酌賦呈

獲罪十年老草堂。有人向我問行藏。感慨猶吟諸葛表。微忠何日報君恩。

譯讀　「原環翠來り訪ふ、酌に對して賦して呈す」。罪を獲しより十年草堂に老ゆ。人有り我に向つて行藏を問ふ。感慨猶ほ吟ず諸葛の表。微忠何れの日か君王に報ぜん。

贈九郎冠者

昨自鞍山振袂起。南來北去一心雄。寶刀未染墨夷血。何日挽回皇國風。

譯讀　「九郎冠者に贈る」。昨は鞍山より袂を振つて起り、南來北去一心雄なり。寶刀未だ染めず墨夷の血。何れの日か挽回せん皇國の風を。

未聽廟謨決戰和。炮烟日向武城多。今年憂甚昨年憂。不知明年又奈何。

譯讀　「逸題」。未だ聽かず廟謨の戰和を決するを。炮烟日に武城に向つて多し。今年の憂は昨年の憂よりも甚し。知らず明年は又いかん。

至評定所途中作

身處危難殆廿年。孤忠自信付蒼天。國家傾覆無人怪。依舊又見蔽日煙。

譯讀　「評定所に至る途中の作」。身危難に處する殆ど二十年。孤忠自ら信ず蒼天に付するを。國家の傾覆人の怪しむなし。舊に依りて又見る日を蔽ふの煙を。

逸題

堂堂　神國二千春。賊氣蔽天威不振。廟議唱和營私甚。不知何日　國風新。

譯讀　「逸題」。堂々たる　神國二千春。賊氣天を蔽うて威振はず。廟議和を唱へて私を營むこと甚し。知らず何れの日か　國風新ならん。

昨夜有歸鄉之命、使節臨門如星。今夕恩命。又留臣等數輩。

世途之艱難不可名狀、慨然賦一詩。

金風颯颯促深秋。身似飛蓬迷去留。官祿於吾如土芥。腥膻邪敎奈　皇州。

譯讀　「昨夜歸鄉の命有り、使節門に臨むこと星の如し。今夕恩命あり、又臣等數輩を留む。世途の艱難名狀すべからず。慨然として一詩を賦す」。金風颯々として深秋を促がす。身は飛蓬に似て去留に迷ふ。官祿吾に於て土芥の如し。腥膻の邪敎　皇州をいかにせん。

安政庚申二月初七、片岡・下野二兄見訪談論達旦慨然有作

事業未成日易過。世途殆似渡風波。誰知今夜剔燈語。發作乾坤正大歌。

譯讀　「安政庚申二月初七、片岡・下野二兄に訪はる談論旦に達す。慨然として作有り」。事業未だ成らず日過ぎ易し。世途殆ど風波を渡るに似たり。誰か知らん今夜燈を剔るの語。發して乾坤正大歌と作るを。

庚申二月十八日、早曉偶成

死期有日此生涯。自踏危機報　國家。六十餘州無一眼。獨伸憂憤對梅花。

譯讀　「庚申二月十八日、早曉偶成」。死期日有り此の生涯。自ら危機を踏みて　國家に報ゆ。六十餘州一眼無し。獨り憂憤を伸べて梅花に對す。

小金驛逢僧麟孝感慨有作

欲爲　神州除妖術。緇衣帶劍一心雄。武夫百萬問何事。征夷城上遍腥風。

譯讀　「小金驛にて僧麟孝に逢ふ、感慨して作有り」。神州の爲に妖術を除かんと欲す。緇衣劍を帶びて一心雄なり。武夫百萬問ふ何事ぞ。征夷城上腥風遍きは。

示　兒

一身笑付一毛輕。不奈邦君困棘荆。兒子他年成立後。須知阿爺報公誠。

譯讀　「兒に示す」。一身笑つて一毛の輕きに付す。いかんともせず邦君の棘荆に困むを。兒子他年成立の後。須らく知るべし阿爺報公の誠を。

金子孫二郎

贈正四位　明治二四、一二
合祀　明治二二、五

名は敎孝。琴樽と號す。高橋と共に櫻田の首謀たり。當日品川の川端樓にて成功の報をとるや、大阪に擧兵の爲西上。遂に鳥羽にて就縛。文久元年七月斬。（二四六四—二五二一）

飛ぶ雁にこと問ひてまし深雪ふる蝦夷が千島の波風のおと

庚申の歳二月十八日家を出立ちし時陸子に

ますかゞみ清き心は玉の緒の絶えてし後ぞ世に知らるべき

同二十日笠間より日暮稲田に到りて

君のためひそみ行く身の旅衣ぬるゝもうれし春の淡雪

三月朔日山崎樓にて

大丈夫の涙の袖をしぼりつゝ迷ふたびねもたゞ　國のため

君かため世のためつくすまこゝろは二荒の神もみそなはすらむ

齋藤監物　贈從四位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は一德。字は子房。文里と號す。常陸那珂郡靜神社の祢仕長官。櫻田の擧に重傷を負ひしも意氣軒昂、辰の口なる脇坂邸に自訴し。八日傷癒えずして死す。（二四八二―二五二〇）

題しらず

ことあらば告げよ隅田の都鳥おなじ浮寢の友と思へば

失題

天下誰人不惜命。報恩一死鴻毛輕。妖氛覆日光昏暗。匣裏寶刀空自鳴。

譯讀　天下誰人か命を惜しまざらん。報恩一死鴻毛輕し。妖氛日を覆うて光昏暗なり。匣裏の寶刀空自ら鳴る。

獄中漫吟

時事關心難成眠。喚風迎月轉悽然。滿胸忠憤悲歌夕。懷起文山就義年。

譯讀　「獄中の漫吟」。時事心に關して眠りを成し難し。風を喚び月を迎へて轉た悽然。滿胸の忠憤悲歌の夕。懷ひ起す文山義に就くの年。

題兒島高德書櫻樹圖

踏破千山萬嶽烟。　戀與今日到何邊。　短簑直入虎狼窟。　一七深探鮫鰐淵。　報國丹心嗟獨力。　回天事業奈空拳。　數行紅涙兩行字。　付與櫻花奏　九天。

譯讀　「兒島高德櫻樹に書する圖に題す」。踏み破る千山萬嶽の烟。　戀與今日何れの邊にか到りたまふらん。短簑直ちに入る虎狼の窟。一七深く探る鮫鰐の淵。報　國の丹心獨力を嗟き、回天の事業空拳をいかにせん。數行の紅涙兩行の字、櫻花に付與して　九天に奏したてまつる。

高橋莊左衞門　贈從四位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は諸德。字は士翼。多一郎の長子。父及金子等と首謀となり東、江戸に大塩を殘し、西、大阪に義兵を起す策を決し父と共に西上し、父と共に自裁す。（二五〇二―二五二〇）

天王寺にて自刄しける時

國のためおもひかけたる高橋のわたしはてざることぞくやしき

逸題

賣國奸臣謀日新。忠良號泣訴天神。　本朝恢復知誰任。多是親朋獄裏人。

譯讀 國を賣る奸臣謀日に新なり。忠良號泣して天神に訴ふ。本朝の恢復知んぬ誰の任ぞ。多くは是れ親朋獄裏の人。

又

志願未成又遇春。親朋多是獄中人。弟兄昨日就輕典。愧負水城烈士倫。

譯讀 志願未だ成らず又春に遇ふ。親朋多くは是れ獄中の人。弟兄昨日輕典に就き、水城烈士の倫に負くを愧づ。

有村雄助

贈從四位 明治三五、一一
合祀 明治二二、一一

名は兼武。薩摩の藩士。櫻田の計なるや高橋父子は木曾路より、雄助は金子と共に東海道より西上、四日市にて就縛。自刄を命ぜらる。（二四九五—二五二〇）

逢不慮難

塵あくた幾重かうへにつもれるを忍び忍ぶはたゞ　君のため
沼水のそこに沈める蓮葉のきよき心を誰か知るらむ

辭世

性來不嗜綺羅工。何思後世入天穹。唯願爲君誅國賊。千生萬死護皇宮。

譯讀 「辭世」。性來嗜まず綺羅の工。何ぞ思はん後世天穹に入るを。唯願ふ　君の爲に國賊を誅するを。千生萬死皇宮を護らん。

佐久良東雄

贈從四位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

通稱は靜。號圃と號す。常陸新治郡の人。觀音寺康哉の弟子。眞鍋町善應寺に住持たり。後、佛門を去り鹿島祠前に祈誓し櫻樹を植ゑ姓名を櫻東雄と改む。後大阪座間神社の社家に班す。志士を保護すること多く、殊に高橋父子を保護斡旋したるを以て囚へられ、傳馬町の獄に繫がれ食を絶ちて死す。（二四七一—二五二〇）

櫻の嵐に散るを見て

事しあらばわが　大君のおほみため人もかくこそ散るべかりけり

題しらず

花見にといでます　御代の春ならば籠りをるともうれしからまし
一日二日こもり居るさへいぶせきをわが　大君はいかますらむ
田子の浦にいでましありて不二の根の雪みそなはす時もあらなむ
いくちたび命しぬとも　おほ君の　おほみためには惜しからなくに
かりそめに木太刀とるにも　おほ君の　おほみためにと思へますらを

江戸城の火災にかゝるを聞きて

まつろはぬ奴ことゞ〳〵束の間に燒きほろぼさむ天の火もがな

題しらず

すめらぎに仕へまつれと我をうみしわか垂乳根の尊かりけり

外つ國の濁りにしまぬ心もて蓮の花を見る人もがな

君がため命しぬべき益良夫となりてぞ生けるしるしありける

命だに惜しからなくに惜しむべきものあらめやも　皇のため

關鐵之介

贈從四位 明治二四、一二
合祀 明治二二、五

名は遠。字は士任。蘭室・櫻園・楓巷・錦堆等の號あり。櫻田の時敵輿を衝き其戸を破り大老を勾出して之を刎ね、シメタと呼ぶと同時に有村が其首級を刀尖に貫けり。引上げを命じ兩國より觀雪に擬し舟を飾ひ酒をくむ。かくして西上。天王寺の事をきゝ更に諸所を轉々し、文久元年越後雲母の溫泉にて捕へられ、傳馬町の獄舍にて刑せらる。(二四八四―二五二二)

網木に貯へし水に影のうつるを見て

君か代をおもふ心のあが沼の水のそこ知る人やくむらむ

隣獄なる今泉子の許より「世の中のうきてふ憂きに引かへて心靜けき年の暮哉」

といひおこせし同じ心をよめる

起きてなげきいねてはしのぶ心より家をおもふの隙なかりけり

孤臣在獄之圖

身はかくて沈みはつとも　君が代のうきにはもれぬ臣とこそ知れ

寄蓮述懷

濁らじの名のみ殘らば蓮の葉のたまは消ゆとも恨なからむ

獄中の詠

よそ目には憂しと思ひし囚屋さへ今は身をおく世となりにけり

晩冬朔。到因州鳥取城下安達子孝宅。與堀子光邂逅。有詩被示。烈風如刃欲穿身。想見邊庭守節人。誰識寒梅今日色。還從雪裡挽回春。卽次其韻酬之。

萬條愁緒絡吾身。拳雪刀風凍殺人。爲說勤　王今日策。共期恢復賞陽春。

譯讀　「晩冬の朔、因州鳥取城下安達子孝の宅に至り、堀子光と邂逅す。詩あり示さる。―烈風刃の如く身を穿たんとす、想見す邊庭に節を守るの人。誰か識らん寒梅今日の色。還た雪裡より春を挽回す―卽其韻を次して之に酬ゆ」。萬條の愁緒吾が身を絡ふ。拳雪刀風人を凍殺す。爲に說く勤　王今日の策。共に恢復を期して陽春を賞せん。

聞吉田矩方就極刑

憂世嗟君與世疎。挺身慷慨赴難初。忠姦能辨檻窓底。垂死猶能講聖書。

譯讀　「吉田矩方が極刑に就きしを聞く」。世を憂へて嗟す君が世と疎なるを。身を挺して慷慨難に赴くの初、忠姦能く辨ず檻窓の底、死に垂んとして猶よく聖書を講ず。

冬夜獄中漫吟

枉就幽囚還故郷。姓名在世任呼狂。五更擊柝乾坤寂。頭斷場荒月似霜。

譯讀 「冬夜獄中漫吟」。枉げて幽囚に就いて故郷に還る。姓名世に在り狂と呼ぶに任す。五更の擊柝乾坤寂たり。頭斷場は荒れて月霜に似たり。

途中吟

報國丹心尚未灰。半肩行李比重鉾。滿懷風月吟游外。胸算尊攘機會來。

譯讀 「途中吟」。國に報ゆるの丹心尚未だ灰せず。半肩の行李重鉾（ぢゅうはい）に比す。滿懷の風月吟游の外。尊攘の機會を胸算し來る。

就縛將歸郷國。卽得一絕

仰不愧天寧愧世。丹心如火有誰知。滿山風雪襟懷豁。正是從容就義時。

譯讀 「縛に就き將に郷國に歸らんとす。卽一絕を得たり」。仰いで天に愧ぢず寧んぞ世に愧ぢん。丹心火の如く誰有りてか知らん。滿山の風雪襟懷豁なり。正に是れ從容義に就くの時。

又

堪憤腥氣滿海天。挺身何物占機先。家郷千載公評日。題謂關東狂少年。

譯讀 憤るに堪へたり腥氣天に滿つるを。身を挺して何物か機先を占むる。家郷千載公評の日、題して關東の狂少年と謂はん。

本月六日、就縛已入郷國途過瑞龍山下。感激往事血淚沾臆者數刻、謹賦一絕、沈吟敬恭、以奉謝先君之靈焉。

死無補國生無益。肅拜何堪縲紲中。傲骨縱爲斷腸土。寃魂依舊起遺風。

譯讀 「本月六日、縛に就く。已に郷國に入りて、途、瑞龍山下を過ぐ。往事に感激し血淚臆を沾すもの數刻、謹んで一絕を賦し、沈吟敬恭、以て先君の靈に謝し奉る」。死して國を補ふ無く生きて益なし。肅拜何ぞ堪へん縲紲の中。傲骨縱ひ斷腸の土と爲るも、寃魂舊に依り遺風を起さん。

鯉淵要人

贈正五位 合祀 明治三五、一一、明治二二、五

名は鈴陳。常陸茨城郡諏訪神社の神職。櫻田の義士中の最高齢者。當時重傷を蒙るも意氣軒昂、脇坂邸に至らんとして流血甚だしく八代洲河岸において自刃す。（二四七〇—二五二〇）

題しらず

ともすれば月の影のみ戀しくて心は雲に立ちまさりけり

君がため思ひをはりし梓弓ひきてゆるまじやまとだましひ

佐野竹之介

贈正五位 合祀 明治三五、一一、明治二二、五

名は光明。水戸藩士。櫻田の時、光明右肩左脇に各九寸餘及眼上鼻側耳等に重傷を蒙るも從容自若、脇坂邸に自訴し此日遂に死す。幕府の獄醫望月壽仙來りて檢するに襯衣の兩袖に「誠」と「忠」の字を朱書し中間に「櫻田の『敷島の』」の和歌ありしといふ。（二四七九—二五二〇）

題しらず

大君のうきみこゝろをやすめつゝ鬼すむ國にさくらがりせむ

うきことはいや積れども劍太刀あだなす人を拂ひ清めむ
かりならぬ旅のやどりに今日もまた思ひぞ出づる敷嶋のみち
八重葎茂りて道もわかねどもさげ佩く太刀に薙ぎ盡さまし

櫻田出陣の前の夕に

諸共に思ひいる矢の强ければ堅き岩をもとほらざらめや
敷島の錦の　み旗もちさゝげ　すめら皇軍のさきがけやせむ
櫻田の花とかばねをさらすともなに撓むべきやまとだましひ

出　鄕　作

決然去國向天涯。生別又兼死別時。弟妹不知阿兄志。慇懃牽袖問歸期。

譯讀　「鄕を出づる作」。決然國を去つて天涯に向ふ。生別又兼ぬ死別の時。弟妹は知らず阿兄の志を。慇懃袖を牽いて歸期を問ふ。

黑　澤　忠　三　郎　　贈正五位　明治三五、一一
合祀　明治二二、五

水戸藩士。名は勝算。櫻田に於て負傷し自訴して攝津三田藩主九鬼隆義邸に移され七月十二日歿す。（二四八八―二五二〇）

題　し　ら　す

君がため身をつくしつゝますらをが名をあげとほす時をこそまて

無　題

呼狂呼賊任人評。幾歲妖雲一旦晴。方是櫻花好時節。櫻田門外血如櫻。

譯讀　狂と呼び賊と呼び人の評に任す。幾歲の妖雲一旦に晴る。方に是れ櫻花の好時節。櫻田門外、血、櫻の如し。

森　五　六　郎　　贈正五位　明治三五、一一
合祀　明治二二、五

名は直長。水戸藩士。櫻田の擧に前驅擾亂の任にあたる。大老行伍揚々櫻田門にさしかゝるや直長直訴の體をなして接近し俄に輕裝となりて拳銃を放つ。從士狼狽前驅に集る。遂に目的を達し細川越中守邸に自訴し文久二年七月斬らる。（二四九八―二五二〇）

題　し　ら　す

戈とりて月見るたびに思ふかないつか屍の上に照るやと
いたづらに散る櫻とやいひなまし花のこゝろを人は知らすに
武藏野の原に生ひぬる醜草をけふをかぎりとたやすぞと思ふ

有　村　次　左　衞　門　　贈正五位　明治三五、一一
合祀　明治二二、一一

名は兼清。鹿兒島藩士有村雄助兼武の弟なり。水戸脫藩の士と大老を櫻田門外に要擊しその首級をあげ、深創の爲和田倉門外にて自刄す「鐵も透らざらめや」の歌は腰にさしたる煙管に彫りつけありしといふ。（二四九八―二五二〇）

心に思ふことありて

君のため盡す心は武藏野の野邊の草葉の露と消ゆとも

櫻田の時よめる

くろかねもくだかざらめや武夫の　國のためにとおもひ切る太刀

○一本上句「岩か根もとほらざらめや」とあり。

逸　題

齋志青年沒九原。固期一死報　天恩。莫言武穆有遺憾。雪得旌全當日寃。

譯讀　志を齋し青年九原に沒す。固より期す一死　天恩に報ずるを。言ふこと莫れ武穆遺憾ありと。雪ぎ得たり旌全當日の寃。

蓮田市五郎　贈正五位　明治三五、一一　合祀　明治二二、五

水戸藩士。名は正實。幼にして孤、母によりて養育せらる。文久元年七月傳馬町の獄にて斬らる。人となり沈毅寡言孝悌の心あつきは蓋し天禀に發せるものなり。（二四九三―二五二一）

世の爲と思ひて盡せし事ども皆空しくなりぬと覺えければ

世のためとおもひつくせし眞心は天つ御神もみそなはすらむ

題　しらす

武藏野のあなたこなたに道はあれど我がゆく道は益良雄の道

三月三日四日五日雪ふる夜細川侯の邸にあり五日の

夕空晴れて月影のさしけるを見て

降りつもる思ひの雪のはれて今あふぐもうれし春の夜の月

母を思ひて

たらちめに又もあふ瀬の關なくばぬる間も夢にこひぬ夜ぞなき

あはれなり晝はひねもす夜もすがら胸にたえせぬ母の面かげ

かわく間もあらで袂のしぐるゝは母をこひしの涙なりけり

辭　世

色香をば芳野の奥にとめおきて惜しまずにちる山櫻哉

三月三日、於閣老龍野侯之邸口吟

欲挽頽瀾回世運。一朝斬破賊臣頭。微軀縱使爲齏粉。凛凛英名千載流。

譯讀　「三月三日、閣老龍野侯の邸に於て口吟す」。頽瀾を挽きて世運を回さんと欲す。一朝斬破す賊臣の頭。微軀たとひ齏粉と爲るも、凛凛たる英名千載に流れん。

七日夜、夢與母賞花於庭前、樂甚矣。已而寤、不覺血淚萬行、因賦一詩。

綠酒奉歡慈母傍。花林淸宴樂無疆。三更夢寤驚起坐。不在家庭在異鄕。

譯讀　「七日夜、夢に母と花を庭前に賞す、樂甚し。已にして寤め、覺えず、血淚萬行、因て一詩を賦す」、綠酒歡を奉ず慈母の傍。花林の淸宴樂み疆り無し。三更夢寤めて驚き起坐すれば、家庭にあらず異鄕に在り。

囚中雜詠

身嬰劍鋩志愈雄。剛肝擬學椒山風。生前恩澤報無處。除奸聊知效寸忠。

譯讀 「囚中の雜詠」。身は劍茫に嬰りて志愈〻雄なり。剛肝學ばんと擬す椒山の風。生前の恩澤報ゆるに處なし。奸を除きて聊か知る寸忠を效せることを。

又

道理貫肝義塡胸。從容笑處死生中。安知一片忠魂鬼。夙夜儼然護　皇宮。

譯讀 道理肝を貫き義胸に塡つ。從容笑うて處す死生の中。安んぞ知らん一片忠魂の鬼。夙夜儼然として　皇宮を護るを。

又

豹是留皮豈偶然。功名夙欽定遠賢。洋夷未軀身先死。一片丹心好奏天。

譯讀 豹は是れ皮を留む豈偶然ならんや。功名夙に欽す定遠の賢。洋夷未だ軀らず身先づ死す。一片の丹心好し天に奏せん。

又

既以一身託劍鋩。只悲慈母碎心腸。幽囚夜半孤眠夢。偏向故園住處行。

譯讀 既に一身を以て劍鋩に託す。只悲む慈母心腸を碎かるゝを。幽囚夜半孤眠の夢。偏に故園住處に向つて行く。

三月廿七日、評定所口吟。

伏節元期大義明。挺身欲拂海鯢横。回頭人世總如夢。千載空餘忠烈名。

譯讀 「三月廿七日、評定所口吟」。節に伏して元期す大義の明かなるを。身を挺して拂はんと欲す海鯢の横たはるを。頭を回らせば人世總べて夢の如し。千載空しく餘す忠烈の名。

囚中雜詠

欲明大義正華夷。頑鈍豈圖失事宜。身死功名難共得。業空忠孝兩相虧。一念至此欲腸斷。淋漓只看血淚垂。二十八年夢乍覺。一片清氣大空歸。

譯讀 「囚中の雜詠」。大義を明かにして華夷を正さんと欲す。頑鈍豈に圖らんや事宜を失はんとは。身死して功名共に得難く、業空しくして忠孝兩つながら相虧く。一念此に到りて腸斷たんと欲す、淋漓只看る血淚の垂るを。二十八年夢乍ち覺め、一片の清氣大空に歸す。

又

皇道久衰頽。誰能戴　至尊。姦曲重慘毒。醜虜勢吐呑。不有迅雷斷。爭支狂浪翻。嗟予深感激。先士報　天恩。

譯讀 皇道久しく衰頽す。誰か能く　至尊を戴かん、姦曲慘毒を重ね、醜虜勢吐呑す。迅雷の斷有らずんば、爭でか狂浪の翻るを支へん。嗟す、われ深く感激す。士に先つて　天恩に報いん。

森山繁之助

贈正五位 明治三五、一一
合祀 明治二二、五

名は政德。水戸の藩士。櫻田の徒なり。細川邸に自訴す。後田村邸に囚はれ翌年七月廿六日斬に處せらる。（二四九六—二五二一）

題しらず

君がため思ひのこさで武夫のなき人數に入るぞ嬉しき

廣木松之介

贈正五位 明治三六、一一
合祀 明治二二、五

名は有良。櫻田の擧に幸に微傷をも蒙らず。一時水戸に下り迂路西上せんとして家に至る。父悅びずして曰く、「何ぞ其場に鬪死せずして歸れるや」と、有良方略を秘して言はずのがれて佾形となり後に鎌倉上行寺にうつり遂に屠腹す。（二四九九―二五二三）

辭　　世

苦のした露ときゆともあめつちに魂をとゝめて　君を守らむ

謝投酒瓢

雖傾倒千瓢。無由扶正氣。不如留精靈。千載護皇基。

課讀　「謝して酒瓢を投ずる」。千瓢を傾倒すと雖も、正氣を扶くるに由なし。しかず精靈を留めて、千載　皇基を護らんには。

大津彦五郎

贈從五位 大正四、一一
合祀 明治二二、五

名は綱之。水戸藩士。文久元年齊昭の遺志を繼がんとして同志を募る。已にして藩主の命により衆を散じて罪をまつ。獄に下り絶食して死す。（二四九八―二五二一）

獄中にてよめる

國の爲かゝる憂き目も今さらに何いとふべき大和だましひ

辭　　世

思ひきや心のはしの一ことも成さで浮世を今すてんとは

第四、東禪寺夜襲（文久元年五月二十八日）

文久元年、英國公使、芝高輪東禪寺を假館となす。此時幕府外國と互市を開き通信をゆるし、彼の國の使臣を厚遇をせるをきゝ、志士憤りに堪へず。先づ書を作り「臣等草莽微賤の身なれども　神州の夷狄に汚がさるゝを見るに忍びず。尊攘の大義に基き身命を擲ち區々の微忠をもて聊　國恩の萬一に報せんとす云々」と。五月二十八日一味の人々品川の酒樓に訣別し、其夜東禪寺にいたり門戸を破りて闖入す。守衛の人々よく防戰したりしかば志士等遂に本望を遂げずして退く。

山崎信之助

贈正五位 明治四四、六
合祀 明治二二、五

名は信義。常陸久慈郡譽田村の人。品川の酒樓に訣飲し、東禪寺を襲ふ。同日品川某旅店に於て自殺す。（二四〇二―二五二一）

東禪寺の夷館へ討入るとき胴卷に書いつけし歌

世の中のうきを忘れてあすからは死出の山路の花をながめむ。

石井金四郎

贈正五位 明治四四、六
合祀 明治二二、五

名は信澄。水戸藩の郡吏なり。東禪寺に侵入し、守衛兵と戰ひ傷を負ひて捕へらる。翌二十九日囚中に歿す。（二四九一―二五二一）

獄廷ににてよめる

正さずも糺の神もくみて知れ我ためならぬ心づくしを

柴田市之助

水戸藩士。會澤正志齋の門下生なり。東禪寺なる英國公使館襲撃に與り、事露はれて諸所に潜匿せしが遂に就縛。文久三年病を以て獄中に歿せり。（二五二三）

偶成

豪傑不論枯與榮。此行豈厭爲囚烹。請看一國衝天氣。必拂陰雲使月明。

譯讀　「偶成」。豪傑論ぜず枯と榮と。此行、あに厭はんや囚烹と爲るを。請ふ看よ、一國衝天の氣を。必ず陰雲を拂つて月をして明かならしめん。

愚にも千代萬代といのるかなこゝは常世の日本島根を　（小澤蘆庵）

國つふみ國つ言葉を究めてぞ國つ心は知るべかりけり　（芳賀矢一）

第五、坂下義擧　（文久二年正月十五日）

大老伊井直弼の死後、老中安藤對馬守信正、主として政務を處理し公武の調停を計り、國論を一定せんとす。然れども外人の跋扈甚だしく、攘夷論者の氣焰亦熾にして、幕府の處置に平かならず。文久二年正月十五日遂に安藤信正を坂下門に要擊するに至る。志士の所持せる斬姦狀によれば「安藤閣老は幕府の政權を縱にし、私に威福を弄し、猥りに外人に媚び、攘夷の盛擧を阻み、　皇妹の降嫁を請うて京都の攘夷論者を抑へ、尙　天皇讓位を謀らんとして、國學者塙次郎に廢帝の故事を探らしめ、或は愛妾を英國公使に與へたり云々」と。此日信正傷を負ひて門內ににげこみ辛らうじて助かる。安藤氏朝廷よりの沙汰にて職を免ぜられ八月重譴を蒙る。

平山兵助　贈從五位　明治三五、一一　合祀　明治二二、五

名は繁義。水戸藩士。姓名を變じて細谷忠齋と稱す。井伊死すと雖も安藤なほ在り、櫻田の一擧につぐもの無ければ外患遂に止むべからずと、同志を募り、坂下門外に事をあげ遂に倒る。（二五〇一—二五二二）

尊　王攘夷を本とし　皇國の元氣を鼓舞する草莽の有志へ贈る言の葉

咲き出でゝとく散るものは　大君の憂きを慰む花にぞありける

散る時はしばしが程の早けれどおなじ枝にぞ咲く山櫻哉

ある有志への言

吹く風にあらねどけふは　大君の心にかゝる雲や拂らはむ

かくまでに茂りはてたる八重葎はらひつくさん　日の本のかみ

題　しらす

國のため思ひつくばの梢よりしげくも憂きのある世なりけり

辭　世

丈夫據義死何悲。成敗在天寧可期。骸骨縱消武州土。精神留欲護皇基。

譯讀　「辭世」。丈夫義に據る死何んぞ悲まん。成敗天に在り寧んぞ期すべけんや。骸骨はたとひ武州の土と消ゆるも精神は留まりて　皇基を護らんと欲す。

小田彦二郎

贈從五位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は朝儀。水戸の士。文久二年正月十五日遂に平山等と安藤信正を坂下門外に要擊して鬪死す。（二四九三―二五二二）

題　しらす

みよや見よ臣がこゝろは花ざかり神世のまゝの春にぞありける

川邊佐次衛門

贈從五位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は元善。水戸藩士。平山等に一味し、姓名を内田萬之助と變じ、坂下の誓をなしておくる、深く之を悔い長州藩邸に桂小五郎をたづね、斬姦狀を渡し隙をうかゞひて自刄す。（二四九二―二五二二）後この擧に加はりしものゝ罪をゆるされしはこの斬姦狀の　天聽に達したるによるといふ。

おもひきや心しづかにすみだ川わたりにもけふを限りなりとは

從來忠憤興梅開。甘酌英雄訣別盃。斬戮國奸貫大義。功名馥郁百花魁。

譯讀　從來忠憤梅と興に開く。甘んじて酌む英雄訣別の盃を。國奸を斬戮して大義を貫く。功名馥郁たり百花の魁。

黒澤五郎

贈從五位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は保高。陸奥の安部氏より出づ。多賀郡河原子村に住す。嘗つて東禪寺を襲ひ氏名を吉野政之介と呼び更に坂下の擧に加はり鬪死す。（二五〇三―二五二二）

題　しらす

あづま路をいでゝ日數をふる雪のいつか思ひのとげずやはある

辭　世

皇國のために醜臣きりすてゝ身はくもみづのもとにかへらむ

高畠房次郎

贈從五位　合祀　明治三五、一一　明治二二、五

名は胤正。常陸久慈郡の人。文久元年東禪寺を襲ひ、のがれて諸所に潛み、相馬千之助と變名し坂下

門外に闘死す。（二四八八―二五二二）

題しらず

岩にだに立つ矢はあるをいかゞしてわがまごゝろの通らざらめや

河本杜太郎　贈從五位　合祀　明治四〇、五　明治二四、九

名は正安。一名貫以。字は貫之。越後十日市の人。變名して豊原邦之助といふ。坂下の要擊に信正狼狽して遁る。杜太郎之を追ひ幾んと及ぶ。從士の爲に防げられ健闘して死す。（二五〇〇―二五二二）

同志の人々と阪下に事遂げんとしける時

父母のそだてし身をも　君のため世の爲にとていま捨つるかな

偶成

疎狂憂國不憂身。感慨元期救此民。新綠陰深鶯語老。不成一事又過春。

譯讀　「偶成」。疎狂國を憂へて身を憂へず。感慨もと期す此の民を救ふを。新綠陰深くして鶯語老ゆ。一事を成さず又春を過す。

東去西來何所爲。逢人只說攘蠻夷。卽今又對江城見。滿目妖氛非舊時。

譯讀　東去西來何の爲す所ぞ。人に逢うて只說く蠻夷を攘ふを。卽今又江城に對して見れば、滿目の妖氛舊時に非ず。

示同志

憂國去辭親。誓期拂虜塵。朝論濟民策。夕講殺身仁。辛苦事常躓。悲憤氣益振。時非功不就。一死植人倫。

譯讀　「同志に示す」。國を憂へて去つて親を辭す。誓つて虜塵を拂はんと期す。朝に論ず民を濟ふの策。夕に講ず身を殺すの仁。辛苦して事常に躓く。悲憤して氣益々振ふ。時非にして功就らず、一死もて人倫を植てん。

河野顯三　贈從五位　合祀　明治四一、九　明治二二、一一

名は通桓。字は士威。春雲又は白水學人と號す。本姓は越智氏、下野國河內郡吉田村の人。大橋訥庵に學び尊攘を以て奉公を期せり。遂に平山等の輩に與し姓名を三島三郎と變じ坂下門外に戰ふ。この時顯三は信正が駕より出でゝ逃ぐるを見、銃を發せしも中らず守衛の爲に刺されて死す。（二四九八―二五二二）

述懷

日の本をおほふ雲霧きりはらひ名もうらやすの國となさばや

しこ草のしげる枯野の根をたやし春のあけぼのまつぞ久しき

辭世

斃れてもまた越きぬらむ我が心しこのたぶれらつくる時まで

偶成

皇路傾危事事難。奸臣黠虜覆乾坤。憂邦烈士後先沒。自愧餘生在柴門。

譯讀 「偶成」。皇路傾危して事事に難し。奸臣黠虜乾坤を覆ふ。邦を憂ふる烈士後先に沒し、自ら愧づ餘生の柴門に在るを。

將出家鄉書感

誓掃胡塵出鄉關。瘦馬飄飄遙故山。二十四年　天恩重。擧鞭直去暮雲間。

譯讀 「將に家鄉を出でんとして感を書す」。胡塵を掃はんと誓つて鄉關を出づ。瘦馬飄飄として故山遙かなり。二十四年、天恩重し。鞭をあげて直ちに去る暮雲の間。

伏刑日示人

決心手欲掃榛荊。一劍直當百萬兵。成否元來皆天耳。欲留報　國盡忠名。

譯讀 「刑に伏する日人に示す」。心を決し手づから榛荊を掃はんと欲す。一劍直ちに當る百萬の兵。成否は元來皆天のみ。留めんと欲す報　國盡忠の名。

又

生來兩度決必死。二十五年又迎春。丹心一片斃不已。再生又掃犬羊塵。

譯讀 生來兩度必死を決す。二十五年又春を迎ふ。丹心一片斃るゝも已まず。再生又掃はん犬羊の塵。

讀　史

曾誅元使壯　神州。山嶽怒氣覆賊舟。區區陪臣猶守義。堂堂大府豈無羞。寄言紫陌弄權者。休笑書生憂世謳。若使人心歸一路。寶刀自能斬虜酋。

譯讀 「史を讀む」。曾て元使を誅して　神州を壯んにす。山嶽の怒氣賊舟を覆へす。區區たる陪臣すら猶義を守る。堂堂たる大府豈に羞無からんや。言を寄す紫陌權を弄する者、笑ふことを休めよ書生憂世の謳。若し人心をして一路に歸せしめば、寶刀自ら能く虜酋を斬らん。

兒島强介

贈從五位 明治四一、九 合祀 明治二一、一一

名は艸臣、又は矯と稱す。莘原居士又寸鐵處士と號す。宇都宮の人。共に坂下の計を定めたりしが病の爲に一擧に加はらず。二十八日就縛、傳馬町の獄に投ぜらる。六月二十五日獄中に病歿す。（二四九七—二五二二）

水戸に潛び行く途上にて

大君のうきをわが身にくらぶれば旅寢のそでの露はものかは

親々のうけし惠を　大君に報うは親につかふなりけり

題　しらず

國のため世の爲なればいかにせん親をおもはぬ人しなけれど

古の世にもかへらば仇波の逆卷く灘もなにか厭はむ

たぶれ等がたは業なすを　國の爲斬るも一つの功ありけり

失　題

平生要救世艱難。一片葵心炳似丹。此命豈爲病魔死。燈前蹶起引刀看。

譯讀　平生救はんと要す世の艱難。一片の葵心炳として丹に似たり。此の命豈に病魔の爲に死せんや、燈前躍起刀を引いて看る。

獄中作

上安聖主下安民。誓與奸臣不戴天。一笑椒山胡詮輩。空將疏奏逆豪權。

譯讀　「獄中の作」。上、聖主を安んじ奉り、下、民を安んず。誓つて奸臣と天を戴かず。一笑す椒山・胡詮の輩、空しく疏奏を以て豪權に逆らふ。

又

家君聞變勿傷悲。死國事親彼一時。到底須揚名後世。兩全忠孝未難期。

譯讀　家君變を聞くも傷悲したまふ勿れ。國に死し親に事ふ彼れ一時。到底須らく名を後世に揚ぐべし。忠孝を兩全すること、未だ期し難からず。

又

通好西戎新結盟。怪聞四海弟兄情。卽今天下有人否。盍愧東方君子名。

譯讀　好を西戎に通じ新に盟を結ぶ。怪み聞く四海弟兄の情。卽今天下人ありや否や。盍んぞ東方君子の名に愧ぢざる。

述懷

神州大義太分明。忍見胡塵襲覇城。獨有晰堂倫檜黠。豈無草茅岳韓兵。丹心己許　君兼國。青史要留身後名。苟起諸賢回復業。弧臣含笑死猶生。

譯讀　「述懷」。神州の大義太だ分明。見るに忍びんや胡塵の覇城を襲ふを。獨り廟堂倫檜の黠あり、豈に草茅岳韓の兵無からんや。丹心己に　君と　國とに許す。青史に留めんと要す身後の名を。苟くも諸賢回復の業を起さば、孤臣笑を含んで死するも猶生のごとくならん。

絶命詞

愛讀文山正氣歌。平生所養顧如何。從容相待就刑處。今日九原知己多。

譯讀　「絶命の詞」、愛讀す文山正氣の歌。平生の養ふ所顧ふに如何。從容として相待つ刑に就くの處。今日九原知己多し。

大橋訥庵

贈從四位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は正順。字は周道。順藏と稱す。年二十六帷を江戸に垂れ子弟を敎授す。學忠孝に基き尊王卑覇を以て人心の興起に力む。坂下の斬姦趣意書の倒正をなせしといふ廉にて就縛、獄にある數月後藩邸に幽せられしが病の爲に歿す。(二四七六—二五二二)

偶成

尊王攘夷豈無時。何計危言却被疑。至今蓋棺吾已矣。秋津洲裏一男兒。

譯讀　「偶成」。尊王攘夷豈に時無からんや。何ぞ計らん危言却て疑はれんとは。今棺を蓋ふに至つて吾已みなん。秋津洲の裏の一男兒。

偶感

白癡相率慕腥膻。漸看華氏欲祭衾。撲滅妖氛果何日。慨然撫劍問蒼天。

譯讀 「偶感」。白癩相率ゐて腥膻を慕ふ。漸く看る華民の祆を祭らんと欲するを。妖氛を撲滅するは果して何れの日ぞ。慨然劍を撫して蒼天に問ふ。

題槍

諂媚成風士氣柔。果見蠻虜擾神州。赤心報國豈無日。新焠光芒七尺矛。

譯讀 「槍に題す」。諂媚風を成して士氣柔なり。果して見る蠻虜の　神州を擾すを。赤心　國に報いるに豈に日無からんや。新に焠す光芒七尺の矛。

獄中作

刑屍累々鬼火青。枕頭時覺北風腥。婆心憂世夜難眠。起自窓端見大星。

譯讀 「獄中の作」。刑屍累々鬼火青し。枕頭時に覺ゆ北風の腥きを。婆心世を憂へて夜眠り難し。起ちて窓端より大星を見る。

得能淡雲　贈正五位　合祀　明治三一、七　明治二四、九

人見極馬又は石黒簡齋といふ。伊豫大洲の人。義擧の計成るに及び輪王寺の宮の護衞に選ばれ、近國の動靜を窺ふ中捕へられて獄に下り文久二年八月七日病死す。（二四九五―二五二二）

題しらず

あな嬉しわが　大君の　みこゝろをやがてやすめん年とおもへば

失題

只合是非期百年。衲衣辭世亦聊然。迂儒多抱陳編老。壯士元差瓦礫全。邊海風腥鯨鯢躍。帝閽雲黑旆旌懸。男兒自有男兒志。一任豎儒呼大顛。

譯讀 只合に是非百年を期すべし。衲衣世を辭して亦聊然たり。迂儒多くは陳編を抱いて老い。壯士元差づ瓦礫の全きを、邊海風腥くして鯨鯢躍り、帝閽雲黑くして旆旌懸る。男兒自ら男兒の志あり、一任　豎儒大顛と呼ぶ。

小山春山

名は朝弘。字は毅卿。下野國眞岡の人。坂下の擧に春山其謀議にあづかるを以て逮捕せられ傳馬町の獄に投ぜらる。赦にあひてかへり元治元年藤田小四郎の擧にあづかり佃島に竄せらる。又赦されて明治政府に仕へ司法・大藏二省に歷任し二十四年病歿す。（二四八七―二五五一）

送諸士之東

一穗寒燈照席紅。劍舞聲高氣勢雄。不是尋常離別比。生死誓期恢復功。

譯讀 「諸士の東に之くを送る」。一穗の寒燈席を照して紅なり。劍舞聲高うして氣勢雄なり。是れ尋常離別の比ならず、生死誓つて期す、恢復の功。

就囚

人生得失本悠悠。奇變如斯亦易憂。唯爲北堂老親在。數行涕淚落難留。

譯讀 「囚に就く」。人生の得失本と悠々たり。奇變斯の如きもまた憂ひ易し。唯北堂老親の在ますが爲に、數行の涕淚落ちて留め難し。

獄中病後

單身一自獄中下。疫病死生唯任天。縱遇妻兒離別苦。　聖恩難已三千年。

譯讀　「獄中の病後」。單身一たび獄中に下りてより。疫病死生唯天に任ず。縱ひ妻兒離別の苦に遇ふとも　聖恩已みがたし三千年。

獄中作

西風撲獄滿床塵。枌得文山希比親。一片丹心鬼神了。不怨天又不尤人。

譯讀　「獄中の作」。西風獄を撲つ滿床の塵。枌得文山比親を希ふ。一片の丹心鬼神了す。天を怨みず又人を尤めず。

雲となりあるは雨ともふりしきて神代の道に身をやつくさむ　（平田篤胤）

敷島の大和心を種として讀めや人々からくにのふみ　（松平直侯）

櫻咲く　御國しらすと百敷の千代田の宮に神ながらいます　（正岡子規）

戰ひに破れ果てしぞ古得衣（ふるこうもり）されど破れぬやまとだましひ　（小澤德松）

敵彈に倒れし戰友（とも）にまたがりて敵のこさじと銃射（うつ）つ吾は　（谷川豐）

第六、寺田屋騒動　（文久二年四月二十三日）

坂下浪士の「斬姦狀」に記せる「幕府が廢帝の前例を調査せしめたり」との風說は上國にも傳播し、全國の志士を激昂せしめ、大擧討幕の兵を越さんと謀るものあり。文久三年島津久光上洛の途にありしに、京阪の志士薩摩の藩士と共に、久光を擁して兵をあげんとし、多く京都に集れり。されども久光は「公武相融和し、幕府に命じて弊政を改革せしむべき」の策をたて、志士を戒めて輕擧を許さず。志士等久光を以て姑息なりとし、急に事をあげんとす。偶々有馬新七等。舟にて伏見に着し寺田屋樓上に於て討幕の戰略を議せり。久光之を聞き其臣鈴木・奈良原・道島・伊集院・大山の諸士を遣し慰諭せしむ。されども志士等之を聽かざりしかば、遂に刀を拔きて相鬪ひ、志士の內有馬・田中・柴山・橋口等之に死し、鎭撫の士も亦死傷あり。世に之を寺田屋騒動といふ。

有馬新七　贈從四位（明治二四、一二）　合祀（明治二二、一一）

名は正義。別に武磨と稱す。山崎派の學を修め、安政以來尊王討幕を主張し、交を天下の志士に結ぶ。文久二年島津久光の東上を期し事をあげんとし四月二十三日伏見寺田屋に會し畫策中、久光の鎭撫使と衝突し、亂刀の下に斃る。（二四八五—二五二二）

題しらす

梓弓はる立つ風に　おほきみの　御代ひきかへす時は來にけり

伏見にてよめる

つゆの間も忘るかたなき　大君の　御代のさかえを祈りつわれは

荒びなす醜のしこおみうち拂ひ肇國しらす　御代に復へさむ

大君に直くつかへて千萬代榮行く　御代に逢ふよしもがな

この身こそ露と散るとも亡き魂は永く　朝廷邊護りまつらむ

逸　題

天地無心春正央。凡桃俗李各爭芳。詩人不識九重裏。雲霧濛濛鎖[二]國光。[一]

譯讀　天地心無くして春正に央なり。凡桃俗李各々芳を爭ふ。詩人は識らず九重の裏。雲霧濛々として　國光を鎖すを。

橋口壯介　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二二、一一

名は隷三。鹿兒島藩の人。寺田屋にありて格鬪の末重傷を負うて死す。（二五〇一―二五二二）

八幡山を伏し拜みて

すめろぎの　御代を昔にかへさんとおもふ心を神も助けよ

柴山愛次郎　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二二、一一

名は道隆。鹿兒島藩士。常に橋口壯介と親しみ國事に盡力す。寺田屋事件に山口金之助の爲に斬らる。（二四九六―二五二二）

逸　題

忠良將士助明君。[二]廟議卽今　王事勤。好以關南三國力。[一]掃除墨魯百千軍。

譯讀　忠良の將士明君を助く、廟議卽今　王事に勤む。好し關南三國の力を以て、掃除せん墨魯百千の軍を。

森山新五左衞門　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二二、一一

名は永治。鹿兒島藩士。寺田屋の變に階下に仆れ更に蘇生し、翌二十四日違命の科により伏見藩邸に死を賜ふ。（二五〇三―二五二二）

題しらす

うき雲をはらひ清めて秋津洲の大和しま根にすめる月見む

是枝柳右衞門　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二二、一一

名は貞至。鹿兒島藩士。文久元年京に上り田中綏猷の家にありて病む。この間寺田屋の事あり連累と

して罪をうけ屋久島に流さる。元治元年十月十三日配所に病歿す。（　　一二五二四）

題しらず

もゝとせを半ば樂しく暮しけり殘は　御世にたてまつりてむ
一さかりありての後のさくら花こゝろのまゝに散れる樂しさ
草薙のつるぎにかはり　すめくにゝ殘るまが神われやはらはむ
生盡爲　天皇死爲忠義鬼
我ひとり天が下には生れきて　大内山の塵を拂ふぞ

田中河内介

贈正四位 明治二四、四
合祀 明治二四、九

名は綏猷。字は子德、恭堂と號す。但馬國出石郡香住の人。清華中山家の臣田中近江介の養子。從六位に叙せらる。廣く天下の志士と交り　皇權回復を唱へ、諸方に遊說す。文久二年伏見寺田屋に事齟齬し、囚へられて薩州に送らるゝ途中播磨灘航行中殺され海中にすてらる。（二四七五—二五二二）

皇子（明治天皇）御降誕の御用を蒙りし時よみて奉りける
骨を粉にくだきてのみか命さへかねてぞ　君にゆだねつる身は
時鳥を聞きて
時鳥なくこゑ聞けば寢さめにも雲井いかにと思ふこの頃

題しらず

大君の　御旗のもとに死にてこそ人と生れし甲斐はありけり

辭世

ながらへて變らぬ月を見るよりも死して掃はむ世々のうき雲

無題

天下滔滔億兆民。誰將良策拂邊塵。扼腕憤激豪談客。多是貪生畏死人。

譯讀　天下滔々たり億兆の民。誰か良策を將つて邊塵を拂ふ。扼腕憤激豪談の客。多くは是れ生を貪り死畏るゝの人。

失題

夢裡空過四十春。被欺群小誤此身。一朝覺悟挂冠去。直作醉吟豪放人。

譯讀　夢裡空しく過ぐ四十春。群小に欺かれて此の身を誤る。一朝覺悟し冠を挂けて去り。直に醉吟豪放の人とならん。

田中瑳磨介

贈正五位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

名は嘉猷。東郊と號し河内介綏猷の長子。父に隨ひ共に國事に奔走し、寺田屋事變の際、連累として鎭撫使の爲に鹿兒島藩邸内に囚へられ、父と共に護送せらるゝ途次船中に於て慘殺せらる。（二五〇六—二五二二）

題しらず

武士のおもひ定めて放つ矢は金もいはほも透すべらなり

逸　題

落落乾坤人若海。微軀辱被　天朝光。嘲風弄月高人意。就義忘身烈士腸。腰間三尺何足恃。胸裡萬軍誰可當。慷慨壯士太寂寞。一聲相叫吸大觴。

譯讀　落落たる乾坤人海の若し。微軀辱くも　天朝の光を被る。風を嘲り月を弄ぶ高人の意。義に就き身を忘る烈士の腸。腰間の三尺何ぞ恃むに足らん。胸裡の萬軍誰か當るべき。慷慨の壯士太だ寂寞。一聲相呼んで大觴を吸ふ。

海賀宮門

贈正五位（明治二四、一二）
合祀（明治二四、九）

秋月藩士。名は直求。字は徳門。寺田屋の變に誘致せられ鹿兒島に送らるる途、九月九日日向細島にて斬殺せらる。（二四九四―二五二二）

題しらず

夏の夜のみじかき床の夢だにも　國やすかれとむすびこそすれ

堤　李左衛門

名は義次。三河の人。一に松右衛門とも傳へらる。文久二年四月伏見の擧に與し、五月洛東大日山に屠腹す。（二四九八―二五二二）

洛東大日山にて身まからんとしける時血もて書きつけける

君がためつくす心は久方の天つみ空の神ぞしるらむ

辭　世

おほ空をちりゆく神やしらすらむ　君かためにと殘す心を

僧　胤　康

日向延岡慈眼寺の僧。慷慨の志氣烈しく、勤　王の兵を募り大義を明かにせんとす。伏見の擧に盡力して縛せられ慶應二年四月病歿。（―二五二六）

數ならぬ身にしあれども　君がためつくす誠はたゆまじものを

三十年來一夢中。　捨生取義幾人同。　家鄉臥病雙親在。　膝下奉歡恨未終。（武林唯七）

海城寒柝月生潮。　波際連檣影動搖。　從此五千三百里。　北辰直下建銅標。（長尾秋水）

星斗闌干月滿天。　書窓深座不就眠。　欲知世運隆興象。　神武東征戊午年。（日下部伊三次）

第七、木像梟首件事　（文久二年二月二十三日）

寺田屋騒動以來、攘夷黨の志士多く京都に集り、市内に横行しければ、帝都は殆ど無政府の觀を呈し、公家の家臣にして通謀せる者は、皆其殺傷する所となり、公卿の國事を談ずる者之を引きて黨援となし、志士一夕の談、明旦忽ちにして　詔勅となれりといふ。松平容保の京都守護職として上洛せるはかゝる時なりしなり。會〻文久三年二月十三日、仙石・長尾等武家の王權を奪ふを憤慨し、洛西等寺院に入り、足利累代の木像の中、尊氏・義詮・義滿三人の木首を引拔き、三條河原に持ち出し、罪狀をあげて之を梟木にかけ、以て幕府を諷す。容保等之を目して、暗に德川氏を呪詛するの非行にして、また朝威を蔑如するものとなし、長州藩の反對ありしにも係らず、暴徒を捕へて之を處斷したり。

仙石左多雄

贈正五位　明治三一、七
合祀　明治二四、九

名は隆明。鳥取支封鹿奴藩士にして江戸定府と爲り祐筆役を勤む。足利三將軍の木像事件に與りしを以て幕兵の爲に寓所を襲はれ自ら肚を割きて死す。（二五〇二―二五二三）

川崎驛にて父母を思ひ出で

歎くにもなほあまりあり父母にこれや別れの限りとおもへば

辭　世

よしや身はいづこの浦に沈むとも魂はとゞめむ　九重の庭

長尾郁三郎

贈正五位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は武雄。京都三條西洞院塩屋町の商賈にして家號を絹屋といふ。多く志士を家に會し共に謀る所あり。同志と等持院事件に參加し幕吏に捕へられ、正論敢て屈せず久しく獄中に呻吟。元治元年七月二十日、京變に當り獄舍に斬らる。（二四九七―二五二四）

折にふれて

あはれ世にことあら磯の浪立たば水づくかがねは我が願ふこと

獄中詠

君がため死なむとおもひ定めてはひとやの中はものゝ數かは

大庭恭平

名は機。松齋と號す。會津若松藩士なり。同志と足利三代の木像の首を三條磧に列ね梟首の狀の如くし、高氏以來朝盡を蔑にし國躰を汚すを榜書して暗に時政を諷刺す。遂に捕へられて上田藩に錮せられしが、後赦されて明治政府に法官たり。

題しらず

罪なくて見ばやと人のねがふらんひとやの中の月を知らずや

下獄途中作

君恩深似海。臣命一毫輕。無復關心事。檻車載夢行。

譯讀 「獄に下る途中の作」。君恩深きこと海に似たり。臣命一毫輕し。復た心に關する事無し。檻車夢を載せて行く。

獄中雜作

鼎鑊如飴豈敢辭。狂夫心事鬼神知。朝朝只讀文山集。要賦從容就死詞。

譯讀 「獄中の雜作」。鼎鑊飴の如し豈に敢て辭せんや。狂夫の心事は鬼神知る。朝朝只讀む文山が集。賦せんと要す從容死に就くの詞を。

又

三十三年如一夢。平生大志遂難伸。寄言天下英雄士。總作從容就死人。

譯讀 三十三年一夢の如く、平生の大志遂に伸び難し。言を寄す天下英雄の士。總て從容として死に就くの人と作れと。

又

家山遠隔路三千。身作縲紲徒自憐。今日見衣如見母。朝朝著得拜東天。

譯讀 家山遠く隔つ路三千。身は縲紲となりて徒に自ら憐む。今日衣を見るは母を見るが如し。朝朝著得して東天を拜す。

又

誰言忠孝難兼得。一死酬國卽兩全。萬事平生落人後。今年初著祖鞭先。

譯讀 誰か言ふ忠孝兼ね得がたしと。一死國に酬ゆれば卽ち兩つながら全し。萬事平生人後に落つ。今年初めて祖鞭の先を著けたり。

師岡正胤

江戸の國學者。節齋・布志の屋と號す。文久三年等持院事件に關し捕へられて幽せらる。明治六年松尾神社大宮司に任じ後宮內省文學御用係たり。三十二年歿す(二四九〇—二五五九)

六月晦日

皇國を汚す戎夷をはらはすば祓除のわざもしるしなからむ

長尾武雄が馭戎双六を物せしを見て

手すさみのはかなき物も國のため戎夷をうたむ事のみにして

陳志

すめろぎのみ爲に死ねと敎へてし父のこと葉をなに忘れんや

國のため死なむと思ふこゝろこそ神のたまへるたからなりけれ

國のためつくして死なばわか魂は神の御許に行かずともよし

或時思ひつゞけたる

君のため家をも身をもかへりみすつくす心ぞやまとだましひ

足利三代の木像を梟首せし時

五百年の昔にわれの生れなばそのうつし身を斯くしてましを

第八、天誅組義擧（文久三年八月）

初め文久三年八月十三日、大和　行幸の事を　勅し給ふや、尊攘黨の藤本・松本・吉村・竹志田等相謀り、侍從中山忠光の京都を脱走せるを主帥と仰ぎ、同志を募りて大和地方に入り、佐幕黨の諸侯に遊説して、王事に勤めしめ、次いで　行幸の前驅たらしめんと欲し、先づ死を決して河内に入り、狹山の城主北條氏に説きしも應ぜず、藤本等卽ち更に議を凝らし「五條の代官鈴木源内が常に尊攘黨の所爲を妨害するを以て、之を殺して義擧の血祭となす」に決し、直ちに軍令を布き、十七日夕代官所を襲ひて源内及其手代長谷川仙助を斬り、附近の諸大名及有志に檄を送りしに、四隣風靡して來り會する者多し、東久世通禧之を聞き、其遂げ難きを慮り、平野次郎を派して鎭撫せしめしたれども皆聽かず。たま〳〵大和　行幸中止を以て、諸大名の來る者なし。忠光等十津川郷を殉へて千餘の兵を得、二十六日高取城を攻めて克たず、次いで紀州・郡山等の大兵幕命により來り攻むるに會し防戰力めしも遂に大敗して事やむに至る。然れども勤　王倒幕を標榜して兵をあぐるは實に之が權輿たり。

中山忠光

贈正四位　明治三一、一一
合祀　明治二一、四

大納言忠能の第三子。元服して從四位下侍從に任叙せらる。文久の初より尊攘の大義を主張し弘く同志を募る。吉村・松本・藤本等と謀り大和に義兵をあげ、先づ五條代官を誅し、追討の兵と戰ひ敗衂し、脱して長州に流寓中元治元年十一月十五日、山口藩俗論派のために暗殺にあふ。（二五〇三―二五二四）

題　しらす

えみしらと共に東夷もたふさねばいかで　御國の汚れすゝがむ

十津川にて

君がため赤き心をあらはして紅葉ちれやますらをの伴

思ひきや山田の案山子竹の弓なすこともなく朽ち果てんとは

吉村寅太郎

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治一六、五

名は重郷。土州高岡郡檮原村の人。文久三年同志と中山忠光を擁して義兵をあげ、諸藩の追兵と戰ひ八月二十七日高取に敗れ、天之川の要害を扼し、苦戰數日、寡衆遂に陷り、敵彈腹部を貫きて死す。（二四九七―二五二三）

題　しらす

くもりなき月を見るにも思ふかな明日は屍の上に照るやと

逸題

櫻樹未開柳眼嬌。決心呼友酒終宵。一家一國何足惜。宜使本朝爲本朝。

譯讀 櫻樹は未だ開かず柳眼は嬌ぶ。心を決して友を呼び酒終宵す。一家一國何ぞ惜しむに足らん。宜しく　本朝をして　本朝たらしむべし。

安積五郎

贈從四位 明治三五、一一
合祀 明治二四、九

名は武貞、東海と號す。江戸淺草に住し賣卜を業とす。軀幹長大、龍眼虎髯、慷慨にして義を好み、憂國の心深し。大和の義舉に加はり屢々奇策を出して敵を破る。九月二十三日夜福知堂村に於て津藩の兵に捕へられ京都六角の獄に投ぜられ元治元年二月十八日斬らる。(二四八八—二五二四)

題しらず

國のため　君の爲には惜しからぬ數にもあらぬしづか身なれば
つくしてもなほつくしてむ　君がため露の命のあらんかぎりは

獄中作

捨生取義是男兒。四海紛紛何所期。好向京都埋俠骨。待他天定勝人時。

譯讀 「獄中の作」。生を捨てゝも義を取るは是れ男兒。四海紛紛何の期する所ぞ。好し京都に向つて俠骨を埋め。他の天定まりて人に勝つ時を待たん。

又

此時此恨若何窮。毛髮皆鳴刀鍔風。白日空濛天色怒。滿壇怪雨斬英雄。

譯讀 此の時此の恨若何ぞ窮らん。毛髮皆鳴る刀鍔の風。白日空濛天色怒り、滿壇の怪雨に英雄を斬る。

獄中述懷

關左男兒臣武貞。尊攘立志向帝京。唱義東西備嘗險。以身殉道生甚輕。屢踏死地屢臨危。天命有在何懷生。死忠死孝臣子分。從容只待就典刑。

譯讀 「獄中の述懷」。關左の男兒臣武貞。尊攘志を立てゝ帝京に向ふ。義を唱へて東西し備に險を嘗め、身を以て道に殉ず生甚だ輕し。屢々死地を踏み屢々危きに臨む。天命在る有り何ぞ生を懷はん。忠に死し孝に死するは臣子の分。從容として只待つ典刑に就くを。

劍舞謠

日出國兮有名寶。百練精鐵所鍛造。光鋩電閃夏猶寒。風蕭蕭兮髮衝冠。請看日出男兒膽。踏白刃兮犯礮丸。犯礮丸兮蹈堅陣。縱橫搏擊山岳震。有死之榮無生辱。不須將臺受約束。

譯讀 「劍舞の謠」。日出の國、名寶有り。百練の精鐵鍛造する所。光鋩電閃夏猶ほ寒し。風は蕭々として髮冠を衝く。請ふ看よ日出男兒の膽。白刃を踏み、礮丸を犯す。礮丸を犯し、堅陣に臨む。縱橫搏擊山岳震ふ。死の榮ありて生の辱無し。須ひず將臺約束を受くるを。

伴林六郎

贈從四位 明治二四、一一
合祀 明治二四、九

河內國南河內郡道明寺村尊光寺に生る。夙に憂國の志を懷き壯歲法衣を脫し名を光平と改む。文久三年中山忠光の參謀となり、各所に奮戰中、脚疾の爲行步意の如くならず、奈良奉行の手に捕へらる。

翌年二月十六日京都六角の獄に刑死す。（一四七三―一五二四）。光平詞藻に長じ、兵馬倥偬の際猶筆をすてず陣中亦日誌あり、能く當時の眞象を錄す。

京都誓願寺道場張札の中に記せる

事しあらば誰か命を惜しむべき　君がめぐみにしげる夏草

おほきみの魂のみ楯と身をなさばみづく屍もなにかいとはむ

日の御影照らすとすれど中空にあやしき雲のたちへだてつゝ

南山にありける時「あらざらんこの世の外の心構如何」などゝいふ人のありければ

わが靈はなほ世に茂る　御陵の小笹の上におかんとぞおもふ

中山侍從卿五條政府の奸吏等を斬戮梟首し、正を賞し邪を罰し、露ばかりも法度にたがふ事なかりしかば、百姓四方より驅け集りて、孝子の慈父を拜するが如し。其頃詠みて奉りける

時のまにいばらからたち刈のけて埋もれし　御代の道開きせむ

言　志

負ふ征矢のそやとし云はゞ荒野らの露とくだけんことをのみこそ

昨夜南都へ來りし路の程のいと暗かりければ

闇夜行く星の光よおのれだにせめては照らせものゝふの道

さゝげつる身はなつ虫のをちかへり火にも水にも入らんとぞ思ふ

年をへし古家の軒の蛛の巣も拂ひすつべき時は來にけり

辭　世

君か代はいはほとゝもに動かねばくだけてかへれ沖つしら波

辛酉二月。出寺蓄髮時作

本是神州清潔民。謬爲佛奴說同塵。如今棄佛佛休恨。本是神州清潔民。

譯讀「辛酉の二月、寺を出でゝ髮を蓄ふる時の作」。本と是れ神州清潔の民。謬りて佛奴と爲り同塵を說く。如今佛を棄つ佛恨むことを休めよ。本と是れ神州清潔の民。

讀楠公記

老楠背日愈凝翠。殘菊凌霜猶有香。義士終生無上天助。徒教王事託豺狼。

譯讀「楠公記を讀む」。老楠日に背いて愈々翠を凝らし。殘菊霜を凌いて猶香有り。義士終生上天の助無し。徒に王事をして豺狼に託せしむ。

宍戸彌四郎

贈從四位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

名は昌明。三河苅谷の藩士。文久三年大和の擧兵に與みし幕軍と十津川に戰ひ、九月十四日轉じて菅家口に激戰中砲丸に傷つき川に陷りて敵手に斃る。（二四九三―二五二三）

十津川にて討死しける時

今はたゞ何かおもはむ敵あまた打ちて死にきと人のかたらば

乾十郎

贈正五位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

名は嗣龍。桃庵と號す。大和五條の醫。文久三年藤本鐵石の勸誘に同盟して義擧を大和に起す。各地に奮鬪の末就縛。六角の獄につながれ、元治元年七月十九日斃さる。（二四八八―二五二四）

獄中にてよめる

いましめの繩は血しほに染むるとも赤き心はなどかはるべき

述懷

おやおやの親よりうけし　すべらぎのあつき惠はあに忘れめや

野崎主計

贈正五位 明治二四、一一
合祀 明治二四、九

名は正盛。大和十津川村の鄕士。梅田雲濱に師事し、尊攘の事に奔走す。安政元年露艦大阪に入りし時、雲濱を謀主に仰ぎ事をあげんとせしが其退帆によりて止む。後中山忠光の擧に加はり九月二十四日川津狸尾山中に自殺す。（二四八四―二五二三）

大君に仕へぞまつるその日よりわが身ありとは思はざりけり

深瀨繁理

贈正五位 明治三五、一一
合祀 明治二四、九

名は維正。大和十津川村の鄕士。文久三年擧兵の事あるを聞き、同志を募りて之に隨ふ。各地轉戰の後捕へられ九月二十五日白川河原に斬らる。（二四八七―二五二三）

牢中の作

あだし野につゆと消えゆく武夫の都にのこす大和魂

竹志田熊雄

贈從五位 明治三五、一一
合祀 明治二四、九

名は重楯。肥後國玉名郡大濱の人。中山忠光の義擧に加はり爾來四十餘日、各地に苦戰し、後紀州に出でんとして風屋壽福寺に投ず、この時病んで歿す。（二五〇六―二五二三）

題しらず

虎ほゆるあら山中もふみ分けて　すめら軍の道しるべせむ

玉きはる命は死して　大君の　御代をまもりの神とならなむ

鶴田陶司

贈從五位 明治三五、一一
合祀 明治二一、一一

名は道德、又孝良。久留米藩醫道全の次男。中川忠光義旗をあぐるに際し之に應じて各地に轉戰し、遂に捕に就く。元治甲子二月十六日京獄に殺さる。（二五〇〇―二五二四）

除夜

報國未成擬葛藟。況逢除夜感盈胸。乾坤寂寂陰房靜。遙響東山百八鐘。

譯讀 「除夜」。報國未だ成らず葛藟に羅る。況んや除夜に逢うて感胸に盈つ。乾坤寂寂陰房靜かなり。遙に響く東山百八の鐘。

吉田重藏　贈從五位 明治三五、一一　合祀 明治二四、九

名は良秀。筑前筑紫郡の人。大和の義擧に加はり、五條天之川辻より各地に轉戰し、十津川に敗衂し、和歌山藩兵の追捕に逢ひ、京獄に囚へらる。元治甲子七月二十日死刑。（二四九一—二五二四）

大和へ首途の時八幡宮へ奉る

八幡神　すめぐにあはれとおぼしなば内外のえみし攘へ給へや

石川一

志士。名は貞幹。因幡鳥取の別封松平伊勢守の家人。同志と等持院事件に關し逐電して後、中山忠光に從ひ軍敗れ獄に繫がれ、元治元年七月十九日斬らる。（二五〇三—二五二四）

述志

大君のみためとつくす大丈夫に神のめぐみのなからましやは

刑に臨みて

芳ばしき名をやとゞめん武夫の世にさきがけて花は散れども

保母建

名は景光。肥前島原藩の人。本名は丸山太郎眞彦といふ。天誅組の義徒。（二五〇三—二五二四）

ことしあらば我名に負へる言のごとたけりてうたんえみし醜おみ

第九、七卿落（文久三年八月十七日）

文久三年八月十三日、大和行幸、攘夷親征の勅旨下り、事將に行はれんとする時、形勢又忽ち一變し、尊融親王より「親征の議は聖意にあらざる旨」を告げ、議奏・傳奏・國事係・參政・寄人等の參朝を留め、長州藩の堺町御門守衛を除き、薩州藩をして之に代らしめ給ふ。此に於て藩士憤激し、逆擊して君側の姦を清めんと主張し、隊長の命をきかず。眞木・久坂・桂・寺島等謀りて大佛に退き後圖をなさんと、藩士を慰撫し退いて妙法院に屯し、今後の進退を議す。三條以下の七卿亦來り會す。志士議論多ければ吉川經幹・毛利元純・益田親旋等は、諸卿を奉じて歸國し、徐に事を謀るを得策とし、三條・三條西・四條・東久世・壬生・錦小路・澤の七卿は、長州藩士に擁せられて長州に奔り、其他の諸卿は別を告げて各自邸にかへりて謹慎せり。十九日朝廷人を派して七卿を追ひしも及ばず、勅して其官爵を削り、之を捕ふべきを命せり。かくて急激なる尊攘を主張せる長州藩は退けられ、公武一和を主張せる薩州藩は會津藩と共に京都を守護し、漸次勢力を振ふに至れり。

三條實美

維新の元勳、正一位公爵。文久二年　詔を奉じて攘夷の實行を期す。三年九月朝議遽に變ぜしかば、同志六卿と共に長門に奔る。慶應三年赦されて議定となり、明治元年右大臣、三年太政大臣に進む。十八

年内閣の制改まるに及び退きて内大臣となる。明治二十四年二月十九日薨ず。（二四九六―二五五一）

正月九日山口にて

大君はいかにいますとあふぎみれば高天原ぞ霞こめたる

大君の　おほみ心をそよとだにこちふく風よ我に傳へよ

述懐

梓弓もとすゑたがふよの中を神代のみちにひきかへしてむ

大君のまけのまに〳〵一筋につかへまつらむ命しぬまで

浮雲のかゝらばかゝれ天つ風吹き起るべき時なからめや

いかにして筑紫の海による波の千重の一重も　君に報いむ

萬代の名こそ惜しけれうつ蟬の世の人言はさもあらばあれ

四條隆謌　贈正二位

藤原鎌足の曾孫大臣魚名の裔。文久年間朝議俄に變じ三條實美等と長州に奔り、慶應三年赦されてかへり戊辰の役以來功あり。侯爵を授けられ貴族議員となり、明治三十一年病みて薨ず。

題しらず

玉の緒はひかり消えなば人しれず　君のまもりとならましものを

東久世通禧

伯爵、竹亭と號す。文久中六卿と共に長州に奔り、戊辰の役に征東軍の參謀となる。元老院副議長・貴族院副議長・樞密院副議長たり。明治四十五年薨ず。（二四一五―二五六六）

山口にありける時龜井茲監へおくる

君がためかたき心は石見のやうごかざらなむ萬代までに

太宰府にありける折

天津日の照すかぎりの國といふ國にてらさむ神のみいづを

壬生基修

從一位、伯爵。文久三年三條公等六卿と共に長州に走り、尋いで筑前に移る。明治元年會津征討の參謀たり。後東京府知事・元老院議官・齋香問祇侯・貴族院議員を經て三十九年三月五日薨ず。（二四九四―二五六六）

題しらず

玉の緒はうき世の塵にきえぬとも　君にしられば嬉しからまし

うごきなく思ふこゝろは石清水かたき心ぞ神やくみしる

錦小路頼德　贈正四位 明治三、四　合祀 明治二一、四

子爵。字は一貫。翠園と號す。嘉永四年、大和權介に任じ累進して從四位下右馬頭たり。三條實美と進退を同じうし、國事に盡力し幕府の忌む所となる。所謂七卿の一。日夜畫策する所ありしが不幸馬

關藩留中遽に病みて卒す。（二四九五―二五二四）

旅の歌の中に

なにかその濡るゝを厭ふ草まくらかりにも　君がためと思へば

故ありて長門の國に下りける國

世の人はといへかくいへ　君がためつくすまことは神ぞ知るべき

文久二年十二月二十日水野丹後をして龜井茲監へ申送る

茂りあふおごろが中もしをりして奥ある道を人に教へむ

岩山も行けば行かれて世の中を治むる道のなどなかるらむ

辭　世

君がためすてむ命のいたづらに露と消えゆくことをしぞ思ふ

澤　宣　嘉　贈正三位　明治六、九

幼名は熊麿、春川と號す。姉小路公遂の三子。出でゝ澤氏を嗣ぎ主水正と稱す。文久三年十月生野の敗後脱して伊豫に遁れ、更に海島にかくる。己にして歸京の朝命あり。戊辰正月二十一日京師に入り參議に任ず。奥羽に出征して功あり。明治六年九月廿七日病歿す。（二四九四―二五三三）

題　し　ら　ず

こゝろのみ思ひこがして文机の書を見るさへものうかりけり

大君のめぐみあふぎて賤しきもともに春いはふらむ

第十、生　野　義　擧　（文久三年十月）

平野次郎は、天誅組の擧兵を中止せしめんとして遂げず京師にかへりしが、會〻大和　行幸中止の令出づるに及び、山陰に遁れたり。時に薩州の美玉三平等城崎に在り、農兵を募り十津川に應せんとして人を長州に派し、次郎等と共に七卿を戴き、且つ兵を長州に借りんとせしが、長藩之を辭せしを以て、七卿に請ふ。澤宣嘉之を諾し、長州を脱して但馬に至り、十月兵を生野に擧ぐ。三平・次郎南八郎等其謀主たり。時に京都は公武合體黨の世となり、形勢甚だ不利にして、農兵も亦疑懼して振はず、姫路・出石・福知山等の兵、京都守護職の命をうけ來り攻むるに及び、農兵背反して策の施すべきなく、三平等戰死し、次郎は捕へられ、宣嘉は逃亡して、餘衆全く潰散せり。

平　野　次　郎　贈正四位　明治二四、四　合祀　明治二四、九

名は國臣。月廼舍・友月庵・柏舍・獨醒軒の寓名あり。米艦渡來以降、慨然身を國事を委ね、皇威振張を圖り、頼・梅田の諸士と交り、戊午の獄、追捕を逃れ福岡に潛む。尋で西郷・忍向のために斡旋し、鹿兒島に赴き共に危難を踏む。文三年十月澤宣嘉を但馬に迎へて義旗をあぐ。軍備未だ整はず敗れて城崎に潛伏し竹島直記と稱し、再擧を謀るの際、豊岡藩の爲に捕へられ、京都六角の獄につながれ、元治元年長人大擧京に迫るの翌日（七月二十日）同囚三十七人と獄中に殺さる。（二四八六―二五二四）

折にふれて

かたらはむ人しあらねば　大君は雲井にひとりものおぼすらむ

斯くばかりなやめる　君の御心を安めまつれや四方の國たみ
數ならぬ草のした葉のつゆの身も死なばや死なむ　大君のへに

鹿兒島に入りさま〴〵同志と語らひけるに事の成らざりければ
わが胸のもゆる思ひにくらぶれば煙はうすし櫻島山

述懷

君が世の安けかりせばかねてより身は花守とならましものを

題しらず

靑雲の向伏すきはみ　すめろぎの御旗かゞやく　御代となしてむ
數ならぬ身にはあれどもねがはくは　錦の旗のものに死にてむ

月形洗三等に送る狀中に

今しばしまてや都の花紅葉　行幸ある世となさで止むべき

題しらず

大君にさゝげまつりし我が命今こそ捨つる時は來にけれ

生野を出でける時

わが命あらんかぎりはいつまでもなほ　大君のためにつくさむ
今更にわか身惜しとは思はねど心にかゝる　君が世のすゑ

心よくやがてみながら苅りすてむほこらばほこれ鬼のしこ草
わか魂は但馬の國の神となりて　大君まもる人をたすけむ

文久三年八月十四日、拜學習院出仕之恩命喜賦

勝敗由來屬彼蒼。豈悲志士死沙場。西陲方伯勤　王志。坐待　天朝　勅一章。

譯讀　「文久三年八月十四日、學習院出仕の恩命を拜し、喜んで賦す」。勝敗は由來彼の蒼に屬す。豈に悲まんや志士の沙場に死するを。西陲の方伯勤　王の志。坐して待つ　天朝の　勅一章を。

獄中作

縱令藩人評賊生。　天朝容我下忠名。十年辛苦既今解。默笑獄中待落成。

譯讀　「獄中の作」。縱令藩人の賊生と評するも、　天朝我を容して忠名を下す。十年の辛苦既に今解く。默笑して獄中に落成を待つ。

辭世

龍領虎口寄斯躬。半世功名一夢中。他日九原埋骨處。刑餘誰又認孤忠。

譯讀　「辭世」。龍領虎口斯の躬を寄す。半世の功名一夢の中。他日九原骨を埋むる處。刑餘誰か又孤忠を認めん。

戸原外　橋　贈從四位　明治三一、七
合祀　明治二四、九

名は綱明。字は公實。秋月藩の醫家に生る。平野國臣等と謀り、遂に澤宣嘉を擁して

兵をあげ、天誅組に應援をなしたるも成らず。山口村妙見堂に退き河上彌市等と同じく刄に伏して死す。（二四九五―二五二二）

思ふことありて
劍太刀さやにをさめてものゝふのこがまほしきは心なりけり

鉢巻のきれに書きつけたる
玉鉾の道一すぢにふみてこそわが日の本の人といふらむ

題しらず
世のためとわがいつはらぬ眞心は糺の森の神や知るらむ
冬の夜は母その杜や寒からんいたくな吹きそ峯のさあらし

囚中雜吟

秋水鋩寒三尺刀。滔天妖霧奈難消。從今一死爲河嶽。正氣千秋護本朝。

譯讀 「囚中の雜吟」。秋水鋩は寒し三尺の刀。滔天の妖霧消しがたきをいかんせん。今より一死河嶽となり。正氣千秋本朝を護らん。

又

靜窓攤卷漏聲沈。大月依然照我襟。俯仰乾坤無所愧。此時初識古人心。

譯讀 靜窓卷を攤いて漏聲沈む。大月依然として我が襟を照らす。乾坤に俯仰して愧づる所無し。此時初めて識る古人の心。

河上彌一郎 贈從四位 明治二四、一二 合祀 明治二一、四

名は正義。山口藩八組の士。但馬の擧に加はる名を變じて南八郎といふ。事敗れ九人と共に自裁す。正義一々之を介借し最後に獨り徐に屠腹じて死す。（二五〇三―二五二三）

三田尻より乘船して都に上る時
後れなば梅も櫻に劣るらんさきがけてこそ色も香もあれ

文久三年の冬國を出で但馬に赴くとき
一すぢに思ひこめたるわが心なぞ今さらに止まらるべき
川上のすめるを受けてゆく水の末に濁れる名をば流さじ

無題
仰不恥天我自吾。縱令斃不借人扶。平生膽氣都如此。正是堂堂大丈夫。

譯讀 仰いて天に恥ぢず我は自ら吾なり。縱令斃るゝとも人の扶を借らず。平生の膽氣都て此の如し。正に是れ堂堂たる大丈夫。

又

鐵馬聲寒明木天。滿眸春色自淒然。國憂冰解知何日。金革叢中又一年。

譯讀 鐵馬聲は寒し明木の天。滿眸の春色自ら淒然。國憂冰解するは知んぬ何れの日ぞ。金革叢中又一年。

横田友治郎

贈正五位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

名は靖之。鳥取藩の人。文久三年生野の敗潰に及んで國臣と潜に城崎に匿れ、東久太郎と稱し後舉を策する折、豊岡藩の探知する所となりて縛に就き、京都六角の獄に繫がる。元治元年七月二十日長人闕に迫るに際し幕吏の爲に國臣等數人と共に獄中に慘殺せらる。（二四九四—二五二四）

都の獄屋にて

五月雨は降りまさりけり古里のわが垂乳根やいかにますらむ
醜草をなぎはらはむと思ひしにはたさで果つるほどぞ悲しき

白石廉作

贈正五位 明治二四、一二
合祀 明治二一、四

名は資敏。馬關の豪族なり。關門國學を好み尊王の志あつく產を破つて有志の士を助く。澤宣嘉を奉じて兵をあげ妙見山に自刄す。（二四八八—二五二二）

偶感

百魔千障交相攻。馳驅工夫只返躬。到底難除私一字。如今猶未是英雄。

譯讀 「偶成」。百魔千障交ゝ相攻む。馳驅の工夫は只躬に返る。到底除き難し私の一字。如今猶ほ未だ是れ英雄ならず。

黑田與一郎

贈正五位 明治三六、一一
合祀 明治二四、九

名は重清。但馬養父郡豪族。中島重憲の四子。銀山の擧に加はりて捕へられ慶應二年獄中に病歿。（二四九四—二五二六）

玉鉾の道ある國のますらをのえみしを拂ふさきがけの旅

伊藤龍太郎

贈從五位 明治三六、二
合祀 明治二四、九

名は祐之。丹波氷上郡中山村の人。平野國臣の擧に加はり、敗衂し出石藩兵に捕へられ在獄五年、慶應三年病歿。（二四八五—二五二七）

折にふれて
垂乳根にさきだつ罪はおもくともいかゞはすべき　天皇のため

辭世

事なきをいのるは人の常なれどむやにやまれぬ今の世の中

辭世

忠義由來在攘奸。勤王事業極艱難。從容今日臨刑處。請看赤心赤於丹。

譯讀 「辭世」。忠義は由來奸を攘ふに在り。勤王の事業極めて難。從容今日刑に臨む處。請ふ看よ赤心の丹より赤きことを。

中原太郎

名は兼清。但馬養父郡高田村の莊官。實弟黑田重清及太田・多田・伊藤等と謀りて銀山の擧に入り敗走木谷に死す。（—二五二三）

題しらす

ふして思ひ起きても思ふ　すめろぎのみ旗なびかし夷はらはむ

一

多田彌太郎　贈從四位　明治二四、一二

名は玄德。但州出石藩の人。銀山潰散の節辛うじて遁れ、潛匿轉々元治元年本國にて圍殺せらる。（二四八六―二五二四）

逸題

神州士氣疾如風。一掃洋夷眼界空。却笑多年沿海穩。費來天下幾英雄。

譯讀　神州の士氣疾きこと風の如し。洋夷を一掃して眼界空し。却て笑ふ多年沿海の穩かなるに、費し來る天下の幾英雄。

本多小三郎　贈正五位　明治二四、一二

元膳所藩士。中年普化僧となり素行といふ。生野の義擧に加はり刑に就く。（二四八〇―二五二四）

捕となりて都へ登りける道すがら

世の中の人は何とも石清水きよきこゝろは神やしるらん

三牧謙介

名は秀胤。尾州の人。生野の義擧に加はり姫路藩に縛せられ京獄に下され、慶應元年病歿。（二四九九―二五二五）

あつさ弓　君かみいつをいにしへに引かへさばやますらをの友

第十一、筑波山義擧

（元治元年三月）

抑水戸藩にては、大日本史編纂に關することより二黨を生じ、漸次發展して政治上の黨派となる。而して結城寅壽等の亞流たる所謂書生派と、藤田東湖等の志を傳へたる天狗黨とは、齊昭の頃より多少の軋轢ありしが、老侯薨ずるに及び全く統制を失ひ、相背馳する勢となれり。當時天狗黨の首領藤田小四郎は、齊昭の遺志を遂げんとして尊攘を主張し、元治元年三月二十六日筑波山により、田丸直允を主將となし、部署を定め、檄を四方に傳へしに集まるもの多し。卽ち議して日光山に詣り神廟によらんとし、齊昭の神主を奉じ東照宮を拜し、太平山に陣す、藩主慶篤の鎭撫にあひ、去て筑波山による。耕雲齋また館山常光寺に據り、謀を太平山・筑波山・潮來・玉造・鹿島等の同志に通じ、書生派を退け、藩論を統一せんとせしが、幕府の大軍にせめられ、天狗黨振はず。耕雲齋事の成らざるを知り、上洛して情を　闕下に奏せんと、館山の陣を撤し、筑波の餘黨を集めて退却す。幕軍おそれて迫らず。耕雲齋等抗するを破り通過を妨げざる地は秋毫も侵すなく、中仙道をへて西上せり。幕府沿道の諸藩をして之を扼止せしめんとせしに、高崎の兵は下仁田に破られ、松本及諏訪の兵は和田峠に要して砲戰數時亦その突破する所となり、之を遮ぎるものなし。美濃にて中村半次郎（桐野利秋）の勸めを却け、近江より北陸に出でんとし、雪のために苦み、遂に加賀藩によりて降を乞ふ。よりて之

を敦賀に拘し、翌慶應元年二月吏を敦賀に遣はし之を處刑せり。

武田耕雲齋

贈正四位 合祀 明治二四・一二 明治二二・五

名は正生。字は伯道。通稱は彦九郎。後伊賀と改め、如雲と號し退隱して耕雲齋といふ。元治元年內臣事を用ふるに及び、國事方に急なるを以て正義の士下總小金驛に至り、幕府に建言の事あり、市川黨虛に乘じて藩內を擾亂す。藩主目代松平頼德、鎭撫に赴くに當り正生出でゝ從ひ、遂に市川黨及び幕府諸藩の兵と戰ふこと將に七旬、後狀を闕下に訴へんと圍を潰して西上、越前新保に於て加賀藩によりて降り、翌年二月四日斬にあふ。(二四六三—二五二五)

薄もみぢ赤き心をとはれては散らでなか〳〵恥かしき哉
片敷きていぬる鎧のそでの上におもひぞつもる越の白雪

刑に遭ふ時

世の爲とおもひこし路の眞心は氣比のみ神やしろしめすらむ
討つもはた討たるゝもはた哀れなり日本心の亂れそめしを
世の塵を窓の嵐に拂はせて霞と共に消ゆる魂かな

藤田小四郎

贈從四位 合祀 明治二四・一二 明治二二・五

名は信。字は子立。東湖の第四子なり。各藩の志士と謀り、攘夷の朝旨貫徹に力む。元治元年田丸直

允の衆望あるをあげて首領と爲し、義兵を大平・筑波の間に起し進んで攘夷の先鋒たらん事を期し、檄を四方に傳へ、兵士金穀を募り幕兵と各所に戰ふ。尋いで武田・山國の率ゐる諸兵を合せ西上して情を闕下に訴へ、擧兵の目的を達せんと路を伸仙道に取り、十二月十一日越前新保驛に達するや積雪饑寒交至大に窘む。乃ち加州國老永原甚七郎に狀を訴ふ。幕府命を傳へて直ちに之を拘し敦賀藩に囚せしむ。慶應元年斬せらる。(二五〇二—二五二五)

上書を渡し奉りてよめる

かねてより思ひそめにしまごゝろをけふ　大君につげてうれしき
さく梅の匂ひはかなく散りぬとも香は　九重のを簾にとゞめむ

無題　二首

鐵衣鞍馬出鄉關。霞水筑峰幾往還。一事不成秋既老。凄然垂淚望家山。
慨時憂世眞無用。嘯月吟花却有情。營外今晨人若問。將軍醉臥未全醒。

譯讀　鐵衣鞍馬鄉關を出づ。霞水筑峰幾たびか往還す。一事も成らず秋既に老ゆ。凄然涙を垂れて家山を望む。時を慨き世を憂ふるは眞に用無し。月に嘯き花に吟ずるは却て情有り。營外今晨人若し問はゞ、將軍醉臥して未だ全く醒めずと。

述懷

從來世事去悠悠。空使英豪齊素謀。紅艶辭枝風裏散。翠烟繞樹雨餘浮。忽醒京洛三春夢。更添爐邊萬里愁。今日何人護天子。攘夷鳳詔涙難收。

譯讀 「述懷」。從來世事去つて悠悠。空しく英豪をして素謀を齊しくせしむ。紅顏枝を辭して風裏に散じ。翠烟樹を繞りて雨餘に浮ぶ。忽ち醒む京洛三春の夢。更に添ふ蟻邊萬里の愁。今日何人か　天子を護らん。捩夷の　鳳詔淚收めがたし。

國分新太郎

贈正五位 明治四〇、五
合祀 明治二二、四

名は信義。水戸藩士强介の長子なり。元治元年秋。適々藩内騷亂。松平頼徳鎭撫の命をうけ、水戸に赴くに從ひ、幕軍及市川黨と那珂湊・平磯に力戰して勇名あり。後武田伊賀守等と西上を俱にし、翌年二月四日敦賀に斬らる。(二五〇五—二五二五)

題しらず

しひて吹く嵐の風にあふ花はいさぎよく散れいさぎよく散る
ものゝふのしぼりつめたる梓弓ひきも放たで絶えむものとは
禍神の太刀の刄風にちりぬるもこゝろざしこそ後に知るらめ

辭世

元期萬死復何悲。唯恨神兵未攘夷。魂魄不歸天與地。七生此世護　皇基。

譯讀 「辭世」。元より萬死を期す復何ぞ悲まん。唯恨む神兵の未だ夷を攘はざることを。魂魄天と地とに歸せず。七たび此の世に生れて　皇基を護らむ。

岸信藏

水戸正義派の黨與。慶應元年二月四日越前にて武田耕雲齋と共に斬なる。(—二五二五)

題しらず

たとへ身は敦賀の里ににさらすともなどたゆむべきものゝふの道

伊藤健藏

水戸正義派の黨與。慶應元年二月四日越前にて斬に處せらる。(—二五二五)

題しらず

たまちはふ神の御國の道すぐにまもる人こそまことなりけれ

伊藤榮太郎

名は重房。水戸正義派の黨。耕雲齋に從ひ、越前に入りて捕へられ慶應元年二月七日死に處せらる。(—二五二五)

陣中日記の奥に書つけたりし歌

思ひかね入にし山をたち出でゝ迷ふうき世も　大君のため

中村太郎

名は一智。疎狂と號す。駿河國田中藩の代官一禮の子。元治元年藤田小四郎の擧に投じ、那珂港に轉戰し敗れて斬らる。(二五〇五—二五二五)

題髑髏圖

月冷髑髏白如霜。人間得失夢一場。微軀早晩殉家國。留取丹心護　君王。

譯讀 「獨護の圖に題す」。月冷にして獨護白きこと霜の如し。人間の得失夢一場。微驅早晩家國に殉じ、丹心を留取して　君王を護らん。

愁來無酒欲眠難。起出書堂星象殘。猶有練兵濤海客。滿城明月角聲寒。

譯讀 愁來酒無く眠らんと欲するも難し。起て書堂を出づれば星象殘す。猶ほ練兵濤海の客有り。滿場の明月角聲寒し。

床井莊藏

元治元年九月常州中川港の軍やぶれし時縛につき、慶應元年五月刑死。（　　—二五二五）

辭世

玉の緒のたゆともいかで忘るべき世々にあまりし　君がなさけを

釋赤城

一に石城ともかく。上野國廬尾山大岩寺の住職。別に量海又は道海と號す。下總平井村の人かり。筑波山事件に黨し、事敗れて京都に上る途次彦根勢と力戰死して死す。（　　—二五二四）

題しらず

かりの世にすみの衣は着つれども心はあかき大和魂

第十二、池田屋事件　（元治元年六月五日）

元治元年四月に至り　朝廷にては、長藩の處分を幕府に委託せらる。昨秋以來防長の野に潛める志士等之をきゝ大に憤慨し、相ついで上京せるを以て、京阪における尊攘黨は再び振ふに至れり。京都四條の賈人桝屋嘉右衞門はもと毘沙門堂家の家臣なりしが、同業者古高又次郎等と志を同じくし、帥宮（有栖川宮熾仁親王）を奉じ、文久三年八月十八日政變の巨魁と目せらるゝ尹宮尊融親王の第を燒き、その虛に乘じて君側の姦を掃ひ、同時に會津藩の黑谷の陣營を砲擊し、一死以て相戰はゞ假令事をなし得ずとも、自ら言路開けん。かゝらば三條公以下の士の意も貫徹せんと、事を企てしを、有志の面々禍の及ばんことをおそれ、速かに遁走して再擧を圖らんとするものありしも、宮部・松田等之を遮ぎり留め三々五々三條小橋なる池田屋に會したるを知り、新選組七八十人亂入して大に志士を斬る。志士等殊死して戰ひしも、衆寡敵せず、或は鬪死し或は自刄す。かくして尊攘派の志士は僧侶に至るまで皆獄につながるゝに至る。

宮部鼎藏

勝正四位　明治二四、四
合祀　明治二四、九

名は增實。田城と號す。家世々醫業を營む。文久二年京都に出て諸藩勤王の士と交る。七卿西下するや俱に護して三田尻に赴く。元治元年密に上京し、朝廷に哀訴せんとす。六月五日同志の士と池田

屋に會す。遽に襲はれ衆寡敵せず自ら割腹して死す。（二四八〇―二五二四）

賀茂行幸を拜し奉りて

おほけなき今日の　御幸は千早ぶる神のむかしにかへる始めぞ

題　しらず

いざ子とも馬に鞍おけ　九重のみはしのさくら散らぬそのまに

嘉永壬子、遊佐渡奉拜　順德天皇山陵、題扉詩

陪臣執命奈無差。天日喪光沈北陬。遺恨千年又何極。一刀不斷賊人頭。

譯讀　「嘉永壬子、佐渡に遊び　順德天皇の山陵を奉拜し、扉に題する詩」。陪臣命を執りて差なきをいかんせん。天日光を喪うて北陬に沈む。遺恨す千年又何ぞ極まらん。一刀賊人の頭を斷たざることを。

松田重助（贈從四位　明治二四、一二　合祀　明治二四、九）

名は範義。熊本藩士。曾て宮部鼎藏に親炙して兵法を研究す。中山忠光の義舉に際し弟山田信道と密に其謀議に與る。尋いて七卿に隨つて三田尻に奔る。後三條池田屋に宿し密議中新撰組の徒に襲はれ抗爭して鬪死す。（二四九〇―二五二四）

題　しらず

ひとすぢに思ひこめてし眞心は神もたのまず人もたのまず

實弟山田十郎國許にて刑死の由をきゝて

とても死ぬる汝が命は惜しまねどかくてはなげく國の行末

吉田稔麿（贈從四位　明治二四、一二　合祀　明治二一、四）

山口藩士、名は秀實。字は無逸、大治郎と稱す。變名を松里勇、或は松村小介といふ。吉田松陰の甥なり。宮部鼎藏等と三條池田屋に密談中新撰組の爲に襲はれ、非命に仆る。（二五〇一―二五二四）

題　しらず

よろづ代も流つきせぬ五十鈴川きよけき水を汲みてとらまし

池田屋に赴く時髪結とてよめる

結びてもまたむすびても黑髪のみだれそめにし世をいかにせむ

佐伯稜威雄（贈從五位　大正四、一一　合祀　明治二一、五）

名は鞆彦。周防鈴屋村八幡宮の祠官。又宮藤主水と稱す。池田屋にて捕へられ六角の獄に投ぜられ慶應元年六月殺さる。（二四八四―二五二五）

題　しらず

身をば粉になすともいかでくづすべきかねてかためし大和魂

辭世

厭はじな太刀のはがねにかゝるとも心ひとつはなに撓むべき

第十三、禁門の戰（元治元年七月十九日）

長州藩にては京都を逐はれたる後、數〻使を遣はして罪を謝せり。されど、朝廷の顧みる所とならず。會〻池田屋事件ありて、上國の形勢日に非なるを見たる長州藩にては、憤激殆ど絶頂に達し、「藩の君臣擧りて上京し、歎訴して聽かれずんば、兵火に訴へて公武合體黨を一掃し、以て　宸襟を安んじ奉るべし」と。かくして眞木和泉等は山崎に着し、二十七日京都に潜伏せる志士は伏見の長州藩邸に間行し部署を整へ、來りて天龍寺に營し、廿九日國司信濃山崎に來り、七月十四日益田右衞門兵六百を率ゐて男山に屯し、山崎嵯峨と鼎立して京師を壓迫せり。十九日進軍の部署を定め三道より京都に向ふ。かくして蛤御門・堺御町門等に迫りて薩・會・桑各藩の兵と戰ひ共に利あらず。之を禁門の戰といふ。

益田右衞門

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二一、四

名は親施、一に彈正と通稱す。文久三年七卿を擁して三田尻に還る。翌年六月藩兵大擧京に迫る時主命を以て鎭撫に斡旋せしも衆服せず。次て七月十九日、狀を闕下に奏し併せて松平容保を除かんとし堺町御門に進み各藩の兵と戰ひ敗衂して山崎に退き、兵を收めて國にかへり、罪を負うて屛居す。長防征討軍廣島に入るに當り一藩の罪を負ひ自刄を命ぜらる。（二四九三―二五二四）

辭世

しらま弓ひきなかへしそ　大君のへにこそ死なめ大丈夫のみち

福原越後

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二一、四

名は元侗、翠崖と號す。實は德山藩主、毛利廣鎭の六男なり。文久三年の變あり、翌年大擧京に迫るや主命をうけて百方鎭撫に勢して事諧はず。遂に干戈の間面に傷をうけ、佐久間佐兵衞をして代り指揮にあたらしめて歸國し、十一月十二日、益田・國司の二老臣と謝罪の爲自刄す。（二四七五―二五二四）

本山のあたりに警固承はりし折
守る人のやどりかりやのうら浪によらば碎かんえみしらが船

幽囚中の述懷

おしなべて曇りはてたる世の中に月影のみぞさやけかりける

辭世

苦しさは絶ゆる我が身の夕けぶり空に立つ名はすてかてにして

國司信濃

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二一、四

名は親相。文久二年外冠掃攘の　勅を奉じ馬關に米艦を砲擊して功あり。三年藩兵闕下に迫り戰亂を釀すに至り益田・福原の二國老と共にその采邑に退きて罪をまつ。已にして幕軍四境に迫るに及び

國難に代りて罪を受け自盡を命ぜらる。（二五〇一―二五二四）

辭　　世

飛鳥川きのふにかはる世の中のうきせに立つは我身なりけり
よしやよし世を去るとても我心　皇國の爲に猶盡さばや

臨　沒　作

多年心志遂難酬。愆爲下部被羈囚。爲　君臨死無遺恨。黃泉長與楠公遊。

譯讀　「歿するに臨んで作る」。多年の心志遂に酬ひ難し。愆りて下部の爲に羈囚せらる。君の爲に死に臨んで遺恨なし。黃泉に長く楠公と遊ばん。

來　島　又　兵　衞　贈正四位 明治二四、四　合祀 明治二二、四

名は政久。森鬼太郎と變名して京阪にあり、形勢を視察す。元治元年七月蛤御門に戰ひ丸に中つて斃る。（二四七六―二五二四）

蛤門の戰の時

議論より實を行へなまけ武士國の大事をよそに見る馬鹿

久　坂　義　助　贈正四位 明治二四、四　合祀 明治二一、四

名は通武、字は實甫、玄瑞と稱す。江月齋・秋湖の號あり。松野三平と變名す。元治元年大に諸同志を募り脱藩し、往いて天王山に屯し、石清水に祈る。遂に七月十八日會・桑二藩の兵と戰ひて膝に傷

を負ひ、鷹司邸に居腹す。（二四九九―二五二四）

感　　慨

秋ふかみ牡鹿の角のつかの間も千々にくだくる我かおもひかな

ことに觸れてよめる

斯くまでに靑人草を　すべらぎのおぼす御心かしこきろかも
いくたびも繰り返しつゝわが　君の　みことしよめば涙こぼるゝ
天地もともに久しく言ひつがむあやにかしこき　君が　みことを
ものゝふの臣の男はかゝる世になに床のへに老いはてぬべき

思ふことありて

いざや子ら劍とぎはけ梓弓靫とり負ひてみやこに行かむ

題　し　ら　す

賤たまき數ならぬ身も　大君の　御幸し聞かは道はらひせむ
東に居る友におくる
いざや兒ら後れなとりそ芦が散る難波の浦に浪さわぐ日は

富海より故郷へ

眞木の立つ荒山中のやまかつも利鎌たにぎりえみしきためな

逸　題

皇國威名海外鳴。誰甘烏帽犬羊盟。　廟堂願賜尙方劍。直斬將軍答　聖明。

譯讀　皇國の威名海外に鳴る。誰か甘ぜん烏帽犬羊の盟を。　廟堂願はくは尙方の劍を賜へ、直に將軍を斬つて　聖明に答へん。

又

胡雲漠漠晝冥濛。天下無人護　聖躬。九闕他年遭吉夢。金剛山在野山中。

譯讀　胡雲漠漠晝冥濛。天下人の　聖躬を護る無し。九闕他年吉夢に遭ふ。金剛山は野山の中に在り。

寺島忠三郎　贈正四位　合祀　明治二四、四　明治二一、四

名は昌昭、字は子大、刀山又は鷺不休齋と號す。牛敷春三郎・中島三郎・兒島百之助等と假稱す。文久三年二月久坂・轟と連署して、將軍家茂の上洛に先ち、攘夷の期を定めんことを闕下に迫る。朝議一變、長藩堺町御門の禁衛を解かれ、甲子の變起るや玄瑞と共に鷹司邸に屠腹して死す。（二五〇三―二五二四）

題しらず

知らぬ火のつくしてだにも禍つ神誠を分かぬ世こそうれたき

ものゝふの道こそ多き世の中にたゝ一すぢのやまとだましひ

登笠置山

山骨如枯老樹重。傳聞　鸞路駐　蹕地。野禽鳴絶夕陽空。不耐抱懷多感涙。

譯讀　「笠置山に登る」。山骨枯るゝが如く老樹重る。傳へ聞く　鸞路　蹕を駐むる地と。野禽鳴き絶えて夕陽空し。耐へず抱懷感涙の多きに。

入江九一　贈正四位　合祀　明治二四、四　明治二一、四

名は弘毅、字は子遠、後姓名を變じて河島小太郎といふ。元治元年七月、藩主の寃を訴ふる爲、久坂義助と衆を督し山崎天王山に屯し、之が參謀たり。十九日闕にせまる時、鷹司邸に在り、久坂に後事を囑せられ圍を衝いて出でんとして飛丸に中り遂に屠腹す。（二四九八―二五二四）

松陰先師の墓下に梅花を挿むとて

年を經てかはらぬ梅のはなの香をたむくるさへも心はづかし

辭　世

後の世も今もむかしを照らすらむ物おもふ身は月ぞまばゆき

佐久間佐兵衛　贈正四位　合祀　明治二四、一二　明治二一、四

名は義濟、龍圓、又思齋と號す。赤川淡水・細村左門の變名あり。藩主父子の旨をうけて屢上京し、有志公卿の間に周旋し、尊攘の議に與る。元治元年越後に代り衆を率ゐて禁門にせまり。敗衂して歸國し十一月十二日刑に就く。（二四九三―二五二四）

辭　世

心あらば梢の紅葉しばしまちてあはれわが身と共に散らなむ

いまはゝや言の葉草も夜の雪と消えゆく身にはなりにける哉

眞木和泉守

贈正四位 明治二四、四
合祀 明治二一、一一

名は保臣、榮灘と號す。世々久留米水天宮の祠官なり。元治元年五月自ら一隊を率ゐ忠勇隊と稱し天王山に屯し、七卿復官長侯解寃の陳情書を呈し、闕に迫る。疵を負うて天王山に退き從容刄に伏して死す。（二四七四―二五二四）

有感

暗き夜によし迷ふとも行きなれし道はかへじと思ふなりけり

折にふれて

風はらふ軒端の蛛のいとすぢにすがれる露ぞ身のたぐひなる
一たびは玉とも見えて吹く風にくだくる露ぞ身のたくひなる

題しらす

百敷の軒の忍ぶにすがりても露の心を　君に見せばや

妻に送る

かたちこそ手弱女ならめますらをにかはりて　國のこと思はなむ

島津三郎へ遣しける

名にしおはゞ櫻島根の春の風はや九重の花さそはなむ

後れなば色も櫻に劣りなむ急くぞ梅のにほひなりける

同じ折に

わたつみの神も守らせ　大君のみ爲と急ぐ我身ならすや

題しらす

天つ風吹けよ　錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞ思ふ

天王山にて月夜によめる

王山のみねの岩根にうづみけりわがとし月の大和魂
碎けても玉と散る身はいさぎよし瓦と共に世にあらんより

示同盟諸子

洋夷猖獗自午年。上國煽來羶穢煙。　九重布命誰先應。我廿餘人起着鞭。

譯讀　「同盟の諸子に示す」。洋夷の猖獗午年より。上國煽し來る羶穢（せんあい）の煙。　九重命を布きて誰か先づ應ぜる。我が廿余人起つて鞭を着く。

題阿久根驛壁

地沿南溟山嶽崇。人望忠義貴英雄。誰知一百二城裏。認得　神孫創業風。

譯讀　「阿久根驛の壁に題す」。地は南溟に沿うて山嶽崇（たか）し。人は忠義を望んで英雄を貴ぶ。誰か知らん一百二城の裏。認得す　神孫創業の風。

五月二十五日、楠公戰死の日なれば、祭文なども書きて
奉りつるが、から歌もかくなん

嗚呼赫赫公威烈。當日事情何可說。大德雖吾不敢望。閤門死義踐其轍。

譯讀　嗚呼、赫赫たり公の威烈。當日の事情何ぞ說くべけんや。大德は吾敢て望まずと雖も。閤門義に死して其轍を踐まん。

贈某某

忠誠元不恥蒼旻。同志宛然是一身。先者雖僵後者在。豈教彼道我無人。

譯讀　「某某に贈る」。忠誠元と蒼旻に恥ぢず。同志宛然是れ一身。先者僵ると雖も後者あり。豈に彼をして我に人無しと道はしめんや。

廣田精一　贈從四位　合祀　明治二四、一二　明治二一、一一

名は執中、東海と號す。長藩訴寃の天龍寺屯集に加はり、進んで鷹司邸前に戰ひ、眞木保臣等と山崎天王山に退きともに自刄す。（二四九七—二五二四）

述懷

武夫のかゞみともせよ山ざくら惜しまれて散る花の心を

題しらず

色香をも惜しまで花のちればこそ大和心と人やいふらむ

根岸氏へ

世のさまを引きかへさむと梓弓はりし心の何たゆむべき

謝人問疾

迂濶寒儒恥素餐。喪元在壑未曾諼。雖然病骨瘦如腊。腔子能藏日本魂。

譯讀　「人の疾を問はれしに謝す」。迂濶の寒儒素餐を恥づ。元を喪ひ壑に在るも未だ曾て諼れず。然く病骨瘦せて腊の如しと雖も、腔子能く藏す日本魂を。

偶成

智士傍觀愚者譁。野論朝議亂如麻。開門拜賊知何事。將相無心死國家。

譯讀　「偶成」。智士は傍觀し愚者は譁し。野論朝議亂れて麻の如し。門を開いて賊を拜す知んぬ何事ぞ。將相國家に死する心無し。

又

學而時習素求仁。更讀孫吳眼入神。攘夷策就無由獻。滿朝盡是太平人。

譯讀　學んで時に習ふ素より仁を求む。更に孫吳を讀みて眼、神に入る。攘夷の策就りて獻するに由なし。滿朝盡く是れ太平の人。

伊藤甲之助　贈正五位　合祀　明治三一、七　同治一六、五

名は和義。高知藩士。慷慨節義を尙ぶ。倉て武市瑞山の同盟者たり。元治元年六月長藩士に加はり堺町御門に戰ひ夷川に負傷し敵圍中に割腹す。（二五〇五—二五二四）

着用の陣羽織の裏に

君がため塵とかばねをさらすとも名はよろづ代の後もくちせじ

國を立ち出づる時

おのが身にあらんかぎりの力もて　君のみぐみにこたへまつらん

思ふことありて

大君の　御詔のまゝになり行かむ世をこそ祈れ八百萬の神

陳懷

南山萬里投時艱。寸骨不期生死間。故國迢迢二親在。晨昏懷起涕潸潸。

譯讀　「懷を陳ぶ」。南山萬里時艱に投ず。寸骨期せず生死の間。故國迢迢二親在り。晨昏懷ひ起して涕潸々たり。

陳志

立志艱間是丈夫。何將變故惜身軀。浮沈成敗尋常事。至竟心腸赤似朱。

譯讀　「志を陳ぶ」。立志艱間是れ丈夫。何ぞ變故を將つて身軀を惜まんや。浮沈成敗は尋常の事。至竟心腸赤くして朱に似たり。

高木元右衞門　贈正五位　合祀　明治三五、一一　明治二四、九

名は直久。肥後國菊池郡の人。其祖先世々菊池氏に隸し忠臣の後裔たるに感激し慨然尊王報國の念を發す。元治元年福原越後に屬し、下立賣御門の戰に進んで唐門に突入し、神嘉殿前に松平容保を狙ひ、遂に斃死す。（二四九三―二五二四）

題しらず

かばねをば都の苔にうづみおきてわが大君のまもりとはせむ

小橋友之輔　贈正五位　合祀　大正四、一一　明治二四、二一

名は以義。元治元年七月禁門の戰に加はり戰死す。（二五〇二―二五二四）

國のため盡しつくしゝ眞心は百世の後もくちせざらまし

松浦八郎　贈正五位　合祀　明治三五、一一　明治二一、一一

名は寛敏。久留米藩内八女郡の鄕士なり。川島順三郎と變名す。甲子の擧に眞木保臣の忠勇隊に屬し七月二十一日天王山にて自刄す。（二四九六―二五二四）

天王山屠腹のとき

王山にすつる命はをしまねどおもひ殘すは皇國のこと

西島龜太郎　贈正五位　合祀　明治三五、一一　明治二四、九

熊本藩士。名は賴秋。文久三年親兵に選ばれ京師に在り。たまゝ宮部と郡山に抵り遊說中、長軍京に敗れ天王山に據ると聞き、急遽歸京し遂に眞木等と共に天王山にて自刄す。（二四九三―二五二四）

かゝる時なにか命の惜しからむ　君かみ楯となれるこの身は

福谷好長

德山藩の志士。名は好長。元治の擧に加はり京都堺町御門内に戰死す。（　　—二五二四）

辭世

國のためいはほも碎く心もてあとへはひかぬ大和魂

安藤誠之介

名は貞啓。作州津山在の處士。元治元年七月堺町御門内に戰死す。（　　—二五二四）

わが太刀の折れんかぎりを命にてなぎはてましを醜のしこ草

那須俊平

名は重任。土州藩士にして元治禁門の戰に鷹司邸に居腹す。（　　—二五二四）

辭世

たましひはこの　大宮所さらずして　すべらの楯にならんとぞ思ふ

僧玄堂

元長藩の人。普化僧となりて京都大佛妙圓寺に住す。甲子の變に獄に下され出牢して慶應三年浪華に歿す。（　　—二五二七）

あづさ弓今はとる身にあらねどもなど劣るべきものゝふのみち

第十四、遭難横死

等しくこれ勤　皇殉國の大精神を懷き、其の身を忘れて東奔西走しつぶさに艱苦を嘗め、　君國の爲に死力を盡せしもの、不幸にして刺客の手にかゝり非業の死を遂げしもの少からず。こゝにその主なる先正五名の遺詠を收む。

姉小路公知

贈正二位　明治三九、九

幼名靖麿。左少將公前の長子。容止端嚴にして勇敢決斷に富む。文久二年、皇威回復に及び諸藩の志士來りて意見を求むる多し。三年將軍朝覲、　天皇男山の　行幸の儀をあぐるに至りし如き皆公知の力なり。其他凝華堂を設けて文武を講じ、學習院を剏むる等皆その奏議による。三年五月二十日禁中重要の評議に列し、夜退出の折刺客三人に傷けられ、擁せられて邸内に入り無念の一聲をのこして絕えぬ。（二四九八—二五二三）

題しらず

いにしへに吹きかへすべき神風を知らでひる子等なに騷ぐらむ

送別

ふる里にかへる錦の袖の上につゝめや　君がふかき恵を

佐久間象山　贈正四位

名は啓。字は子明。修理と稱す。信州松代藩士。元治元年京都木屋町にて遭難す。（二四七一―二五二四）

漫述

謗者任汝謗。嗤者任汝嗤。天公本知我。不覓他人知。

譯讀　「漫述」。謗る者は汝の謗るに任す。嗤ふ者は汝の嗤ふに任す。天公本と我を知る。他人の知るを覓めず。

有感

慨然發憤冒艱險。擬爲皇州紓大患。豈料數奇不酬志。九年寂寞臥家山。

譯讀　「感有り」。慨然發憤して艱難を冒し。皇州の爲に大患を紓かん擬す。豈に料らんや數奇志に酬いず。九年寂寞家山に臥す。

清川八郎　贈正四位　合祀　明治四一、九　明治二四、九

名は正明、斃蕘と稱す。羽前東田川郡清川村の人。文久の初尊攘の說を唱へ遊說して同志を募る。會ミ寺田屋の變に危く免れ。ついで朝旨をうけて江戸に下り奔走中刺客の爲に刺さる。（二四九一―二五二四）

題しらす

吹きおろせ富士の高根の大御風よもの海路の塵をはらはむ

大君のみこゝろ知らば賤か身の何をいとうてつくさざらめや
御國まもる劍はく身のいかなればえみしに屈む腰やあるべき
櫻花たとひ散るともますらをの袖にゝほひを留めざらめや
魁けてまた魁けん死出の山迷ひはせじな　皇の道

中岡慎太郎　贈正四位　合祀　明治二四、四　明治一六、五

名は道正、迂山又遠山と號し。石川誠之助・大山彥太郎・横山勘藏等と變名せり。同志の糾合を圖り坂本龍馬の海援隊と呼應して陸援隊を編成し共に天下の志士を一團と爲し、將に幕政を斥け外夷を掃攘し　皇權を伸張せんと經營し、殆ど寧日無し。慶應三年十二月十五日龍馬と議する事あり、密に先斗町の旅寓に會す。偶々幕府見廻組の探知する所となり、不意に襲はれて負傷。十七日正午精神常の如くして歿す。（二四九八―二五二七）

古里へ送る狀中に

大君の　おほみ心をやすめんとおもふ心は神ぞ知るらむ
大君のへにこそ死なめますらをの都はなれていつかかへらむ

阪本龍馬　贈正四位　合祀　明治二四、四　明治一六、五

名は眞柔。高知藩の世臣なり。才谷梅太郎と變名し各所に遊說す。後海援隊を組織して隊長となる。慶應の初京にのぼり志士と交り高杉・西鄕等と相約し、三年政權を奉還の策をたて藩主の名をかりて

將軍に建言す。書を後藤象二郎に寄せ二條城に至り德川慶喜を勸說せしむ。この事早く幕臣の探知する所となり、十一月十五日同志と旅宿近江屋に會し、中岡愼太郎と密議中、幕府の士の爲に襲はれて死す。（二四七五—二五二七）

題しらず

世の中の人は何とも言はゞいへ我かなす事は我のみぞ知る

大政返上の議決したる時

心からのどけくもあるか野邊はなほ雪氣ながらの春風ぞ吹く

題しらず

文ひらくころもの袖はぬれにけり海より深き　君がみこゝろ

伊東甲子太郎

名は武明。志筑藩の人。誠齋と號す。新選隊士の爲に刺殺せらる。慶應三年十一月なり。（—二五二七）

長門の國櫻山はみな國の爲に討死せし人々の魂をまつれる處なれば

日の本のにほひも高きさくら山ぬるゝも嬉し花の下露

赤馬關にゆきてよめる

身をくだき心盡しも黑髮の亂れかゝれる世をいかにせむ

第十五、地方殉難

(1) 姫路

播州姫路藩主なる酒井家は、幕府譜代の諸侯たるを以て、德川氏と存亡をともにすべしとて、只幕府の命のまゝなる時に當り、河合一家の出づるありて、大に勤　皇を唱へしかば、爲に大に黨獄おこり禍にかゝるもの多し。

河合屏山

贈正四位　明治三六、一一

名は良翰、通稱鍵七、又小太郎といふ。學識材幹あり。一藩士氣の振起に努め尊　皇卑覇の說を唱ふ。遂に嫌疑により幽閉せらる。（二四五三—二五三六）

述懷

世の中を思ふねざめの枕にはいくたび捨てし我が身なるらむ

河合總兵衞

贈從四位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は宗元。姫路藩の世臣。資性剛毅博識兼て武藝に達す。平素　皇室の式微を歎じ大義を唱道し少壯を鼓舞せしより一藩勤　皇派の首領と稱せらる。偶々養嗣傳十郎脫藩の事あり罪を蒙り禁錮にあふ。元治元年十二月二十六日自刄を命ぜらる。（二四七六—二五二四）

獄に下る時

しひて吹く嵐のさそふ紅葉にもなほくれなゐの色はかはらじ

幽囚中によめる

いとゝしく物おもふ秋のいやましに月だにはれぬこの頃の空

辭　世

ひを蟲の身をいかでかは惜しむべき唯をしまるゝ　御代の行末

いたづらに死ぬるものとや人は見む　皇國の爲に盡す我が身を

河合傳十郎

贈正五位　明治三一、七
合祀　明治二四、九

名は宗貞。河合宗元の養子。實は同藩老臣境野求馬の二男なり。元治元年春脱藩して長州に走く。求馬、國論の振はざるを憤慨し書を宗貞に遺り、勵すに國事盡力の事を以てして自殺す。宗貞遂に藩吏に欺かれて姫路に檻送遂に斬せらる。（二五〇一―二五二四）

辭　世

このまゝに身は捨つるとも生きかはり屠り殺さむ醜のやつばら

萩原虎六

贈正五位　明治三一、七

姫路藩士。名は政興。元治元年自刄を命ぜらる。（二五〇三―二五二四）

述懷

君がため世の爲よしや消ゆるとも何かいとはむ露の玉の緒

(2) 加州藩

元治元年七月十九日禁門の變に際し。藩の世子前田慶寧病と稱して歸藩す。事、幕府の忌諱にふれ重臣松平大貳は切腹し、其他十數人斬・流の刑に處せらる。

大野木仲三郎

贈正五位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は克敏。金澤藩士。憂世の志深く衆に挺んで尊攘の大義を論じ一藩の士氣振作に力む。元治甲子の變に際し、世子歸國の事に坐して自刄を命ぜらる。（二五〇三―二五二四）

辭　世

身し死なば風となりてもわが　君の梅のよき香を四方に廣めん

色に出でゝ木の葉はちれど果つる身の赤き心はあらはれもせず

福岡總助

贈正五位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

金澤藩士、名は義比。初め菊太郎と稱せり。長藩、京に迫るに及び世子慶寧病に託し國に歸るに坐し罪を得、獄中腰斬の刑にあふ。（二四九一―二五二四）

獄中の作

やがて見よくもらぬ月は　こゝのへの都の空にすみわたるらん

辭　世

わがたまはやがて雲井にかけりつゝ　御階がもとにはせ參るべし

青木新三郎

贈正五位　合祀　明治二四、一二　明治二四、九

名は秀枝。加賀藩士。元治元年世子慶寧に隨ひ國に歸り罪を蒙り自刄を命ぜらる。（二四九三—二五二四）

辭　世

あさゆふに　君かみためと思ふよりほかに心はたもたざりしを
天かけり國かけりしてけふよりはえみしを攘ふ神とならなん

(3) 德山藩

長州藩の支封德山藩、また正奸の爭あり。元治元年七月京師の變あるや、藩論沸騰し勤　皇の志士奸黨の狙ふ所となり、濱崎の獄に繫かるゝもの本城素堂・河田月波・淺見烟溪・信田秋琴・井上雪崖・兒玉品山・江村風月等の七士に及ぶ。

河田佳藏

贈從四位　合祀　明治三一、七　明治二一、四

名は政佳。月波と號す。元治元年七月の京變より俗論派勢を逞うして藩政を專にす。政佳憤慨の餘權臣を除かんとして成らず僞に囚せられ、甲子十月二十四日濱崎の獄に斬らる。（二五〇二—二五二四）

八月九日書奉父兄手翰後

國家當此患難中。慷慨何知有我躬。恩澤多年無所報。一刀刺賊表微忠。

譯讀　「八月九日父兄に奉ずる手翰の後に書す」。國家この患難の中に當り、慷慨して何ぞ我躬あるを知らんや。恩澤多年報ずる所無し。一刀賊を刺して微忠を表せん。

獄中偶作

幽窓影冷日初傾。雁語砧聲相共淸。身在家鄉似千里。每思爺孃不堪情。

譯讀　「獄中の偶作」。幽窓影冷にして日初めて傾く。雁語砧聲相共に淸し。身は家鄉に在りて千里に似たり。爺孃を思ふ毎に情に堪へず。

淺見安之丞

贈從四位　合祀　明治三一、七　明治二一、四

名は正虔、字は伯恭、煙溪と號し周防德山の藩士。藩內俗論黨益勢を得るに及んで其忌む所となり、元治元年八月四に就さ、翌年正月十四日の夜獄吏の僞に慘殺さる。（二四九三—二五二五）

元旦

尊攘多年志未伸。區區又値故鄉春。天恩重矣衣冠賜。遙向東方拜紫宸。

譯讀 「元旦」、尊攘多年志未だ伸びず。區々又値ふ故郷の春。天恩は重し衣冠のたまもの、遙に東方に向つて　紫宸を拜す。

井上唯一

贈從四位　明治三一、七
合祀　明治二一、四

名は和暢、通稱彦太郎。德山藩士の一。文久二年主命を帶びて山口藩に赴き外艦砲擊に參加して功あり。元治の京變以來俗論派の僞に忌まれ十月十四日濱崎獄舍にて慘害せらる。(二五〇二—二五二四)

有感

執義廿三春。一身已忘存。誅奸事終蹶。未足報　君恩。

譯讀 「感有り」。義を執る廿三春。一身已に存するを忘る。誅奸の事終に蹶く。未だ　君恩を報ずるに足らず。

述懷

潛身報國洛城間。辛脫重圍歸故山。此日縱然逢斬戮。勤　王未變赤心殷。

譯讀 「述懷」、身を潛め國に報ず洛城の間。辛うじて重圍を脫して故山に歸る。此日縱然斬戮に逢ふも、勤　王未だ赤心の殷(たゞひ)なるを變ぜず。

信太作太夫

贈從四位　明治三一、七
合祀　明治二一、四

名は徽風、字は伯鑾、秋琴と號す。周防德山の藩士。元治甲子俗論黨の忌む所となり、罪を得て獄に下り、元治二年正月十四日獄内に慘害せらる。(二四八五—二五二五)

自述十首　錄一

洛陽送公駕。受命拜深恩。未復　聖朝古。皆知　王室尊。着冠從　鳳輦。執鉞護　宮門。天賜有榮耀。傳家遺子孫。

譯讀 「自ら述ぶ十首、一を錄す」。洛陽に公の駕を送り。命を受けて深恩を拜す。未だ　聖朝の尊きを知る。冠を着けて　鳳輦に隨ひ。鉞を執りて　宮門を護る。天賜榮耀あり、家に傳へて子孫に遺さん。

(4) 長州内訌と防戰

禁門の變ありてより、毛利家深く謹慎し、益田右衞門介以下三家老を自殺せしめ、以て其罪を謝したるも、幕府の怒り容易に解けず、此に於て藩内また俗論の起るありて、周布政之助・清水清太郎等事にあたれる要路のもの多く命を殞すに至る。然れども幕府の嫌疑猶解けず遂に封を削り藩主父子を幽せんとするに及び、高杉晉作等憤激に堪へず兵をあげて幕府に抗し、此に倒幕の端を開く。かくして幕軍長州にせまりしも振はず、かゝる間に將軍家茂大阪に薨じ、勝海舟・廣澤兵助・井上聞多と會し長州再征の師遂に解けぬ。

周布政之助

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治二一、四

名は兼翼、字は公輔、麻田と號す。山口藩八組士なり。元治甲子の秋、幕府防長征討の師を起し、四境に迫りて罪を問ふに當り、俗論黨、幕威を藉りて益々正義の士を譴責す。兼翼罪を一身に負ひ、國

雄に代らんとし、數日食を絶ち、一通の文を遺し、九月二十六日を以て自刄す。（二四八三―二五二四）

無題

成敗是常唯掃攘。亦憐志士死沙場。西陲方伯勤　王氣。仰待　天朝　詔一章。

譯讀　成敗は是れ常唯掃攘す。亦憐む志士の沙場に死するを。西陲の方伯勤　王の氣。仰いで待つ　天朝の　詔一章を。

壬戌三月十三夜、偶有此作。錄示兒金

一統　天孫六十州。鎭撫夷狄豈輸籌。時機不管回　皇運。吹起神風捲五洲。

譯讀　「壬戌の三月十三夜、偶此の作あり。錄して兒の金に示す」。一統の　天孫六十州。夷狄を鎭撫す豈に籌を輸せんや。時機管に　皇運を回すのみならず、　神風を吹き起して五洲を捲かん。

壬戌四月十日拂曉、過函關卽目、錄示雪水老兄

殘星烱烱襯長松。雪帶微紅不二峰。脚下諸山猶是夜。曉光早已到芙蓉。

譯讀　「壬戌四月十日の拂曉、函關を過ぐ、卽目。錄して雪水老兄に示す」。殘星烱烱として長松に襯す。雪は微紅を帶ぶ不二の峰。脚下の諸山は猶是れ夜なり。曉光早く已に芙蓉に到る。

前田孫右衞門　贈正四位　合祀　明治二四、四　明治二一、四

長藩の志士、名は利濟、字は致遠、陸山と號す。高杉晉作義兵を起すに際し同志六人と俱に反對派に陷られ野山獄に斬らる。（二四七八―二五二四）

辭世

一死如飴豈敢辭。居官半世値淸時。酬君心事何須辯。只有靑天白日知。

譯讀　「辭世」。一死飴の如く豈に敢へて辭せんや。官に居る半世淸時に値ふ。君に酬ゆるの心事何ぞ辯ずるを須ひん。只靑天白日の知る有り。

毛利登人　贈正四位　合祀　明治二四、一二　明治二一、四

名は武、通稱左門、有所と號す。世々山口藩の重臣。文久三年八月外艦砲擊に功あり翌元治元年十一月幕軍大擧四境に迫るに及び黨議の爲に罪に陷り十二月十九日野山の獄に斬らる。（二四八一―二五二四）

辭世

梓弓引きてかへさぬものゝふの正しき道に入るぞ嬉しき

すめらぎの道しるき代を願ふかなわが身は苔の下にふすとも

松島剛藏　贈正四位　合祀　明治二四、一二　明治二一、四

名は久誠、字は有文、韓峰と號す。文久三年命をうけて馬關に急行し外艦をうちて負傷す。元治元年七月禁門の變起り防長征討軍の四境にせまるにあたり野山の獄に斬らる。（二四八五―二五二四）

辭世

かねてより立てし心の撓むべきたとへこの身は朽ち果るとも

君がためつくす心のすぐなるはそらゆく神やひとり知るらむ

渡邊内藏太

贈正四位 明治二四、一二
合祀 明治二一、一四

名は暢、介亭と號す。萩の藩士。元治元年黨議盛に起りて獄に下され十二月十九日斬らる。（二四九六―二五二四）

人間行路盡風波。一死報君豈有佗。姦吏不知賈生志。流涕奈此國家何。

譯讀　人間の行路盡く風波。一死　君に報ず豈に佗あらんや。姦吏は知らず賈生の志。涕流す此の　國家を奈何せん。

大和國之助

贈正四位 明治二四、一二
合祀 明治二一、四

名は直利。山口藩八組士なり。元治元年七月禁門の變に因り、黨議の爲に幽囚せられ十二月十九日斬せらる。（二四九五―二五二四）

國のため世の爲何か惜しからん　君にさゝぐるやまとだましひ

高杉晋作

贈正四位 明治二四、四、八

山口藩の志士。名は春風、字は暢夫、東行と號す。吉田松蔭の門。文久三年六月奇兵隊を組織して、其の隊長となり、藩の俗論黨を一掃す、慶應三年陣中に歿す。（二四九九―二五二六）

白石資興尊攘の爲に忠死せし御魂を祭る

後れてもおくれてもまた君たちに誓ひしことをわれ忘れめや

所感

里人の知らぬもむべや谷間なるふかき淵瀬にひそむ心を

癸亥廿三日、送土藩有志士到京城

海内元來如弟兄。何論北約與南盟。列侯十八京城裏。誰爲　天王討賊兵。

譯讀　「亥癸の廿三日、土藩有志の士が京城に到るを送る」。海内元來弟兄の如し。何ぞ北約と南盟とを論せん。列侯十八京城の裏。誰か　天王の爲に賊兵を討たん。

四月二十八日

憂國傷時獨歎嗟。孤囚心緒亂如麻。吾如誤死暝暝裡。忠魂歸天護　國家。

譯讀　「四月廿八日」。國を憂へ時を傷みて獨り歎嗟す。孤囚の心緒亂れて麻の如し。吾もし誤りて暝暝の裡に死せば、忠魂天に歸りて　國家を護らん。

六月二日

滔滔走利好名時。捨祿抛官又有誰。不恨微軀死邦獄。報　君心膽上天知。

譯讀　「六月二日」。滔々利に走り名を好むの時。祿を捨て官を抛つ又誰か有る。恨みず微軀邦獄に死するも、君に報ずるの心膽は上天知る。

訪井上與四郎

俗士不知謫人志。紛紛頻唱太平尊。飄然對酌故郷酒。半日閑談亦　國恩。

譯讀　「井上與四郎を訪ふ」。俗士は知らず謫人の志を。紛々として頻に唱ふ太平の尊きことを。飄然として對酌す故郷の酒。半日の閑談も亦　國恩。

宮城彦輔

贈正五位　明治四四、六
合祀　明治二四、一一

名は御楯、長州藩の士。奇兵隊に屬し一部の領袖たり。元治元年六月廿一日馬關教法寺に於て屠腹す。（二四七五―二五二四）

兎に角に死におくれぬぞものゝふのまことをつくす道にぞありける

永井雅樂

毛利侯の臣。名は隆尙。文久三年自刄を命ぜらる。

辭世

君の爲すつる命は惜しからでたゞ思はるゝ　國のゆくすゑ

欲報二君恩一業不央。自差四十五年狂。卽今成佛非予意。願帥天魔補二國光一。

譯讀　「辭世」。君恩を報ぜんと欲す業未だ央ならず。自ら差づ四十五年の狂。卽今成佛するは予が意に非ず。願はくは天魔を帥ゐて　國光を補はん。

(5) 膳所藩

膳城烈士傳の緒言の一節に曰く「以上殉難諸人中聚散各其所を異にするものありといへども、要するに素皆同藩同志の士にして、而も同一の事に死するものなり、故に此に併記す」とあり。共に勤王論を主張して佐幕黨の爲に陷らるゝ所のものなり。

河瀬太宰

贈從四位　明治二四、一二
合祀　明治二四、九

名は定、字は靜甫、狂蕉と號す、膳所藩の老臣。列藩の有志上京する者多く來りて密議す。太宰夫妻力を戮せ家貲をあげて志士の保護に力む。慶應元年五月將軍家茂上洛の際、嫌疑を以て逮捕せられ京獄に在り、其間一年端然自若たり。翌年六月七日斬罪に處せらる。（二四七九―二五二六）

臨没作

吾今死二王國一。素志終不伸。已矣從容去。九泉多二故人一。

譯讀　「没に臨んで作る」。吾今國に死す。素志終に伸びず。已んぬるかな從容として去らん。九泉故人多し。

森喜右衛門

贈正五位 明治二四、一二
合祀 明治二四、九

名は祐信、字は子順、梅渓と號す。膳所藩士なり。慶應元年十月二十一日藩内佐幕派の爲に罪を構せられ死刑にあふ。（二四八九―二五二五）

失題

如今何必訴愁寃。正氣從來萃我門。縱令身爲醜夷滅。万古不滅日本魂。

譯讀　如今何ぞ必ずしも愁寃を訴へん。正氣從來我が門に萃る。縱令身は醜夷の爲に滅ぼさるゝも万古滅せず日本魂。

高橋雄太郎

贈正五位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

膳所藩の世臣。名は幸祐、椿里と號す。長州に頼りて尊攘の實効を奏せんと計畫中藩老上阪某の探知する所となり、慶應元年閏五月囚へられて獄に入り、一月廿一日同盟數人と死刑に處せらる。（二四九三―二五二五）

妻に贈る

機を斷ちやどりをかへて子の爲を忘らへなせそ憂きが中にも

獄舍にて

玉手箱あけては言はじわが心神こそ知れとうち任せつる

君を思ふまことの魂をいだかずばかゝる海には沈まざらまし

増田仁右衛門

贈正五位 明治三一、七
合祀 明治二四、九

名は正房、膳所藩士なり。頼三樹に從學し英材の稱あり。慶應元年五月將軍征長の爲、膳所に館するの風説に接し、正房等密に之を謀ると誣ひられて獄に繫がれ、十月二十一日同志數人と共に斬に處せらる。（二五〇〇―二五二五）

辭世

いへばうし言はねば猶もますおもひ心ひとつのやる方ぞなき

君かため盡せしかひも難波潟よきもあしきもかはる世のなか

述懷

ものゝふの大和こゝろのたゆまずばなど無かるべき神の御惠

絶筆　二首

二十六年夢一場。舍生報國丈夫腸。縱然身滅原頭露。魂魄長陪　君父傍。

譯讀　「絶筆二首」。二十六年夢一場。生を舍て、國に報ゆ丈夫の腸。縱然身は原頭の露と滅するも。魂魄長へに　君父の傍に陪せん。

男兒自分義兼忠。報國丹心豈惜躬。遺念難消唯一事。從今膝下奉歡空。

譯讀　男兒自ら義と忠とを分とす。報國の丹心豈に躬を惜まんや。遺念消し難きは唯一事。今より膝下歡を奉することを空しきを。

贈妹

一死報君忠義肝。唯哀父母切悲嘆。幽魂頼汝聊堪慰。膝下朝暮敬奉歡。

譯讀 「妹に贈る」。一死 君に報ず忠義の肝。唯哀む父母悲嘆の切なるを。幽魂汝に頼りて聊慰むるに堪へたり。膝下朝暮敬んで歡を奉ぜよ。

深栖俊助 贈正五位 合祀 明治三一、七 明治二四、九

名は當道、初め幾太郎と稱す、膳所藩士なり。竊に長州の有志と奉公を期す。已にして佐幕派の爲に陷られ慶應元年十月二十一日死に處せらる。（一五〇一—二五二五）

絶筆 三首錄一

多年空過素餐身。一死如歸報國辰。但恨吾家終絶記。自今誰掃祖墳塵。

譯讀 「絶筆三首一を錄す」。多年空しく過ぐ素餐の身。一死歸するが如し國に報ずるの辰。但恨む吾家終に記を絶つことを。自今誰か祖墳の塵を拂はん。

渡邊宗助 贈正五位 合祀 明治三一、七 明治二四、九

名は緝、膳所藩醫玄助の子。文久の初京師に出でゝ諸藩の志士と交り尊攘論を主張し、三年將軍上洛に際し藩老に誣ひられ、慶應元年十月二十一日斬せらる。（二四九七—二五二五）

述懷

えみし舟はらうて 御國安かれといのる我か身を神は罪せじ

絶筆

元期一死報君恩。志操從今鬪衆論。不管微軀連刑戮。豈汚天禀大和魂。

譯讀 「絶筆」。元期す一死 君恩に報ぜんことを。志操今より衆論を鬪はす。管せず微軀刑戮に連るも、豈天禀の大和魂を汚さんや。

保田信六郎 贈正五位 合祀 明治二四、一二 明治二四、九

名は正經、字は信解。膳所藩の世臣。文久の初より同志を糾合し、尊攘の志を達せんとし罪に陷れられ慶應元年十月自刄を命ぜらる。（二四九八—二五二五）

數ならぬ賤か玉の緒絶ゆるとも絶えぬは 君かなさけなりけり

澤島信三郎 贈正五位 合祀 明治二四、一二 明治二四、九

名は正噲。膳所藩の世臣なり。文久元年脫して長州に赴き尊攘の徒と共に奉公を誓ふ。元治元年冬幕軍大擧長州に迫りし時、之と戰ひ、後豊前に入り小倉を侵略して軍勞多し。慶應二年七月二日山口淨泉寺の營中に病殁す。（二四九八—二五二六）

國を脫する時父に遺す

はくゝみし子をも今日しは 國のため死せし者ぞと思ひたまへや

よしあしは人の思ひに任せつゝ　御國の仇に死する大丈夫

(6) 土州藩

武市半平太

贈正四位　明治二四、四
合祀　明治一六、五

土州長岡郡の人。幼名鹿衛、通稱小楯、號を吹山・瑞山・茗渓といふ。藩主を助けて畫策につとめしが。適々大和の事あり佐幕派の爲に遂に獄に下され、慶應元年閏五月十一日誣ひて自刄を命ぜらる。（二四八九—二五二五）

元治元年元日に

とし月は改まれども世の中はあらたまらぬぞかなしかりける

島本審次郎より「忌はしき獄屋の軒のひまよりも月はまことを照らしこそゆけ」の歌を示されたる時

人の目に見えぬ心のますかゞみ清き光は神ぞ知るらむ

題しらず

神ならで誰かは知らむ目に見えぬ心の底の清き光を

偶成

三十七年幽夢中。摧身竭力一無功。平生所育爲何事。空落孤囚就不忠。

譯讀　「偶成」。三十七年幽夢の中。身を摧き力を竭して一も功無し。平生育する所何事をか爲す。空しく孤囚に落ちて不忠と就る。

失題

細雨濛濛尚未休、囚中寂寞滴聲幽。悲然亦憶攘胡羯。何日潔清六十州。

譯讀　細雨濛濛として尚未だ休せず。囚中寂寞滴聲幽かなり。悲然亦憶ふ胡羯を攘ふを。何の日か潔清にせん六十州。

題自畫肖像

花依清香愛。人以仁義榮。幽囚何可恥。玉宇有昭明。

譯讀　「自畫の肖像に題す」。花は清香に依りて愛せられ。人は仁義を以て榮ゆ。幽囚何ぞ恥づ可けん。玉宇昭明有り。

大利鼎吉

贈正五位　明治三一、七
合祀　明治一六、五

名は正樹、高知城下上町の人。文久元年武市瑞山の勤王を唱導するにあたり首として其説を贊く。後長州の忠勇隊に入り武名をあげ、慶應元年新選組の爲に刺殺せらる。（二五〇二—二五二五）

辭世

もとよりの輕き身なれど　大君に心ばかりは今日報ゆなり

横山英吉　贈従五位　合祀　明治三一、七、一六、五

名は正利、土州の人。元治元年清岡道之介等、武市瑞山を囚中に救ひ、尊攘の目的を達せんとするに應じ罪にふれて奈半利河畔に斬らる。（二五〇一―二五二四）

もろ人の惜しむ命も惜しからず世の爲　君のためと思へば

木下嘉久次　贈従五位　合祀　明治三一、七、一六、五

名は秀定、杉谷と號す。土佐の人。元治元年九月五日同志と共に奈半利河原に刑せらる。（二五〇四―二五二四）

かゝる時なにか命のをしからむ死して　み國の爲とおもへば

(7) 福岡丁丑の獄

慶應元年十月二十五日福岡藩の志士等が國憲にふるゝ事ありて、加藤司書・齋藤五六郎等に屠腹せしめ、其前後に月形洗藏・海津幸一等を嚴科に處し其餘遠流幽囚等を命ず。

建部武彦　贈従四位　合祀　明治三一、七、二四、九

名は自強、福岡の藩士なり。藩中の奸臣が忠良を貶斥するを見て慨然起つて國政を救正せんとし、却つて禁錮せられ、慶應元年十月二十五日、城下の安國寺にて自刄を命ぜらる。（二四八〇―二五二五）

臨歿作

欽君慷慨志將酬。傷世悲時暫不休。知得鐵腸三寸舌。欲寧六十有餘州。

譯讀　「歿するに臨んで作る」。欽む君が慷慨の志將に酬いられんとするを。世を傷み時を悲みて暫くも休せず。知り得たり鐵腸三寸の舌。六十有餘州を寧んぜんと欲す。

中村圓太　贈従四位　合祀　明治二四、一二、二四、九

名は無二、李不言堂と號し、野口唯人と變名す。筑前の藩士なり。國事に奔走して慶應二年正月自刄す。（二四九六―二五二六）

有志の徒と脫走の砌
ひと筋にわが　大君のみためぞと思ひわけゆく武夫の道

述懷

投筆舉鞭去致身。愧無我力掃胡塵。休言千載多遺恨。王國能生忠義人。

譯讀　「述懷」。筆を投じ鞭を舉げて去つて身を致す。愧づらくは我力胡塵を拂ふなきを。言ふことを休めよ千載遺恨多しと。王國能く生ず忠義の人。

江上榮之進　贈正五位　合祀　明治三五、一一、二四、九

福岡藩の志士、通稱榮之進、磨魂舍と號す。世々武術を以て其藩に仕ふ。慶應元年十月二十三日同志十三人と共に斬に處せらる。（二四九四―二五二五）

姫島に放たれける頃赤馬關にて攘夷のことを聞きて、大島の配所に
ありける藤茂親が許におくる

もろともに秋津島根にまとゐして鞆うちならす時は來にけり

辭　　世

鬼神もあはれとおもへ武夫の命にかへてつくす心を

中　村　哲　藏　贈正五位　合祀　明治三五、一一　明治二四、九

名は敬信。福岡藩士。佐幕黨に陷れられ慶應元年十月二十三日同志と共に樹木屋の獄に斬らる。（二四九五―二五二五）

何事もいたふ心はなかりけり　國のみ爲とはてんこの身は

(8)　丁卯の義擧

慶應三年十一月勤　皇慷慨の志士、京都の密意をうけ同志分れて二隊となり、一は義旗を野州出流山にあげ、一は江戸芝の三田なる薩州邸に潜み、以て討幕の先鋒たらんとせしに早くも幕府の探知する所となり追擊せられて敗績す。

西　山　謙　之　助　贈正五位　合祀　明治三六、一一　明治二四、一一

美濃の人、名は尙義、又要人と稱す。文久の初、諸藩攘夷の論者と親み討幕の企畫をなす。慶應三年末密に三田の薩邸に潜む。後同志と野州出流山に赴き、觀音堂を本營として兵をあげしが終に幕兵と戰ひ飛彈に仆る。（二五〇五―二五二七）

折にふれて

利鎌もて繁木かもとをはらふごとはらひてすてん醜のたぶれら

青雲のたなびくきはみ　天皇の知らさんさざしかねてしるしも

五百歳にとしは隔てどあづさ弓そのなきかずに我もいりなむ

(9)　其　の　他

中　野　治　平　贈正五位　合祀　明治二四、一二　明治二四、九

鳥取藩士。名は元長、字は子善、扇山と號す。文久三年八月本藩側用人黑部權之助等の專權佐幕の措置多きを憤り、同志と共に之を本國寺に捕殺し、後黑部派遣黨の爲に殺さる。（二四九八―二五二六）

逸　　題

欲報君恩不知止。自憐大義存胸裡。人間艱苦悉經過。此際猶缺唯一死。

譯讀　君恩を報ぜんと欲して止るを知らず。自ら憐む大義の胸裡に存するを。人間の艱苦悉く經過す。この際猶ほ唯一死を缺く。

村井政禮　贈正五位　明治二四・一二
合祀　明治二四・九

尾張の人。幣冠子・柴門・群玉堂等の號あり。薩長連合の爲に奔走す。文久三年幕吏に捕へられ慶應三年斬せらる。（二四九一―二五二七）

題しらず

とらはれの身となりぬれど天地に恥づる心は露なかりけり
わたくしの身のためにせぬ事ぞとはかねて知るらむ天地の神
年をへて生ひ茂りぬるえみし草刈り拂ふべき時は來にけり
えみしらと著き夷の外にまた國のえみしもある世なりけり
見よや此の大和をの子の佩く太刀のはがね示さむ四方の夷に

千屋金作

名は孝成、土州藩の人。尊攘のために國を出で、慶應三年二月因州に於て奸黨の爲に圍殺せらる

えみしらを斬りつくさんと思ふのみわがものゝふのねがひなりけり

藤堂平助

名は宣虎、南部與七郎といふ。江戸の人。新選隊士の爲に殺さる。

益荒雄の七世をかけて誓ひてしことはたがはじ　大君のため

第十六、維新以後

(1) 堺浦事件

大町文學士の「伯爵後藤象次郎」の一節に曰く、「明治元年二月十五日……兩隊歸陣して休息せしに、午後四時頃市民周章來り報じて曰く、『只今佛人突然上陸し市中に横行亂暴す。直ちに救助あらんことを請ふ』と。箕浦・西村直ちに隊卒を率ゐて出張せしに、佛人は人家に押入り社寺に亂入し、傲慢無禮至らざるなし。隊卒を指揮して之を制止すれども、通譯一人も伴はざるを以て言語通ぜず。止むを得ず捕縛せんとせしに、軍監より制止の令下りしかば如何ともすること能はず。とやかく訊問する中佛人隙を窺ひ逸走す。その中の一人はわが軍旗をさへ奪ひ去れり。隊卒之を追ふ。漸くにして軍旗をとりかへしたるも、佛人既に小船にのり陸を離れんとして短銃を放發す。『今はこれまでなりこのまゝ去らしては神州の恥辱なり。土藩の恥辱なり』とて、隊長、命を下し小船に向ひて射擊す。佛人三名死し七人負傷し、一人だけ無事にて佛艦チブレキスに收容せられ、六人海中に落ちて行方不明となれり」と。後交渉ありて二十人佛公使面前にて切腹といふ事に定まりて二月二十三日護衞せられて妙國寺に赴く。切腹の場には　晃親王をはじめ東久世通禧・伊達少將以下薩・長・土・肥の警護の士、居並び佛公使はじめ二十人許小銃を携へて臨檢す。皆泰然として死につく。佛人愈恐怖し四肢悉寒戰し、遂

に逃げ去る。而して殘り九士の助命を請ふに至る。切腹したる十一士は妙國寺畔なる寶珠院に葬らる

箕浦猪之吉

名は元章、佛山と號し、高知藩士なり。明治元年二月歩兵小隊司令として泉州堺を警備中、佛艦殺傷事件の爲、佛人の要求をいれて死を賜はる。既に壇に上るや、端坐して先づ我が檢視の諸官に敬禮し、眼光鋭く遙に佛人を睥睨し、一聲高く「咄！佛奴惡むべし。余が割腹を見よ」と。徐に短刀を以て腹十文字にかきゝり、臓腑を攫み出し、佛人に投げつけんとす。介錯人首をうつ。誤りて上部にあたりて深く入らず。再びうつ。首未だ落ちず。箕浦大聲を發し『まだ死なぬ』といふ。三度うちて首おちたり。その剛膽不敵の擧動には衆皆舌をまいて驚歎す。佛人悚然として面色を失し、正視するを得ざりき。（二五〇四―二五二八）

失題

除却洋氛答國恩。決然豈可省人言。唯令大義傳千載。一死元來不足論。

譯讀　洋氛を除却して國恩に答ふ。決然豈に人言を省みるべけんや。唯大義をして千載に傳はらしめば、一死元來論ずるに足らず。

西村左平次

名は氏同。高知藩士。八番隊長として一小隊の兵を率ゐて出張して佛人射殺切腹を命ぜらる。（二五〇五―二五二八）

辭世

風に散る露となる身はいとはねど心にかゝる國の行末

年を經て首と屍は朽るとも名は萬代の後にのこらん

池上彌三吉

名は光則。高知藩士。第三番目に上壇し靜に腹を撫し眞一文字にかき切りて介錯をうく。（二四九一―二五二八）

辭世

皇國のためにわが身をすてゝこそしげるむぐらの道ひらきすれ

大石甚吉

名は良信。八番隊の小頭。從容として座につき、諸官に禮し佛人を睨み、腹十文字にかき切り、靜に血刀を座右におき遙に佛人を睨み兩腕を張りて「介錯人頼む」とよぶ。介錯人聲に應じて一刀を下す。淺くして切れず、再び切るまた切れず、再三再四するも首なほ落ちず七度目にして首はじめて落つ。この間大石は少しも助かず毅然として平生の如し、有司皆色を失し、佛人愈恐怖し四肢悉く寒戰す。（二四九一―二五二八）

辭世

我もまた神のみ國の種なればなほいさぎよきけふの思ひ出

杉本廣五郎

名は義長、六番隊の兵士なり。大石につゞいて切腹す。（二四九五―二五二八）

辭　　世

皇國のみ爲となして身命をすつるいまはの胸の涼しさ

勝賀瀬　三六

名は稠迅、また六番隊の士なり。（二五〇一―二五一八）

辭　　世

かけまくも　君のみためと一すぢに思ひまよはぬしきしまのみち

山本　哲助

名は利雄。六番隊の士なり。（二五〇一―二五二八）

題　しらず

塵ひぢのよしかゝるとも武士の底の心はくむ人ぞ汲む

森本　茂吉

名は重政。また六番隊にして箕浦の部下なり。（二四九〇―二五二八）

人心くもりかちなる世の中に清きこゝろのみちひらきせん

北代　健助

名は堅勝。六番隊の兵士なり。（二四九三―二五二八）

身命はかくなるものとうちすてゝとゞめほしきは名のみなりけり

稲田　貫之丞

名は積成。同じく六番隊の士なり。（二五〇一―二五二八）

時ありて咲きちるとても櫻花なにかをしまん日本たましひ

柳瀬　常七

名は義好。箕浦隊に屬す。（二五〇三―二五二八）

たましひをこゝにとゞめて　日の本の猛きこゝろを四方にしめさん

(2)　戊辰の役

慶應三年十月、德川慶喜太政奉還してより薩・長の行動を憤慨する會・桑以下の諸將士大阪城に聚り、遂に慶喜に說くに兵を以て京師に入り、　君側を淸めんと遂に伏見・鳥羽兩道より進みしが敗退し慶喜大阪より江戸にかへる。斯くして錦旗江戸を征し會津を屠り、五稜郭をぬいてこゝ　皇政全く古に復る。

池田慶徳　贈從一位　明治四〇、五

因州鳥取藩主。字子明、省山と號す。初め昭德といふ。實は德川齊昭の第五子なり。戊辰の役に功あり明治十年八月歿。（二四九七―二五二八）

言志

玉の緒はよし絶えぬとも一すぢにわが　大君の御言さゝげむ
思ふ由ありて
なき數によしや入るとも天翔り　御代を守らむ　皇國のため

柳原前光

伯爵。戊辰の役には東海道先鋒總督たり。維新後元老院議長、樞密顧問官をへて明治二十七年九月三日薨ず。（二五一一―二五五四）

閑適

閑來自適小乾坤。春夏秋冬絶世喧。剛日看經柔日史。一軒風月也　君恩。

譯讀　「閑適」。閑來自適す小乾坤。春夏秋冬世喧を絶つ。剛日は經を看、柔日は史。一軒の風月也（また）君恩。

富山四郎太

名は忠全、薩摩藩の人。明治元年五月越後長岡攻城の折戰死。（二五〇一―二五二八）

懷中のたゝみ紙に書置きたりし歌

から人は死してぞ止まむ我はまたなゝ世をかけて國につくさん

三好監物

名は清房、字は顯民、閑齋と號す。仙臺藩士。夙に勤　皇の心厚く。戊辰の役　皇師を導いて仙臺に入る。僞に禍の免るべからざるを知り自裁す。時に明治元年八月なり（二四七五―二五二八）

生きかはり死にかはりても　國を思ふ赤き心の色は變らじ

(3) 佐賀の亂

初め朝廷は外交を盛にせんとて數次朝鮮に使を遣りしに彼之を受けず、却て無禮なり。西鄕隆盛等之を征せんとせしに、區々たる內治を口にするもの之を納れず、所謂征韓論これなり。かくて征韓論納れられず、民選議院の建白亦行はれず、江藤新平之を憤り、島義勇等と佐賀によりて亂を爲す。時に明治七年二月なり。

江藤新平　贈正四位　大正五、四

名は胤雄、南白と號す。世々佐賀の鍋島家に仕ふ。奥羽平定に功あり。參議・文部大輔・司法卿に歷任す。征韓論行はれずして去り明治七年兵を佐賀にあげ捕へられて刑につく。（二四九五―二五二四）

辭　　世

益良雄の涙を袖にしぼりつゝ迷ふ心は只　君のため

出　郷　作

欲報邦家海岳恩。慷慨杖劍出關門。辰星落々風蕭索。毛髮衝冠壯士魂。

譯讀　「郷を出づる作」。邦家海岳の恩に報いんと欲し、慷慨劍を杖いて關門を出づ。辰星落々風蕭索。毛髮冠を衝く壯士の魂。

失　題

欲拂胡塵盛（下二中）本邦（上）。一朝蹉跌臥幽窓。可憐半夜蕭々雨。殘夢猶迷鴨綠江。

譯讀　胡塵を拂つて　本邦を盛にせんと欲す。一朝蹉跌して幽窓に臥す。憐むべし半夜蕭々の雨。殘夢猶迷ふ鴨綠江。

島　義　勇　贈從四位　大正五、四

字は國華、通稱團右衞門、樂齋又櫻陰と號す。佐賀の人。世々鍋島家に仕ふ。江藤新平と兵を佐賀にあぐ。四月十三日斬せらる。（二四八二—二五三四）

逸　題

吾未能同隱遁流。眉間猶是帶　皇憂。頃來遊息身空老。大策何人護　八州。

譯讀　吾未だ隱遁流に同ずること能はず。眉間猶是れ　皇憂を帶ぶ。頃來遊息して身空しく老ゆ。大策何人か　八州を護らん。

辭　　世

却爲逆賊上刑場。海內誰憐志士腸。勿道從容沈默了。七生殘恨付勤　王。

譯讀　「辭世」。却つて逆賊と爲りて刑場に上る。海內誰か憐まん志士の腸。道ふこと勿れ從容として沈默し了るも、七生の殘恨勤　王に付す。

(4) 神　風　連

また敬神黨とも稱す。熊本縣士族大野鐵平・加屋齊堅・上野謙吾等、平生神道を尊び、守舊の說を持し、明治政府の改新に對し不平を抱き、徒黨二百人を集めて、明治九年十月廿四日夜、火を放ちて熊本鎭臺を襲ふ。勢猖獗なり。翌日、鎭臺、兵を發し討ちて之を平ぐ。

大　田　黑　伴　雄

大野鐵平のこと。安國と稱す。飽託郡なる新開皇大神宮の祠官なり。神風連の主領。（二四九四—二五三六）

搗　衣

夜は寒くなりまさるなり唐衣うつに心の急がるゝかな

おもひをのぶ　二首

おきて祈り臥してぞ思ふ一筋は　神ぞしるらむ我　國のため

限りなき恵におのが百歳の命をすてゝ　君にむくいむ

加　屋　榮　太

通稱齊堅。熊本市錦山神社祠官なり。また神風連の首領。（二四九五―二五三六）

暮吏の爲にとりこにせられける時

七重八重かゝる繩目の恥よりもまこと徹らぬ世をなげくなり

題　假　月　刀

報國丹心空自勞。此生何惜附鴻毛。破除雲霧豈無日。磨礪霜深假月刀。

譯讀　「假月刀に題す」。報國の丹心空しく自ら勞す。此の生何ぞ惜まん鴻毛に附するを。雪霧を破除する豈日無からんや。磨礪霜は深し假月刀。

猿　渡　唯　夫

名は爲久。神風連の徒。年少の故を以て先輩の懇請默し難く一たび家に歸りしが、諸士相次いで自殺せるをきゝ「自分年少といへども豪兵三名をたふし他にも傷を與へたり。死を誓ひながら今生を食るは男兒に非ず」と遂に自刄す。（二五二一―二五三六）

述　懷

割土賣戎夷。一朝　王室危。丹心報　國志。天地神明知。

譯讀　「述懷」。土を割いて戎夷に賣り、一朝　王室危し。丹心國に報ずるの志。天地神明知る。

鬼　丸　競

名は親臣。一旦逃げのびて再擧をはからんとせしがその不可なるを知り自刄す。（二四九七―二五三六）

辭　世

うみの子のあらんかぎりは　皇國のみ爲になれようみの子の末

太　田　三　郎　彦

また年少組の一人。猿渡等と一旦金峰山を去りしが、叔父柴田某の介錯を乞ひ自刄せり。（二五二〇―二五三六）

述　懷

おきふしに御代やすかれと玉たすきかけてぞいのる神のみまへに

不顧一家不顧身。無涯心事訴天神。千秋公評有誰駁。忠節勤　王報　國人。

譯讀　一家を顧みず身を顧みず。涯りなきの心事天神に訴ふ。千秋の公評誰有つてか駁せん忠節　王に勤め　國に報ずるの人。

上　野　堅　固

維新の初め召されて諸陵大屬に任ぜられしも開國の廟謨に慊たらず致仕す。神風連の徒。（二七四一―二五三六）

折にふれて

内日さす都あたりに塵たゝば千里の駒に鞍おかましを

(5) 萩の亂

明治九年十月、前原一誠は朝論と合はず參議を辭して山口にありしが、神風連の擧あるに際し、其徒與平謙輔等と密に黨與を糾合し熊本・秋月の徒と謀を通じ、數百人を率ゐて萩城を侵す。官兵伐ちて之を平げ巨魁數人を斬る。

前原一誠　贈從四位　大正五、四

長州藩士。戊辰の役に功あり、參議・兵部大輔たり。明治九年神風連と謀を通じ兵をあげて斬らる。
(二四九五—二五三六)

書懷

許國丹心不顧身。死生得失風前塵。生來初灌丈夫淚。不孝兄弟殉國身。

譯讀　「懷を書す」。國に許す丹心身を顧みず。死生得失は風前の塵。生來初めて灌ぐ丈夫の淚。不孝の兄弟國に殉ずるの身。

逸題

干戈未定事如麻。身委艱難不思家。默斬姦臣數曆月。十年永負故山花。

譯讀　干戈未だ定まらず事麻の如し。身は艱難に委して家を思はず。默して姦臣を斬り歷月を數ふ。十年永く負く故山の花。

臨刑

我今爲國死。死不負君恩。人事有通塞。風雲弔我魂。

譯讀　「刑に臨む」。我今國の爲に死す。死して君恩に負かず。人事に通塞あり。乾坤我が魂を弔ふ。

與平謙輔

字は居正、弘毅齋と號す。山口の藩士なり。明治九年十月前原一誠と共に亂をおこし捕斬せらる。
(二四九九—二五三六)

就縛

事既至斯無所爲。天制也復奚疑。於今一死非遺憾。恰好神州未滅時。

譯讀　「縛に就く」。事既に至る爲す所無し。天の制なり復た奚ぞ疑はん。今に於て一死遺憾に非ず。恰も好し神州未だ滅びざるの時。

(5) 西南の役

西鄕隆盛征韓論容られず職を解きて鹿兒島にかへり、私學校を設け壯士を養ふ。隆盛に服するもの他縣よりも來り歲餘にして數万人に至る。熊本・萩の亂あるや私學校の生徒また動く、朝廷之を察し警部をやりて物情を視察せしむ。私學校の徒之を誤解し遂に隆盛を擁して明治十年二月兵をあげ、九月退いて城山によりしが南洲自刄して亂全く平ぐ。

西郷隆盛　贈正三位　明治二二・二

通稱吉之助、南洲と號す。菊池源吾・大島三右衞門の變名あり。維新の元勳。明治十年城山にて自刄。明治二十二年大赦罪名をのぞかる。（二四八七―二五三七）

楠公

明籌奇策不可摸。正勤　王事是直儒。懷君一死七生語。抱此忠魂今有無。

譯讀　「楠公」。明籌奇策模すべからず。正に　王事に勤む是れ眞儒。懷ふ君が一死七生の語。此の忠魂を抱くもの今有りや無しや。

送藩兵爲　天子親兵赴　闕下

王家衰弱使人驚。憂憤隕身千百兵。忠義凝成腸鐵心。爲楹爲礎築堅城。

譯讀　「藩兵が　天子の親兵と爲り　闕下に赴くを送る」。　王家の衰弱人をして驚かしむ。憂憤して身を隕す千百の兵。忠義凝り成す腸鐵石、楹となり礎となりて堅城を築け。

辛未作

朝蒙恩遇夕焚坑。人生浮沈似晦明。縱不回光葵向日。若不改運意推誠。洛陽知已皆爲鬼。南嶼俘囚獨竊生。一死何疑天付與。願留魂魄護　皇城。

譯讀　「辛未の作」。朝に恩遇を蒙り、夕に焚坑せらる。人生の浮沈晦明に似たり。縱ひ光を回さずとも葵は日に向ふ。若し運を改めざるも意は誠を推す。洛陽の知已皆鬼となり、南嶼の俘囚獨り生を竊む。一死何ぞ疑はん天の付與するを、願はく魂魄を留めて　皇城を護らん。

桐野利秋　贈正五位　大正五、四

通稱信作、初め中村半次郎といふ。南洲の意をうけて國事に奔走し、戊辰の役に功あり。十年城山より岩崎谷に戰死す。（二四九八―二五三七）

四十四年報國情。棄生執義一毛輕。誰知方寸虛靈裡。吐出勤　王百萬兵。

譯讀　四十四年報國の情。生を棄て義を執り一毛輕し。誰か知らん方寸虛靈の裡より、吐き出す勤　王百萬の兵あるを。

篠原國幹　贈從五位　大正五、四

鹿兒島の人。維新の功を以て陸軍少將に任ぜられ近衞長官たり。南洲に從つて辭職、歸國し俱に兵をあげ十年三月吉次越にて戰死す。（二四九六―二五三七）

失題

飲馬綠江果何日。一朝事去壯圖差。此間誰解英雄恨。袖手春風咏落花。

譯讀　馬を鴨綠江に飲かふは果して何れの日ぞ。一朝事去りて壯圖差がふ。此間誰か解せん英雄の恨を。手を袖にして春風に落花を咏ず。

村田三助

鹿兒島藩士。戊辰の役奥羽に轉戰して功あり、西南の役に與して十年三月戰死す。（二五〇六―二五三七）

從軍示人

百戰艱難勇益加。彈丸硝藥是生涯。鎭西男子無文字。一死只知報　國家。

譯讀　「從軍して人に示す」。百戰艱難勇益々加はり。彈丸硝煙是れ生涯。鎭西の男子文字無きも。一死只　國家に報ずるを知る。

(6) 西南役後

西南役後勤　皇憂國の志を拘きしも或は刺客にたふれ、或は戰死し、或は殉死せし先正の遺詠を收む。

大久保利通　贈從一位　明治三四、五

維新の元勳。舊鹿兒島藩士。一藏と稱し甲東と號す。明治十一年五月十四刺客のために刺されて薨ず。(二四九一—二五三八)

戊辰作

陛辭千里向關東。獨拜　天顏　恩賜洪。一夜難酬臣職重。鞠躬頗致太平功。

譯讀　「戊辰の作」。陛辭して千里關東に向ふ。獨り　天顏を拜して　恩賜洪たり。一夜酬い難し臣職の重。鞠躬頗はく致さん太平の功。

伊藤博文

公爵。明治の元勳。春畝と號す。明治四十二年十月二十六日哈爾賓驛にて鮮人安重根に射殺せられて薨ず。(二五〇一—二五六九)

石狩客次

蹇蹇匪躬豈思歸。滿天風露濕征衣。秋宵石狩山頭夢。尙向黑龍江上飛。

譯讀　「石狩客次」。蹇々たる匪躬豈に歸を思はんや。滿天の風露征衣を濕す。秋宵石狩山頭の夢。尙黑龍江上に向つて飛ぶ。

飲　某　樓

豪氣堂堂橫大空。日東誰合　帝威隆。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在眼中。

譯讀　「某樓に飲む」。豪氣堂々として大空に橫はる。日東誰か　帝威をして隆ならしむるものぞ。高樓傾け盡す三杯の酒、天下の英雄眼中に在り。

書　懷

活識獨應知變遷。平凡何足悟虛言。沽名萬世非吾志。注眼千秋宜祭先。夷險往來如坦道。死生拋着任皇天。我徒須盡勤　王事。勿爲一身圖瓦全。

譯讀　「懷を書す」。活識獨り應に變遷を知るべし。平凡何ぞ虛言を悟るに足らん。名を萬世に沽るは吾が志に非ず。眼を千秋に注ぐ、宜しく先を祭るべし。夷險往來すること坦道の如く、死生拋着して皇天に任す。我が徒は須らく盡すべし勤　王の事を。一身の爲に瓦全を圖ること勿れ。

廣瀨武夫　贈正四位　明治三七、四　合祀　明治三八、四

廣瀨氏もと菊池氏に出で世々岡藩に仕ふ。明治三十七年二月旅順に再度閉塞決行の時戰死。天下英風を傳へて軍神と稱す。(二五二八—二五六四)

寄家兄言志

勤　王大義太分明。報　國丹心期七生。傳家一脈遺風在。誓擧名聲弟與兄。

譯讀　「家兄に寄せて志を言ふ」。勤　王の大義太(はなは)だ分明。報　國の丹心七生を期す。傳家一脈遺風在り、誓つて名聲を擧げん弟と兄と。

指揮福井丸再上旅順口閉塞途

七生報　國。一死心堅。再期成功。含笑上船。

譯讀　「福井丸を指揮して再び旅順閉塞の途に上る」。七生　國に報ず、一死心堅し。再び成功を期し、笑を含んで船に上る。

乃木希典　贈正二位　大正五、一一

伯爵。山口藩士。日露の役に旅順口を陥落す。大正元年　明治天皇に殉ず。擧國歎稱軍神となす。（二五〇九―二五七二）

題しらす

大君のみ楯とならん身にしあればきたへざらめやみがゝざらめや

逸　題

東西南北幾山河。春夏秋冬月又花。征戰歳餘人馬老。壯心尚是不思家。

譯讀　東西南北幾山河。春夏秋冬月又花。征戰歳餘人馬老ゆ。壯心尚ほ是れ家を思はず。

肥馬大刀尚未酬。　皇恩空浴幾春秋。斗瓢傾盡碎餘夢。踏破支那四百州。

譯讀　肥馬大刀尚ほ未だ酬いず。　皇恩に空しく浴す幾春秋。斗瓢傾け盡す醉餘の夢。踏破す支那四百州。

第十七、別　裁　集

岩倉具視　贈正一位　明治一八、七

維新の元勳、堀川康親の第二子。具慶に養はる。黽職にあひ薙髪して友山又對岳と稱す。　明治天皇即位したまふや赦令により京に入る。後右大臣に至る。明治十六年七月二十日薨ず。（二四八五―二五四三）

文久二年八月二十日けふは如何なる日にやはからざるに重き　勅勘を蒙り、籠居すべき旨仰せ下されぬ。恐懼申條なく悲歎血涙無念比するにまた物なし。

勅なれば髪はきりもし剃りもせん清き心は神ぞしるらむ

靈源寺にこもりゐて

こもすればふりさけ見つゝ久方の雲井ばかりぞ眺められける

折にふれて

長門なる豊浦の宮をはじめにてわが神風は吹かんとすらむ

小松帶刀

鹿児島藩士。名は清廉、幼時は尙五郎。維新の際、參與・總裁局顧問たり。明治三年六月二十七日卒す。（―二五三〇）

戊辰作

聞說中原虎狼横。誰先慷慨唱勤　王。腰間頻動雙龍氣。欲向東天吐彩光。

譯讀　「戊辰の作」。聞說中原虎狼横はると。誰か先づ慷慨して勤　王を唱ふ。腰間頻りに動く雙龍の氣。東天に向つて彩を吐かんと欲す。

鍋島閑叟　贈正二位

佐賀藩主。名は齊正。文正庚寅の年封をついで從四位に叙し中將に任ぜらる。文久辛酉致仕して閑叟と號し、明治四年正月十八日薨。（二四七四—二五三一）

偶成

孤島結團意氣豪。西南決背萬重濤。黠奴若有窺邊事。羶血飽嘗日本刀。

譯讀　「偶成」。孤島團を結んで意氣豪なり。西南背を決す萬重の濤。黠奴若し邊を窺ふ者あらば、羶血飽まで嘗せん日本刀。

小原鐵心　贈正五位　明治二〇、一

名は忠寛。大垣藩の執政。維新の際功多し。明治五年歿。（二四七七—二五三二）

偶述

宦海波驚雲又翻。顯榮自古足消魂。誰知今日微臣淚。不灑窮途灑　重恩。

譯讀　「偶〻述ぶ」。宦海波驚いて雲又翻る。顯榮古より魂を消するに足る。誰か知らん今日微臣の淚、窮途に灑かず重恩に灑ぐを。

守衛京師

臣節胸間一片存。仰觀天日照乾坤。熊羆麾下士三百。守護　皇宮第一門。

譯讀　「京師を守衛す」。臣節胸間に一片存す。仰いで天日を觀れば乾坤を照らす。熊羆の麾下、士三百、守護す　皇宮の第一門を。

小橋安藏　贈正五位　大正八、一一

名は以文。字は伯友、香水と號す。長子友之輔の累を以て下獄。後ゆるされて明治五年六月病歿。（二四六八—二五三二）

癸亥十月就獄慨然有感

攘夷之　聖諭、幕府不肯遵奉。貿易駸々、夷狄驕傲、國家衰耗。四民愁怨。而肉食君子、偸安曠日不爲少加意焉。如或言其患害、則嚴譴責之。余亦坐焉。不堪浩歎。

幕府廢　詔勅。甘與腥羶群。何當振正氣。神風清海氛。

譯讀　「癸亥十月獄に就く慨然として感有り」。——攘夷の　聖諭、幕府肯て遵奉せず。貿易駸〻、夷狄驕傲、國家衰耗し、四民愁怨す。肉食の君子は、偸安曠日、爲に少しも意を加へず。如し其患害を言ふあれば則ち嚴譴之を責む。余も亦焉れに坐す。浩歎に堪へず。

獄中作

幕府　詔勅を廢し、甘んじて腥膻と群す。何か當に正氣を振ひ、神風をして海氣を清うすべき。

幽囚不悔老書生。祇恨無人知至情。俯仰寧忘　明主澤。朝々東向拜　皇城。

譯讀 「獄中の作」。幽囚悔いず老書生。祇恨む人の至情を知ること無きを。俯仰寧んぞ忘れん明主の澤。朝〻東向して皇威を拜す。

毛利元純　贈從三位　明治二四、四

幼名銀三郎、後に讃岐守と稱す。山口の支封長門清末藩主。夙に尊攘に盡力す。明治八年三月病んで卒す。（二四九二―二五三五）

玉の緒はよし絶えぬともをしからず　皇御國のみためなりせば

大原重德　贈正二位　明治一二、四

中納言重尹の子。文久三年六月　勅を奉じて幕府の弊政を改む。維新後二年兼議院長官。三年麝香間祗候となる。明治十二年四月薨。（二四六一―二五三九）

奉勅使干幕府

寸心忠與義。臨事不避難。一旦若得幸。終使朝家安。

譯讀 「勅を奉じて幕府に使す」。寸心忠と義と。事に臨んで難を避けず。一旦若し幸を得ば、終に朝家をして安からしめん。

那珂梧樓

名は通高。盛岡の人。初め江幡五郎と稱す。維新の際王師に抗して幽せられ、赦されて文部省に入り榊原芳野と古事類苑を修む。明治十二年五月歿。（二四八八―二五三九）

將赴京師詩以書事

琴易長槍書易刀。士當國難敢辭勞。家人亦解勤王事。賣盡釵裙充戰袍。

譯讀 「將に京師に赴かんとし詩もて事を書す」。琴は長槍に易へ書は刀に易ふ。士、國難に當りて敢て勞を辭せんや。家人も亦解す勤王の事。釵裙を賣盡して戰袍に充つ。

西川吉輔　贈從四位　明治四〇、五

近江蒲生郡の豪商。通稱を善六といふ。夙に尊攘を唱へ巨萬の富を勤皇の士に頒てり。明治十三年五日歿。（二四七六―二五四〇）

題しらす

君と臣の道ある御代にあづさ弓引きもとさすはいかでやむべき

島津久光

維新の元勳公爵。齊彬の弟。明治七年左大臣。二十年九月從一位に叙せられ十二月六日薨ず。（二四七七―二五四七）

壬戌偶成

自出家鄉已二旬。轎舟歷盡幾關津。此行何事君知否。擬掃扶桑國裡塵。

譯讀 「壬戌偶成」。家鄉を出でゝより已に二旬。轎舟歷盡す幾關津。此の行何事ぞ君知るや否や。掃はんと擬す扶桑國裡の塵を。

無題

豐蘆洲裡化西洋。赫赫　皇威日日亡。滿襟不乾憂　國涙。群言何破丈夫腸。

譯讀　豐蘆洲裡西洋に化す。赫々たる　皇威日々に亡す。滿襟乾かず憂　國の涙。群言何ぞ破らん丈夫の腸を。

松平春嶽

舊福井藩主。名は慶永、字は公寧。維新後議定に任じ從一位に叙せられ明治二十三年六月三日薨ず。（二四八八―二五五〇）

ふたつなき命をすてゝ　君がため盡す心は知る人ぞ知る

君のため民のためには二つなき命すつとも惜しくはあらず

副島種臣

伯爵。舊佐賀藩士。蒼海と號す。明治の功臣なり三十八年一月薨ず。（二四八八―二五六五）

有感

金華松島奥東頭。自古風雲向北愁。日本中央碑字在。如今靺鞨屬何州。

譯讀　「感有り」。金華松島は奥の東頭。古より風雲北に向つて愁ふ。日本の中央の碑字在り。如今靺鞨何州にか屬す。

辭職有作

學涉古今才未眞。粗豪爲性德無隣。只有　聖恩與天大。爲容獨立不羈民。

譯讀　「職を辭して作有り」。學は古今に涉りて才未だ眞ならず。粗豪性を爲して德、隣無し、只　聖恩天よりも大なるあり。爲に容る獨立不羈の民を。

長岡護美

子爵。近衞公と東亞同文會を起し支那開發に盡力す。明治三十九年四月八日薨ず。（二五〇二―二五六六）

印度洋舟中遇風

怪雲拖墨月無光。浪湧舟搖印度洋。獨臥恬然枕書處。夢歸日本侍　天皇。

譯讀　「印度洋舟中風に遇ふ」、怪雲墨を拖いて月光無し。波湧き舟は搖ぐ印度洋。獨臥恬然書を枕する處、夢に日本に歸りて　天皇に侍す。

由利公正

子爵。福井藩士。所謂五ヶ條の　御誓文はその建白に基く、造幣局を大阪に設け財政を整理す。明治四十二年四月薨す。（二四九八―二五六九）

題しらす

君のため　國の爲には盡してむ臣の命のあらむかぎりは

君がため思ふばかりに數ならぬ我が身の上も惜まるゝかな

大鳥圭介

樞密顧問官。男爵。舊幕臣。維新の際、榎本等と函館に脱走し、軍敗れて禁錮せられしが後赦さる。日清役には支那・朝鮮に公使たり。明治四十四年六月薨ず。（二四九三―二五七一）

出五稜郭

兵氣衰頽事既窮。翻然代衆殺斯躬。獨羞一片男兒骨。不曝白沙青草中。

譯讀 「五稜郭を出づ」。兵氣衰頽して事既に窮す。翻然衆に代つて斯身を殺す。獨羞づ一片男兒の骨。白沙青草の中に暴さざるを。

山縣有朋

公爵。山口藩士。含雪と號す。明治三十一年元帥の稱號を賜はり、日露戰役の功により大勳位功一級をたまはる。大正十一年薨ず。（二四九八―二五八二）

國の爲　君のためにと一すぢにつくす心は神ぞしるらむ

黑田清綱

鹿兒島藩士にして維新の功臣なり。樞密顧問官。子爵に叙せらる。大正六年鎌倉に薨ず。（二四九二―二五七九）

大君の　みことかしこみ老が身もたふれんかぎり仕へまつらむ

○

荷田春滿　贈從三位　大正八、一一

本姓羽倉氏。通稱齋、一に東麿といふ。伏見稻荷山の祠官。元文元年七月歿。（二三二八―二三九六）

踏分けよ倭にはあらぬからとりのあとを見るのみ人の道かは

賀茂眞淵　贈從三位　明治三八、一一

遠州の人。通稱岡部衞士。荷田春滿の門。田安宗武に仕へ寶曆十年致仕。明和六年十月歿。（二三五七―二四二九）

大御田の水泡も泥（ひぢ）もかきたれてとるか早苗はわが　君のため

谷川士清　贈從四位　大正四、一一

伊勢の人。名は昇、淡齋と號す。安永五年十月歿。（二三六七―二四三六）

なにゆゑに碎きし身ぞと人問はゞそれと答へむ大和魂

本居宣長　贈從三位　明治三八、一一

國學者。伊勢松坂の人。鈴の屋と號す。享和元年九月歿す。（二三九〇―二四六一）

已か像かきたる上に

敷島の大和心を人問はゞ朝日ににほふ山櫻花

さし出づるこの日の本の光より高麗もろこしも春を知るらむ

加藤千陰

江戸の歌人。眞淵の門。芳宣園・耳梨山人・逸樂窩・江翁等の號あり。文化五年歿。(二三九四—二四六八)

千萬の仇に向ひてはしり猪のかへりみせぬを心ともがな

清水濱臣

通稱玄長。泊洒舍と號す。春海の門。文政七年八月歿す。(二四二二—二四七〇)

走り猪のかへりみせぬを心にて　君につかへよまゝすらをのこも

村田春海

國學者。眞淵の門。字は士觀、織錦齋・琴後翁など號す。文化八年二月歿す。(二四〇六—二四七一)

をさまれる　御代の守りの梓弓引なゆるべそものゝふのみち

平田篤胤　贈正四位　明治一六、二

通稱大角、眞菅乃舍・氣吹廼舍等と號す。博識卓見古來の學弊を一洗し專ら國粹發揮に努め尊皇の大義を鼓吹す。門下千餘人に達す。天保十四年九月歿。(二四三六—二五〇三)

皇神の道な忘れそ現身(うつせみ)の世のなりはひはよし繁くとも

人はよしからにつくともわが杖はやまと島根にてむとぞ思ふ

伴信友　贈正四位　明治二四、一二

通稱州五郎、立入と號す。若狹小濱の人。本居宣長の學說に服し、村田春海に賴りて其死後門人となれり。弘化三年十月十四日歿。(二四三三—二五〇六)

述懷

事しあらば　君がみ楯と成りぬべき身を徒らに朽たし果てめや

香川景樹　贈正五位　明治四〇、一〇

鳥取に生れ香川家をついで京都に住す。桂園又東塢亭と號す。天保十四年三月歿。(二四二八—二五〇三)

すべらぎは現(あき)つ神なり秋津洲動くべき世のあらんと思ふな

千種有功

歌人。千々廼舍と號し、正三位權中納言に至る。安政元年八月卒す。(二四五七—二五一四)

人も我も千代の古道立ちかへり正しき道をふまむとぞ思ふ

鈴木重胤　贈正五位　大正八、一一

勝右衛門、又府生と稱す。淡路の人。大國隆正の門。後平田篤胤の學風を慕ひ入門せんとし秋田に赴く。偶ゝ篤胤歿するを以て墓前に於て死後の門人となる。攻學研鑽益ゝ篤胤の說に私淑し、祭政を嚴正にし君臣父子の大道を踏襲し、古傳古義に就いて發明する所多し。文久三年八月十五日黃昏、松平山城守使者と稱し、本所小梅の僑居に來り面會を求むる者ありて之にあふ。客突然刀をぬいて斫る。倉率遂に奇禍に仆る。（二四七二—二五三二）

陳思

天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に樂しくありけり

大君に事へまつるとかためたる心ぞ國のまもりなりける

くろがねの楯にありとも向き立てば射て通さなむ益良雄我は

嘆二御世一

書よみのよわき博士をあなにして夷をうたむ時まつ我は

天海

おほ空の掩ふかぎりは皆がらに吾が　大君の　み代にぞありける

船のへの至るきはみとわだつみのよりて事ふる　君がみ代かな

太刀

大君の御代のまもりの劍太刀身のわたくしに拔かんものかは

題しらす

千萬のくにのえみしの耳きりて山つくらばや武藏野の原

井手曙覽

越前福井の歌人。田中大秀の門。姓は橋。初名尙事、志農夫廼舍と號す。明治元年八月二十日歿す。（二四一七—二五二八）

赤心報國

正宗の太刀の刄よりも國のためするごきふでの鋒ふるひ見む

國汚すやつこあらばと太刀ぬきて仇にもあらぬ壁にものいふ

示人

天皇は　神にしますぞ　すめろぎの　勅としいはばかしこみまつれ

太刀佩くはなにのためぞも　天皇の　勅のさきをかしこまむため

大國隆正

國學者。津和野藩士。仲藏と稱す。天柱山人・佐紀之屋の號あり。明治四年歿す。（二四五二—二五三一）

親のため常は惜しみて事しあらば　君ゆゑ捨てむ命なりけり

八田知紀

歌人。鹿兒島藩士。桃園と號す。香川景樹の門。明治六年歿。（　　—二五三二）

忠

おろかにも我ものとやは思ふべき　君がみ楯と生れてし身を

矢野玄道

愛媛縣の人。平田篤胤の門。通稱茂太郎といふ。明治元年神祇官出仕。又宮内省に入り御系譜編纂に從事す。明治二十年歿。（二四八三—二五四七）

題しらす

我ながら我も尊し　皇神のわきて賜へる我身と思へば

わか魂は天つみ門にとゞめてむよしや憂き世に身はしづむとも

ますらをの心おこしてかし原のひじりのみ代にひきかへさはや

○

村岡矩子

贈從四位　明治二四、一二

姓は津崎。父を左京といふ。近衞家の老女。文久三年幕府に捕へられ、後赦さる。明治六年八月歿。（二四四六—二五三三）

すなほなる竹の林のむら雀　君が御代をぞちよ〳〵とよぶ

東にて嚴しく事とはれける折

五十三次關路の旅のつらさより白洲の上こそ心やすけれ

終身祿をたまはりし時よめる

思ひきや數ならぬ身のかくまでに深き惠の露かゝるとは

野村望東

贈正五位　明治二四、一二

福岡の人。浦野重兵衞の女。藩士野村新三郎に嫁し、和歌に長ず。五十四歳にて寡居し、常に志士を庇護す。慶應元年姫島に流さる。翌年高杉晋作等に救はれ、馬關に來り。後三田尻にうつり三年遂に歿す。（二四六六—二五二七）

あ　る　時

誰が身にもありとは知らで惑ふめり神のかたみの大和だましひ

月照といふ人の薩摩に下るに

たびころも夜さむをいとへ國のため草のまくらの露を拂ひて

浮雲のかゝるもよしや武夫の大和心の數に入りなば

ものゝふのやまと心をより合せ末ひとすぢの大縄にせよ
數ならぬこの身は苦にうもれても日本心のたねはくださじ

筑波山つくしの浪にまつ風のこゑをあはせてはらへ浮きくも

松尾多勢子

贈正五位　明治三六、一一

信濃の人。松尾浮齋の妻、常に朝廷の衰微を慨き幕府の專横を憤り。勤皇の志士の庇護に力む。明治二十七年六月歿す。（二四七一―二五四四）

三月十一日賀茂　行幸に

君と臣の道をたゝすの神垣にいでましの世となるぞうれしき

唐船の來りしといふをきゝて

沈みつるその神風もこりずまに又もよするか沖つ白波

河瀬幸子

贈正五位　明治二四、一二

彦根藩の醫師飯島三太夫の女。長して河瀬太宰の室となる。人と爲り沈靜順和、夫を助けて諸事に周旋し當時志士の出入するもの皆心服す。太宰の捕へられし折新撰組の隊士その家に踏込みしに、幸子少しもさわがず「さらば御召に從ふべけれど婦人の嗜みなれば衣服を改める間まちたまはれ」とて奥に入りけるが、そのおそきにより隊士入りて見れば關係書類を火中にし從容として自刄せり。（二四七七―二五二五）

夫太宰世の御爲にと志しけるが囚となりみづからもまた捕へられむとする時

大君のみ代やすかれとあさいふに祈る言の葉わすれざりけり

黒澤時子

贈從五位　明治四〇、一一

常陸の人。信助の妻。李恭と號す。二十七歳にして寡居す。水戸藩の内命をうけて上京し、捕へられて獄に下る。後赦にあひ明治二十三年五月終る。（二四六六―二五五〇）

玉鉾のみちはあれてもすゝみゆくやまとごゝろの駒はたゆまじ

藤田雪子

藤田幽谷の第二女。

彌生の半えみし船はなほ浦賀にありときゝてよめる

さくら咲く春のみなとによせくともあだにみすべき花のいろかは

兒島强介の母

草臣の東にありける時に贈る

八百萬の神もあはれと見ますらむ　國に盡せるあかき心を

梓弓岩をもとほす心もてますらたけをのおもひたわむな

天皇に身はさゝげむと思へども世にかひなきは女なりけり

思ふふしありて草臣へおくる

女にこそあれ我も行くべき道をゆきて大和心は劣らぬものを

敷島の道は一つを女なりとてなに劣るべき大和だましひ

草臣の囚にありし時送れる

よしや身は露と消ゆともあし原の　國にとゞめよ大和だましひ

劍太刀いよゝとぎつゝものゝふのきよき功をのちに知られよ

別に臨みて

かくぞとは思ひ定めしことながらさすがにうきは別なりけり

兒島强介の妻　光　子

別に臨みて

なす業も何か女々しくたゆたはむ益荒猛雄の妻とある身は

おもひを述ぶる

なまよみの甲斐なき身とてなか〳〵に立てし心の何撓むべき

夫の君におくる

我もまた誓ひくもらぬ心もてそのよき人をかゞみとやせむ

國の爲盡す吾妻の眞心をいかにこの身もあだに果つべき

吉村寅太郎重郷の母

重郷京へ出立しける時

四方に名をあげつゝかへれかへらずばおくれざりしと母にしらせよ

眞木保臣女

父の首途によめる

梓弓はるは來にけりものゝふの花さく世とはなりにけるかな

實兄へ送る書狀の奥に「とゝさまの打死悲しくは候へども

皇國の御爲とおもへばお互にめでたく」

聞く人もあはれと思へ小牡鹿のこゑのかぎりは泣きあかしつゝ

武田千代

武田耕雲齋の長子彦右衞門正勝の妻。文久三年三月二十五日刑死。

辭　世

引つれて歸らぬ旅にゆく身にもやまと心のみちはまよはじ

大　橋　卷　子

大橋順藏の妻。明治十四年十二月歿。（二四八四―二五四七）

折にふれて

八百萬神もあはれと受けたまへ我身にかへて祈るこゝろを
いつまでか曇りはつべき高光る　天つ日つぎの　大宮どころ
天かける魂の行方は　九重の　み階のもとを猶やまもらん

太　田　垣　蓮　月

京都の女流歌人。勤　皇の念あつく、陶器を製し詠歌を書して鬻ぐ。明治十八年十二月歿。（二四六一―二五四五）

男子にておはします人のうらやましければ

弓矢とり太刀さげ佩きて來ん世には　君につかへむ身にうまれてむ

第十八、拾　遺

山　本　誠　一　郎

名は朝正。長藩の下吏、元治元年薩摩の商人大谷仲之進が外人と貿易せんとするを憤りて之を斬り、大阪西本願寺別院門前に梟首し其場にて自刃。（二四九三―二五二四）

辭　世

雨風にちるともよしやさくら花　君がためには何かいとはむ

近　藤　岩　五　郎

名は信成。

辭　世

國のため義の爲命すつるなりなにかこの世に思殘さむ

堤　治　郎

名は忠明。三州の人。（　　―二五二五）

陳　志

遠つ祖のその眞心をうけつぎて　すめ大君に仕へまつらむ

數ならぬ身とは歎かじ我もなほおもへば　君のみたてなりけり
いたづらに朽ちはてめやは　國の爲　君のみたためと思ふ我身は
大君を思ふ心の一筋に家のわざをもうち忘れつゝ
今こそあれ深き淵には潜むとも思ひ立つべき時なからめや

勝山十助

水戸の士。

逸題

死生有命付蒼天。楫折檣摧不偶然。若向洋中埋俠骨。化鯨呑却百蠻船。

譯讀 死生命あり蒼天に付す。楫折れ檣摧くる偶然にあらず。若し洋中に向つて俠骨を埋めば、鯨に化して呑却せん百蠻の船を。

中川義純

肥前の人なり。

絶命詩

五十四年終此世。無仁無義愧無名。國難就死固臣職。魂魄猶留護　鳳城。

譯讀 「絶命の詩」。五十四年此の生を終る。仁無く義無く名無きを愧づ。國難死に就くは固より臣の職なり。魂魄猶留まりて　鳳城を護らん。

佐々木高達

獄中作

縱落賊手豈屈膝。孑然孤囚誰復恤。唯有浩然正氣隨。刀鋸鼎鑊甘如密。

譯讀 「獄中の作」。縱ひ賊手に落つるも豈膝を屈せんや。孑然たる孤囚誰か復た恤まん。唯浩然正氣の隨ふ有り。刀鋸鼎鑊甘きこと密の如し。

臨刑

誓掃妖氣挽皇運。豈圖群醜逞兇頑。縱令身仆俎上肉。正氣長留天地間。

譯讀 「刑に臨む」。誓つて妖氣を掃つて　皇運を挽かん。豈圖らんや群醜の兇頑を逞しうせんとは。縱令身は俎上の肉と仆るゝも、正氣長へに天地の間に留めん。

既刊「思想叢書」

第一編　日本精神に就いてマルクスを語る
第二編　新日本女性訓
第三編　哲學思潮と日本精神
第四編　大阪府郷土史の研究
第五編　日標たるべき將來の社會
第六編　日本神話に關する研究
第七編　資本主義經濟と日本の經濟
第八編　日本精神の哲理
第九編　日本型に依める教育
第十編　我國體の宗教性
第十一編　宗教の文化的價値
第十二編　宣命に表はれたる日本精神
第十三編　經濟と男性及女性
第十四編　國民道德と佛教の理解
第十五編　我國の神話と我國民精神の發展
第十六編　日本精神の復活
第十七編　風集
第十八編　門の風學
第十九編　崎館記述義
第二十編　弘道館記述道義風集
第二十一編　日本婦人の歌集
第二十二編　勤皇詩人の歌集

昭和十三年十月廿五日印刷
昭和十三年十月三十日發行

大阪府思想問題研究會

編輯兼發行者　赤間文三
大阪市北區濱崎町一八番地

印刷者　中井藤藏
大阪市北區濱崎町一八番地

印刷所　大阪出版堂
電話北五五一五・一七四二番

索引

作者

あ

青木新三郎　二〇
安積五郎　七三
淺見安之丞　二二
安島帶刀　一二
姉小路公知　二五
有馬新七　五九
有村雄助　三三
有村治左衛門　五九
安藤誠之助　二二

い

池上彌三吉　一四五
池田慶德　一四六
石川金四郎　四五
石川一　七六
井手曙覽　一七一
伊藤博文　一五六
伊藤健三　九五
伊藤榮太郎　九五
伊東甲子太郎　二六
伊藤甲之助　一〇九
伊藤龍太郎　八九
稲田貫之丞　一四五
乾十郎　七六
井上唯一　一三
入江九一　一〇五
岩倉具視　一五九
胤康　六五

う

上野堅固　一五一
鵜飼幸吉　一三三
梅田雲濱　一三

え

江上榮之進　一三七
江藤新平　一四七

お（を）

大石甚吉　一四五
大國隆正　一七一
大久保利通　一五六
太田垣蓮月　一七八
太田黒伴雄　一四九
太田三郎彦　一五一
大津彦五郎　四四
大利鼎吉　一五五
大鳥圭介　一六六
大庭恭平　六七
大橋訥庵　五五
大橋卷子　一七八
大野木仲三郎　一一九
大原重德　一六二
大河一敏　八
小澤德松　一五三
奥平謙輔　一五八
小澤蘆庵　一五六
小田彦二郎　四八
鬼丸鐵心　一五一
小原鐵心　一六〇

か

春日潛庵　二四
荷田春滿　一六七
勝賀瀬三六　一四九
勝山十郎　一五一
加藤千陰　四四
金子孫二郎　一五五
賀茂眞淵　一六六
蒲生君平　六七
加屋榮太　五五
河合總兵衛　一七八
河合傳十郎　一一九
河合屏山　一六二
河上彌一郎　八
河田佳藏　一五三
河瀨幸子　一七四
河瀨太宰　一二九
河野顯三　四八
川邊佐治右衛門　一五一
河本杜太郎　一六〇

き

岸信藏　九四
北代健助　一四四
木下嘉久治　一三六
清川八郎　一四四
桐野利秋　一五五

く

久坂義助　一〇二
日下部伊三次　一六（六五）
國司信濃　一〇一
來島又兵衛　一〇二
黒澤五郎　四九
黒澤時子　一七五
黒澤忠三郎　五八
黒田清綱　一六六
黒田與一郎　八

け

月照　二
月性　六
玄堂　二三

こ

鯉淵要人　五七
國分新太郎　九四

兒島强介　一七五
兒島强介母　一七六
兒島光子　一二一
小橋友之輔　一六一
小橋安藏　二〇
小林民部　一五九
小松帶刀　一五七
小山春山　六一
是枝柳右衞門　一七九
近藤岩五郎

さ

西郷南洲　一五四
齋藤監物　三〇
佐伯稜威雄　九九
坂本龍馬　一二五
佐久間佐兵衞　一〇五
佐久間象山　一二四
佐久良東雄　三三
佐々木高達　一八一
佐野竹之助　三七
澤宣嘉　八二
澤島信三郎　一三三
猿渡唯夫　一五〇
三條實美　七九

し

宍戸彌四郎　七六
四條隆謌　八〇
信田作太夫　二三
篠原國幹　一五五
柴田市之助　四六
柴山愛次郎　六一
島義勇　一四八
島津久光　一六五
清水濱臣　一六八
白石廉作　八八
信海　二三

す

杉本廣五郎　一四三
鈴木重胤　一七〇
周布政之助　一二三

せ

關鐵之助　三四
赤城宗徳　九六
仙石左多雄　六六
千屋傘作　一四〇

そ

副島種臣　一六四

た

高木元右衞門　一一〇
高杉晋作　一二六
高橋庄右衞門　三一
鶴田陶司
高橋多一郎　三六
高橋雄太郎　一三〇
高島房次郎　四九
高本敬藏　二
高山彦九郎　一三四
高市半平太　一四〇
竹內式部　一
竹志田熊雄　七七
武田耕雲齋　九二
武田千代　一七七
武林唯七　六五
建部武彦　一三六
多田彌太郎　九〇
田中河內介　六二
田中瑳磨介　六五
谷川士清　一六七
谷川豐　五八

ち

千種有功　一六九

つ

堤治郎　一七九
堤李左衞門　六四
鶴田陶司　七

て

寺田忠三郎　一〇四

と

藤堂平助　一四〇
德川齊昭　九
得能淡雲　五六
床井莊藏　九六
戸原卯橋　八五
富山四郎太　一四六
伴林六郎　七五

な

那珂梧樓　一六二
永井雅樂　一二八
長尾郁三郎　六七
長尾秋水　六五
中岡慎太郎　一二五
長岡護美　一六五

中川義純　一八〇
中野治平　一三九
中原太郎　八九
中村圓太　一三七
中村太郎　九五
中村哲藏　一三八
中山忠光　七〇
那須俊平　一二二
鍋島閑叟　一六〇

に

西川吉輔　一六五
錦小路頼德　八一
西島龜太郎　一二一
西村左平次　一四三
西山謙之助　一三九

の

乃木希典　一五八
野崎主計　七六
野村望東尼　一七五

は

芳賀矢一　四六
萩原虎六　一一九
橋口莊介　六〇
橋本左內　一九
蓮田市五郎　四〇
八田知紀　一七二
林子平　二
伴信友　一六九

ひ

東久世通禧　八一
平田篤胤（五八）一六八
平野國臣　八三
山兵介　四七
廣木松之助　四四
廣瀨武夫　一五七
廣田精一　一〇八

ふ

深栖俊助　一三二
深瀨繁理　七七
福岡總助　一九
福谷好長　一二二
福原越後　一〇一

み

箕浦猪之吉　一四二
壬生基修　八一
保田信六郎　一三五
藤田小四郎　九二
保母健　七八
藤田東湖　四
三牧謙介　九〇
藤田雪子　一七五
宮城彥輔　一二八
藤森弘庵　二四
宮部鼎藏　九七

む

村井政禮　九〇
村岡矩子　一〇六
村田三助　一〇七
村田清風　五八
村田春海　一〇〇

も

毛利登人　一一一
毛利元純　一七四
本居宣長（一五）一六七
森喜右衞門　九八
森五六郎　二五
森本茂吉　一六四
森山繁之助　五八
森山新五右衞門　一二四
師岡正胤　一五二

や

矢野玄道　一七三
山縣有明　一六六
山縣大貳　一
山崎信之助　四五
大和國之助　一六
山本誠一郎　一七九
山本哲助　一四四

ゆ

由利公正　一六五

よ

横田友次郎　八八
横山英吉　一三六
吉田重藏　七八
吉田松陰　一七
吉田稔麿　九九
吉村寅太郎　七一
吉村寅太郎母　一七

ら

賴三樹　五

わ

渡邊華山　三
渡邊內藏太　一六
渡邊宗助　一三

和歌

あ

青雲の　一三九
　—たなびく極み　八四
　—むかふす極み　一七
あきの國　一〇三
秋ふかみ　四
あさ繩に　二〇
朝夕に　一四
あしたつの　一〇三
飛鳥川　七七
あたし野に　一二
梓弓　一二三
　—今はとる身に　一七五
　—岩をもとほす　九〇
　—君かみいつを　六〇
　—はるたつ風に　四
　—春のあそびの　一七七
　—春は來にけり　一二五
　—引きてかへさぬ　四
　—矢竹心を　八〇
　—もとすゑたかふ　四九
あづま路を　五六
あなうれし　二一〇
天かけり　一七八
天かける　一〇七
天つ風　八一
天つ日の　一三
天の戸を　一七九
雨風に　一〇三
天地も　二五
天地の　四一
あはれなり　六七
あはれ世に　六〇
あらびなす

い

いかにして　八〇
いかばかり　二一
生きかはり　一四七
幾度も　一〇三
幾千度　三三
幾千代も　二一
いざ子供　九八
いざや子ら
　—おくれなとりそ　一〇三
　—劍ときはけ　一七三
五十三次　一七三
いたづらに
　—くちはてめやは　一八〇
　—死ぬる
　—ちる櫻とや
いつまでか　一〇七
いとゝしく　八一
いとはじな　一三
古に　一七九
古の　一〇三
命だに　二五
言へばうし　四一
五百歲に　六七
五百歲の　六〇
今こそあれ
今更に
　—何をかいはん
　—わか身
今しばし　一四七
いましめの　一〇三
今はたゞ　三三
今ははや　二一
岩にだに　九八
岩山も
色香をば
色香をも
色に出てゝ

う

浮雲を　一二八
浮雲の　三九
　—おほふ袮　一七八
　—かゝるもよしや　一二八
　—かゝらばかゝれ　九九
うきことは　一二三
動きなき　五三
動きなく　三四
うす紅葉　一三一
討たれたる　一二九
うち日さす　六九
討つもまた　一八〇
うみの子の　一二

え

えみしらを　八四
えみしらと　七六
　—しるき夷の　七六
　—ともに東夷を　一〇六
えみし舟　五〇

お

老の身の　八二
大君に　一〇八
　—さゝけまつりし　一二九
　—事へさゝぐる　七七
　—事へぞまつる　一七〇
　—事へまつると　一七〇
　—直くつかへて　六〇
大君の
　—うきを我身に　五三
　—うきみ心を　三七
　—おほみ心を　八〇
　—おほみ心を
　そよとだに　二五
　—おほみ心を
　やすめんと　七四
　—たまのみ楯　二一
　—ためには　二五
　—へにこそ死なめ　二五
　—まけのまに〳〵　八〇
　—み心しらば　二五
　—みことかしこみ　一六六
　—みことのまゝに　一一〇
　—みたてとならん　一五八
　—みためと盡す　七八
　—み旗の下に　六三
　—み代のまもり　一七〇
　—み代やすかれと　一七五
　—惠あふぎて　八二
大君はいかに　八〇
おふけなき　九八
負ふ征矢の　七四

おほ空を　六五
大空の　一七〇
大御田の　一六七
王山に　一二
王山の　一〇七
おきていのり　一四九
おきてなげき　三四
おきふしに　一五一
おくれても　一二六
後れなば
　—色も櫻に　一〇七
　—梅も　八七
をさまれる　一六八
おしなべて　一〇一
鬼神も　一三八
おのが身に　一一〇
おもひかね　九五
おもひきや
　—かずならぬ身　一七三
　—心しづかに　四九
　—心のはしの　四四
　—山田の案山子　七一
親思ふ　一八
親親の
　—うけし　五三
　—親より　七六
親のため　一七一
愚かなる
　—身も古に　一〇
　—我をも　一八
おろかにも
　—千代萬代と　四三
　—わかものとやは　一七二

か

かゝる時
　—何か命の　一二三
　—何か命の　一六六
かきくらす　四
かぎりなき　一五〇
かくすれば　一七
かくぞとは　一七六
かくばかり　八四
かくまでに
　—青人草　一〇三
　—しげりはてたる　四八
かけまくも　一四四
かしこしや　二五
かずならぬ
　—草の
　—この身は　八四
　—幾か玉の緒　一七四
　—身とは　一三三
　—身にし
　—身には
風にちる
風はらふ
かぞいろの
片しきて
かたちこそ
語らはん
蟹文字を
かねてより
　—思ひそめにし
　—立てし心の
かはかみの
かばねをば
かへりみる
神風の
神ならで
から人は
かりそめに
かりならぬ
かりの世に
かわくまも
かんばしき

き

聞く人も　一八〇
君をおもふ　六五
君かため　八四
　—赤き心を　一四二
　—命しぬべき　一〇六
　—家をも　五〇
　—思ふばかりに　九二
　—思ひをはりし　一〇六
　—思ひのこさで　八五
　—かたき心は　一〇
　—しづむひとやは
　—死なんと　九三
　—すつる命は　一二五
　—すてん命の　八七
　—塵と屍を　一一二
　—盡す心の　一二五
　—盡す心は　四
　—盡せし甲斐　一三四
　—身をつくしつゝ　一四七
　—世の爲つくす　三三
　—世の爲よしや　三〇
君か代を　一二九
　—おもふ心の　九六
　—おもふ心の　四一
　—すぢに　七八
君か世の　一七七
君か代は　一三〇
君と臣の
君の爲
　—家をも　七二
　—國のため　三四
　　とし思はずば　六九
　—國のためには　三
　—すつる　一六五
　—民のためには　一二八
　—盡す心は　一六四
　—ひそみ行く　四〇
議論より　三〇
　　　　　一〇二

く

くさなぎの　六二
くゞのふみ　八
碎けても　一〇七
國をうれひ　一一
國々の　二五
國けがす　一七一
國つふみ　四六
國の爲
　—岩をも　一二二
　—思ひかけたる　三一
　—思ひつくばの　四八
　—かゝるうき目も　四四

—義の爲　一七九
—君の爲にと　一六六
—君の爲には惜しからぬ　七三
—君の爲には露の命二　六九
—死なんと　一一一
—盡し盡せし　六九
—盡して死なば　一七七
—盡すあづまの　一二六
—世の爲なにか　五三
—世の爲なれば　五八
くもとなり　七一
くもりなき　一
くもるとも　一〇六
くらき夜に　一〇一
くるしさは　一七〇
くろがねの　四〇
くろがねも

こ

こけの下　四四
心あらば　一〇五
心から　一一六
心のみ　八三
心よく　八五
ことあらば　三〇
ことしあらば　一六九
—君かみたてと　七四
—誰か命を　三三
—わか大君　七八
—わか名に　八九
事なきを　二一八
このまゝに　六〇
この身こそ

さ

咲き出でゝ　四七
魁けて　一二五
咲く梅の　九五
櫻咲く
—春のみなとに　一七五
—み國しらすと　五八
櫻田の　三八
櫻花
—咲き〳〵わひて　三三
—たとひちるとも　一二五
さゝげつる　七五
さし出づる　一六八
里人の　一二七
五月雨の　一七
五月蠅なす　八八
五月雨なす　四

し

敷島の
—錦　一七四
—道は　一六八
—大和心を　五八
人とはど　一七六
—大和心を　五八
たれとして　二一
—大和撫子　一〇
—大和の人は　八二
茂りあふ　八八
しこ草を　五一
しこ草の　一〇三
しづたまき　一七四
しづみつる
しひて吹く
—嵐の風に
—嵐のさそふ　九四
しらぬ火の　一一八
しらま弓　一〇四
身命は　一〇一

す

すさびなす　一四五
すなほなる
すべらぎに　一一
—つかへまつれと　三三
—身はさゝげんと　一七六
すべらきの　一七〇
—みたてと　一六九
—みちな忘れそ　一七六
すべらきは　一六九
—あきつ神なり　五八
—神にしますぞ　一七一
すべろぎに　二二
すべろぎの　一〇
—みたため　八二
—み代を　八八
すめがみの　五一
すめぐにを　一〇三
すめぐにの　一七四
—爲に醜臣　九四
—爲にわか身を　一四三
—みためと　一一八
すめらぎの　一四四
すめろぎの　一二五
　　六九
　　一〇一
　　一四五

た

誰が爲の　六〇
誰が身にも
田子の浦に　一七三
たゞさずも　四六
たゞ見れば　一〇
太刀佩くは　一七一
たとへ身は　九五
旅衣　一七三
たふれても　五一
たふれらが　五三
たまきはる　七七
たましひを　一四五
たましひは　一二二
たまちはふ　九五
玉手箱　一三〇
玉の緒の
—たゆともいかで　九六
—たゆともよしや　二二
玉の緒は
—うき世の　八一
—光消えなば　八〇
—よし絶えぬとも　一六三
—をしからず
—よし絶えぬとも　一四六
—一筋に
玉鉾の
—道ある國　八九
—道はあれても　一七五
—道一筋に　八六
—道わかぬまで　一一

たちちねに　八九
たらちめに　四一
誰もみな　一〇
たわやめも　二二

ち

勅なれば　一五九
千萬の
—仇に　一六八
—國の　一七一
塵あくた　三二
塵ひぢの　一四四
散る時は　四八

つ

盡しても　七二
筑波山　一七四
罪なくて　六七
露の間も　六〇
露の身の　一八
劍太刀
—いよゝときつゝ　一七六
—さやにをさめて　八六

て

敵彈に　六八
敵しあらば　八九
手ずさみの　四一

と

利鎌もて　一三九
時ありて　一四五
時のまに　七四
年をへし　七五
年をへて
—生ひ　一四〇
—かはらぬ　一〇五
—首と尸は　一四三
年月は　一三四
外つ國の　三四
とても死ぬる　九九
とにかくに　一二八
飛ぶかりに　二九
遠つ祖の　一七九
ともすれば
—月のかげのみ　三七
—ふりさけ　一五九
虎ほゆる　七七
とらはれの　一四〇

な

長門なる　一五九
なか〳〵に　一〇
ながらへて　六九
なき數に
歎くにも
夏の夜の
なす業も　一三九
七度も　一四五
七重八重　七四
何かその　七五
何事も　一四〇
名にしおはど　一〇五
なに故に　一四三
なにはえや　一三四
なまよみの　九九

に

にごらじの　一二八
西北の　二九
西の海　一七九
西東　三七

ぬ

沼水の　一五九

の

後の世も　一四〇
なか〳〵に　一〇
ながらへて　六九
なき數に
歎くにも
夏の夜の
なす業も　一三九
七度も　一四五
七重八重　七四
何かその　七五
何事も　一四〇
名にしおはど　一〇五
なに故に　一四三
なにはえや　一三四
なまよみの　九九

に

にごらじの　一二八
西北の　二九
西の海　一七九
西東　三七

ぬ

沼水の　一五九

の

後の世も　一四〇

は

はぐゝみし　二
はこだての　六三
走り猪の　一四六
機をたち　六四
花見にと　一七六
　　一七
　　一四〇

ひ

比叡の山　八二
—登りて見れば　一三八
—見おろす方ぞ　一〇六
ひを蟲の　一七七
引つれて　二
人心　一七六
一さかり　一八
—思ひこめたる　一四三
—思ひこめてし　三五
—わが大君の　六
一たびは　二四
人の目に　四
一日二日　一七八
人みなの　一〇六
人ははよしから　三二
人も我も　一〇五
日のみかげ　七四
日の本を　五一
日の本の　一二六

ふ

吹きおろせ　一二四
吹く風に　四八
臥して思ひ　九〇
二つなき　一六四
舟のへの　一七〇
文ひらく　一二六
ふみよみの　一七〇
踏分けよ　一六七
冬の夜は　八六
ふりすてゝ　一二
ふりつもる　四一
故郷に　一二

ほ

戈とりて　三九
杜鵑　一〇六
骨を粉に　六二

ま

まがつみの　九四
まがつみは　一五

眞木のたつ　一〇三
眞心を　二四
正宗の　一七一
ますかゞみ　二九
ますらをの
—心おこして　一七三
—七世を　一四〇
—涙の袖を　三〇
まつろはぬ　三三
まもる人の　一〇一
わがつみは　一五

み

身をくだき　一二六
身をば粉に　九九
み國まもる　一二五
身し死なば　二一九
見よやこの　一四〇
見よやみよ　四八
身はかくて　三五
身はたとひ　一八

む

武藏野の　四〇
—あなた此方に　一二
—露とこの身は　一二
—原に　三九
結びても　九九

め

女にこそあれ　一七六

も

もとよりも　一三五
ものゝふの　一〇三
—臣の男は　六三
—思ひ定めて　一〇八
—かゞみともせよ　九四
—しぼりつめたる　一〇四
—道こそ多き　一七四
—大和心を　一三一
—大和心の　一〇六
百敷の　六二
百歳を
諸共に
—秋津島根　一三八
—思ひいる矢の　三八
諸人の　一三六

や

やがて見よ　一二〇
やすみしゝ　一七

八重葎
八百萬　九九
八百萬の
闇夜ゆく　一七六
八幡神

ゆ

行末も　一三五
弓矢とり
弓矢とる

よ

よしあしは
よしや身は
—いづこの浦に　一七四
—露と消ゆとも　一三一
よしやよし　一〇六
よそ目には　六二
よにありて
世のさまを　一三八
世の爲と　三八
—思ひこしぢの　一三六
—思ひつくせし
—わか爲らぬ　二〇
世の塵を　一七
世の中を　三八
—うきを忘れて　一七八
—うきてふうきに　一七五
—人は何とも岩清水　七四
—人は何共　七八
言はゞいへ
世の人は　一二六
よもに名を　八二
よろづ代の　一七八
よろづ代も　八〇
夜は寒く　二
夜は寒く　九九

わ

わが命　一〇九
わが太刀の　八四
わが魂は　二二
—天つみ門に　一七六
—但馬の國の　一〇二
—なほ世に　三五
—やがて雲井に　八五
わがつみは　一三三
わが胸の　一〇九
わしたかの　一五
わたくしの　四〇
わたつみの　八六
われをわれと　九二
われながら　一七二
我一人　六二
我も赤　一七五
—神のみ國の　一四三
—誓　一七七

漢詩

あ

嗚呼赫々　一〇八
愛讀文山　五五
仰不愧天　三六
仰不恥天　八七
朝蒙恩遇　一五四

か

欲レ雪二王家一…　二二
王家衰弱　一五四
櫻樹未レ開　七二
怪雲施レ靄　一六五
海怪群飛　三三
回首蒼茫　一八
海城寒柝　六五
慨然發レ憤　一一四
海内元來　一一七
自レ出二家鄉一　一六三
學涉二古今一　一六五
家君聞レ變　五四
家山遠隔　六八
賈生憂憤　五
活識獨應　一五七
曾誅二元使一　五二
却爲逆賊　一四九
上安二聖主一　五四
環海千萬國
宣海波驚　五
干戈未レ定　一六〇
關左男兒　一五二
嚴頭松柏　七三
閑來自適　二五

き

執レ義廿三春　一三
聞說中原　一六〇
呼レ狂呼レ賊　三九
虛無寂滅　一七
金華松島　三三
欽君慷慨　一八
勤王大義　六五
金風颯々　二八

く

賣レ國奸臣　五四
憂レ國傷レ時　六八
憂レ國去辭レ親　五
報レ國丹心　一五七
許レ國丹心　五二
排レ雲欲手　一六
苦寃難レ洗　一四九
君恩深似レ海　五
欲レ報二君恩一業　一六〇
欲レ報二君恩一不　一五二

け

傾覆欲レ支　一四六
刑死累々　五六
瓊矛劍闘　八
決然國レ去　三八
寒寒匪躬　一五七

こ

豪氣堂々　一五七
豪傑不レ論　四六
皇國威名　一〇四
弘道館中　一二
皇道久衰　四三
回レ首蒼茫　一八
皇路傾危　五二
胡雲漠々　一〇四
國家當此　一三
齋レ志青年　五三
五十四年　一〇〇
誓レ拂二胡塵一　四〇
欲レ拂二胡塵一　五三
孤島圍結　一〇〇
事有レ機宜一　一四
事既斯至　三
琴易二長槍一　一五三
此時此恨　一六三
細雨濛々　七二

さ

妻臥二病一牀　一五
櫻井遺言　一四
昨自二鞍山一　一三
更無一議　二七
山骨如レ枯　二三
三歲獨嬰　一〇五
三十三年　一三
三十七年　六六
三十年來　一三五
殘星炯々　六五
志願未レ成　一二四
死期有レ日　三五
事業未レ成　二
時事關レ心　八〇
死生有レ命　三一
死無レ補レ國　一八
四十四年　二六
七生報レ國　一五五
七里江山　一五八
叱々叱々　六
秋水鋏寒　二五

秋來無酒　九六
從來世事　九三
從來忠憤　四九
承久元弘例　三
指難將軍　七
小籌大策　二三
勝敗由來　八五
丈夫據義　四八
丈夫三十　三
丈夫生有　三
生來兩度　五三
如今何必　一三〇
神州士氣　九〇
神州大義　五四
欲爲神州　二九
神州風氣　二
人生得失　五七
臣節胸間　一六一

す

既以一身　四二
寸心忠與義　一六二

せ

捨生取義　七二
靜窓攤卷　八六
星斗闌干　九五
成敗是常　一二四
西風撲獄　五八
性來不嗜　三三
生來兩度　五二
絕海連檣　五
伏節元期　四二
雖傾千瓢　四四

そ

疎狂憂國　五〇
俗士不知　一二八
謗者任汝　一一四
尊攘多年　一二一
尊王攘夷　五五

た

欲明大義　四三
欲挽頽瀾　四二
只合是非　五七
縱落賊手　一八一
縱全藩人　八五
多年心志　一〇二
多年空過　一三二
誰識丈夫　八
誰言忠孝　六八
男兒豪勇　一二〇
男兒自分　一三二
端𥈞維時　一二
丹心憂國　一四
單身一自　五八

ち

誓掃妖氣　一八一
智士傍觀　一〇九
地沿南溟　一〇七
忠義由來　八九
忠誠元不恥　一〇八
死忠死孝　七三
忠良將士　六二

つ

月冷髑髏　九三
割土賣戎　一五〇
妻臥病牀　一四
獲罪三年　二七

て

鼎鑊如飴　六八
鐵衣鞍馬　九三
鐵馬聲寒　八七
手提長劍　一〇
天下誰人　四〇
天下滔々　六三
天地何邊　六五
天地無心　六〇
尊攘天朝　六
諂媚成風　五六

と

東去西來　五〇
東西南北　一五八
堂々神國　六八
滔々走利　一二七
當年意氣　一五
當年乃祖　三三
道理貫肝　四二
慨時憂世　九三

な

南山萬里　一〇

に

二十六年　一〇
二十六年　一三一
日出國兮　七三
人間行路　一二六

は

陪臣執命　九八
白癡相率　五五
臨縛慨然　一六
幕府廢詔勅　一六一
花依清香愛　一三五
萬條愁緒　三五

ひ

莫援承久　三
肥馬大刀　一五八
百戰艱難　一五六
百魔千障　八八
兵庫津東　七
豹是留皮　四二

ふ

俯思鄉國　四
佛法三寶道　一一
投筆擧鞭　一二七
普天率土　一二
踏破千山　三一

へ

兵氣衰頹　一六六
陛辭千里　一五六
平生要救　五三
不嚴兵備　七

ほ

欲報邦家　一四八
報國未成　七八
報國丹心　三六
報國丹心　一五〇
豊蘆洲裡　一六四

ま

伏枕期年　二四
枉就幽囚　三六
學而時習　一〇九

み

潜身報國　一一三
身嬰劍銍　四三
身處危難　二七

む

夢裡空過　六三

め

明籌奇策　一五四

も

不須健筆　一九
本是神州　七五
元期一死　一三三
元期萬死　九四

ゆ

幽囚不悔　一六一
幽囚不許　五
幽窓影冷　一二一

よ

洋夷猖獗　一〇七
除却洋氛　一四二
憂世嗟君　三五
通好西戎　五四

ら

磊々軒昂　一九
落々乾坤　六四
洛陽送公駕　一二三

り

立志艱間　一一〇
龍頷虎口　八五
綠酒寒歡　四二

れ

烈風如刄　三五

ろ

老楠背日　七五

わ

吾今死于國　一二九
我今爲國死　一五三
吾未能同　一四八
我雖方外　七

終